
思議のダンジョン 探検隊サンライズの冒険語 第1部～時限(とき)を越えた出逢いと絆が僕らを導

はびねす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン 探検隊サンライズの冒険語 第1部^{とき} 時限を越えた出逢いと絆が僕らを導く

【Nコード】

N3295W

【作者名】

はぴねす

【あらすじ】

ここはポケモンだけが住んでいる世界——その世界の海岸とある1匹のポケモンが倒れていた。そして、ギルドに入りたくても入れない1匹のポケモンがいた。その2匹が出会い、彼らの元に仲間が集いし時、運命の歯車が動き出す——

プロローグ 嵐の海（前書き）

初めて書く小説です！どうぞ 暖かい目で読んでいってください。

プロローグ 嵐の海

く???く?

「…はあ…はあ…」

「だ、大丈夫か??しつかりするんだ!!」

辺りは暗く、時折光る雷光が唯一の灯りだった。

「もう…いい…。手を放してくれな…いか…」

「な、何を言うんだ!?もう少し…あと少しの辛抱だからがんばるんだ!!」

そこにいた2人は手を握っていた。しかし、そのうちの1人はかなり苦しんでおり、もう1人が必死に声を掛け続けていた。

(しかし、このタイミングで…もしヤツが…きたとでもしたら…)

声を掛け続けていた1人が思考を巡らしていた時だった。

「…ピシャン!」

「くっ?!」

2人の近くに雷が落ちてきたのである。

「!!…このままだと…いけない…!!」

「?!おい!手を放すな…!!」

苦しんでいた1人が手を放したその時、雷がその1人にめがけて落ちてきた。

「ピシャン！ピシャン！ピシャーーン」

「や…やめろー！ー！」

「あっ！？っ…っわあああああ！ー！」

今日はとても荒れていた。海もまるで狂暴な怪物が牙を剥いているように何度も波打ち際を飲み込んだ。それは、何かが起こる予感が渦巻く…嵐の夜だった。

プロローグ 嵐の夜 完

ブローグ 嵐の海（後書き）

ブローグということでかなり短かったです。次回からは長く書けるように努力しますので、気になる方は是非読んでみてください
♪

#1 運命の出逢い（前書き）

いよいよ、本編の始まりです！そしてついに、主人公とパートナーの登場します！

#1 運命の出逢い

「ギルドの前」

「うーん…どうしよう…」

高台に何かのポケモンの上半身が建物となっている——ギルドと呼ばれる場所に1匹のポケモンがうろついていた。

「…いや、今日こそ覚悟を決めてきたんだから…大丈夫な…はず」

と目の前にある格子のようなものを見ていた。そして、その上に乗った。すると…

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

「誰の足型？誰の足型？」

突然下から声が聞こえてきた。

「きゃあー!!」

そのポケモンは驚いてしまい、格子から離れてしまった。

「足型は…あつ、離れました」

「…はあ…またか…」

下から何かやりとりをしている話声が聞こえたが、そのポケモンの耳には入っていないかった。

「はあ…またやっちゃったよ…」

ひどく落胆をしていた。すると、懷から何かを取り出したが…

「…今日は、宝物も持ってきたからいけると思ったのに…やっぱり私って意気地なし…なのかなあ…」

独り言をいい終えたのと同時にそれをしまつて、ゆっくりとその場を去っていった。…そこで怪しく蠢く2つの影に気付かずに…

〈海岸〉

「…うつ…」

ここは静かな海岸。そこに1匹のポケモンが倒れていた。

「…！…誰かが来る…でも、体が動かない…くそ、意識…までも…か」

そのポケモンが意識を手放した後、海岸ではクラブ達が集まっていた。そして、彼らは夕陽が沈み始めた水平線に向かって、大量の泡をはき出した。その泡に夕陽の光があたり、まるで宙に漂う宝石のように輝いていた。

「うわぁーやつぱりきれいなあー」

と感嘆の声をあげたのは、先ほどギルドの前にいたポケモンである。

「…今日も見れてよかったよ。私、何かあるたびにここに来てこの風景を見ているんだよね…」

誰も聞いていない海岸で1匹語るそのポケモン。どうやら、ここは彼女のお気に入りの場所のようだ。

「…よし。明日こそ頑張って入門を…ってあれ？」

決意を新たにし、立ち去ろうとしたその時だった。近くにあった洞窟から少し離れた所にポケモンが倒れていたのだ。彼女はその倒れているポケモンの所へ駆け寄る。

「ねえ！君！？大丈夫！！？」

「…う、うん…。…ここは…？」

倒れていたポケモンはようやく気がついた。

「ふう〜よかった…どこもケガがないみたいで…あっ、ここはトレジャータウンから少し離れた所にある海岸で君はここに倒れていたんだよ？」

「……が喋ってる…」

「えっ？どうしたの？」

「…なんでポケモンが……ロコンが喋ってるんだ！??」

先ほど心配してくれたきつねのようなポケモン…ロコンに向かって驚きを隠せないと言わんばかりの口調で言うポケモン。

「えっ？なんでって…そんな驚くほどじゃないよ…?」

「な、なんで当たり前のように言ってるんだ!？」

「だって当たり前だよ？君だってポケモンだし…」

「な…?!俺がポケモン…!?!…違う…俺は……俺は人間だよ!!」

「ええっ!?!人間!!?」

ロコンから見れば信じがたい話だった。何故なら彼はポケモン。そして…

「…君はどこからどうみてもリオルだよ!!」

「俺がりオルっていうポケモン!?!…そんなわけが…」

その時、2匹の間に先ほどのクラブが出した泡が割って入ってきた。そこには――

青い体に手足が黒く、目尻から耳が片方に1つずつ垂れ下がっているポケモンが映っていた。

「そ…そんな…完全にリオルになってる…(…でも、なんでリオルになったんだ…?)」

急に落胆したかと思えば何か考えはじめるリオル。そんな様子を見

てロコンは…

「…ね、ねえ。君、さっきポケモンだよって言われて否定したと思ったら、急に落ち込んで…そしたら、何かソワソワしているし…ひよっとして、私を騙そうとしているの…？」

完全に怪しいヤツを見てるような視線でリオルを見据えていた。しかし、その瞳には不安と恐怖で揺らいでいる。

「いや…！そんなつもりじゃなくて…その…」

「…じゃあ、名前を教えてください？私はキュベレーっていうの。」

ロコン——キュベレーに言われて落ち着いたリオルは腕を組みしばらくうつらうつらした後、

「…俺の名前は…フィールド…」

「フィールド君ねえ…」

一応名前を教えたリオル——フィールドだが、キュベレーはまだ警戒を解こうとしなかった。

「…そういえばフィールド君はどこからきたの？」

キュベレーに質問されてまた考えたが…

(…あれ？そういえば俺はどこから来たんだ？…駄目だ…)

「…ねえ。本当に大丈夫なの？」

「あつ、ああ…(警戒しながら聞くなよ…)」

とフィールドはそう思いながら再び考えるが…

「…思い出せない…」

「思い出せないって？…それってまさか…！」

「…どうやら記憶喪失みたいだ…」

「ええっ！！？記憶喪失！！？？」

「ああ…自分の名前と人間だった事以外は考えても思い出せないんだ…あつ！」

「どうしたの？まさか思い——」

「言っておくけど、俺は怪しくないからな！」

「……がくっ!？」

何かを思い出したようだがその内容がフィールドの記憶と全く関係がなかったため思わずすっこけたキュベレー。しかし、フィールドと話しているうちにいつの間にか警戒心が解けていた。

「（…フィールド君はやっぱ怪しくないかも…。）…あのね、さっきは疑ったりしてごめんなさい…」

「えっ！？ やつと俺が怪しくないって分かってくれた?!」

思わず、キュベレーに近寄るフィールド。

「う…うん（か、顔が近いよ…）。…ここのところ、悪いポケモンが増えてきて、突然襲ってきたり油断しているところを襲ってくるの…」

「そうだったんだ…（何か嫌な気配がするな…俺達以外にも誰がいるのか…とりあえず話が終わったら聞いてみるか…）」

そして、キュベレーが話を一区切りつけた時だった。フィールドが先ほど考えた事をキュベレーに聞こうとした時、キュベレーの後ろに誰かがいたのだ。

「キュベレー、危ない！ 後ろに誰がいるぞ!!」

「…えっ？」

1 運命の出逢い 完

#1 運命の出会い（後書き）

フィールド「やっと俺達の出番だな」

はい！そうですね♪

キュベレー「あの後、私どうなるの？」

それは次回詳しくやりますよ。

それでは！

#2 小さな勇気（前書き）

2日連続更新！

そして、今回はキュベレーの視点で書いてみましたよ。
フィルド「おおー！んで出来具合は？」

あんまり自信ないかもです♪

キュベレー「それって前書きで言うことなのかなあ…」

#2 小さな勇気

SIDE：キュベレー

「キュベレー、危ない！後ろだ！！」

「…え！？」

フィールド君に言われて後ろを向こうとしたけど時

ドン、と鈍い音が近くで聞こえた。それと同時に視界が段々と斜めになっていき――

私は砂の上に倒れていた。そこから少し経ってから、体に痛みを感じた。少し痛い…。

「おい！大丈夫かつ！？」

「おっと、すまねえーな！」

心配してくれているフィールド君をよそにわざとらしい言い方で謝ってきたのは、丸くて体に穴が空いていてそこから煙が出ているドガースと言うポケモンだった。

「おい。本当に謝っているのか？」

「ケツ。これでもちゃんと謝ってるぜ？心をこめてなあ。…それよりも、クロ！」

ドガースが横目で見ながらポケモンの名前を呼ぶ。彼の視線を追って見てみるとそこにはじもじり蠕動のようなポケモン、ズバット――クロがいた。彼は器用に翼を使って何かを持っていた。

「…あつ！それは！？」

ズバットが持っていたものとは、私の大切な宝物だった。

「…おや？これはお前の大切な宝物じゃなかったわけ？」

「…！なんで…！なんでそんな事を知っているの！？」

私が驚いてる様子を見て意地悪く笑いあう2匹。

「なんだ？俺達に後を付けられていた事を知らないとは…！これはとんだマヌケみたいだなあ？」

「ええっ！？」

まさか、後を付けられていたなんて…！！そんな事も気付かなかった自分が情けなくなつて体が震えてきた。

「どうした？これはお前の大切な宝物。取り返しに来ないのあ？」

「ケツ、マヌケな上に弱虫なんだなあ。その証拠に…震えていやがるぜ？」

「…うう…」

「おい！何勝手に盗っているんだ！？彼女のを返せ！！？」

「おお、怖い怖い。…おいクロ！さつさとズラかるぞ！」

「そうだな。じゃあな、弱虫君」

震えている私とドガース達に怒鳴ったフィルド君。そして、彼らは近くにあった洞窟の中へと姿を消してしまった。——私の大切な宝物を奪っていつて…

「…どうしよう…。大切な宝物を盗られちゃったよ…」

「…じゃあ、取り返せばいいじゃないか？」

…でも、私にはあいつらから取り返せるほどの力を持っていない…。

「…無理だよ。さっき奪われた時に返してって言えなかったし…、
体も…動けなかった。それに…私は…弱い…から、取り返す…事が

…出来…ないの…。」

いつの間にか目から大粒の涙が溢れだしていた。どうやら私は話している途中で涙が出てきてしまったみたいだった。そんな情けない顔を見られたくなかったため、顔を下げてしまった。

「……そんな訳ないだろ！？」

「…！！」

フィールド君が私に向かって怒鳴ったので、思わず顔を上げていた。

「自分が弱いから、相手が強そうだからって自分の大切なものを取り返さずに簡単に諦めようとするな！！」

そして言葉を一区切りをつけた後、

「…俺は力や実力だけで断定するのは、甘い考えだと思う。…大事な事はどんな事があっても諦めずに立ち向かう”勇氣”なんじゃないかなって思うんだ…。」

そう言うとフィールド君はドガース達が入っていった洞窟を睨んでいた。

それから、どれくらい時間が経っていたのか分からない。私はまた顔を下げていた。

（私はフィールド君が言っていた”勇氣”を持っていない…。でも、私の大切な宝物を奪われたままにしておくのも嫌。フィールド君もあの後から全然話し掛けて来ないし…。…ん？ひょっとして私が話すのを待っているのかな…？”勇氣”を出して話し掛けてこいつてこと…？）

私は顔を上げてフィールド君を見た。さつきから相変わらず洞窟の方を見ているが、その背中から、早く話し掛けてご覧、とも言っていた気がした。そして、私は覚悟を決めて、話し掛けてみる事にした。

「…フィ、フィールド君！」

「なんだ？」

「あの、お願いがあるの…。あいつらから宝物を取り返したいから、一緒に手伝ってほしいの！」

すると、彼は私の方へ振り向き、

「キュベレー…その言葉を待っていたんだ!」

と、満面の笑みで私に笑いかけた。

「…え?」

私は思わず目を丸くしていた。

「さつきも言ったじゃないか。大事なものは”勇氣”だって。怒鳴った俺に声をかけたじゃないか。あの後から話し掛けてるのって結構”勇氣”がいることだと思わない?」

「…ひょつとして…私に”勇氣”を湧かせるために…あえて怒鳴ったの?」

そう聞くと、再び屈託のない笑顔が帰ってきた。

「…今になって”勇氣”という意味が分かった気がした。ただ、自分が弱いからだと行動を起こす前から決め付けないで、弱くてもまず行動を起こす。その行動を起こすための第一歩が”勇氣”なんだ。」

「さつきとは目の輝き方が全然違って見えるよ!」

「そう…かな／＼」

一瞬だったけど、頬が熱くなった気がした。少し気にはなったけど今は…私の宝物を取り返す事に専念しないと…。

「よし!それじゃ今からあいつらを追いかけよう」
「うん!」

そして私達はドガース達に奪われた大切な宝物を取り返しに『海岸の洞窟』へ向かった。フィールド君から気付かされた小さな”勇気”をたずさえて。

#2 小さな勇気 完

#2 小さな勇気（後書き）

フィルド「…作者。」

はい？

フィルド「1ページ減ってるんだけど…。」

そんなのいちいち気にしちゃあダメだよ」

フィルド「…たぶん、こんなに本文が少ないのはここだけだと思う…」

（無視）あつ、感想の規制を緩くしたので、ユーザー登録してない人も気軽に感想をかけますよ」

キュベレー「皆さん、よろしく願います！」

（おまけ）

ついでに本文に書いてある”勇気”の意味、あれはキュベレーが自分で解釈したんで、鵜呑みしないようにしてくださいね。

キュベレー「なんか私が間違って解釈してるのよって聞こえるのは気のせいかな…？」

#3 キュベレーの宝物〜 探検隊サンライズの第一歩〜（前書き）

今回は初戦闘シーンです！オリ技も出てきますよ♪

フィールド「マジで!？」

そして、途中から主人公フィールド視点に変わります。
フィールド「マジだ…って何で途中からなんだよ!？」

#3 キュベレーの宝物　探検隊サンライズの第一歩

　　海岸の洞窟

「うわぁ！ポケモンがいつぱいだ……！！それになんか迷路みたいな……」

「フィールド君って『ダンジョン』に来たことないの？」

目を輝かせているフィールドに聞いてみたキュベレーだが……

「……だって、俺記憶ないもん。」

と、フィールドは口を尖らした。

「あつ……そうだったね（汗）。ごめん、ごめん。」

「……そうだ。さっき君が言った『ダンジョン』ってなんなんだ？」

フィールドはキュベレーが言ってた『ダンジョン』と言う言葉が気になり聞いてみた。

「うーんと、『ダンジョン』っていうのは正式には『不思議のダンジョン』って呼ばれていてね、入る度に地形が変わるの。」

キュベレーが言うには、昔はただの洞窟や草原がここ最近になって迷路に変わり普通に暮らしてるポケモン達が入ってしまうと迷って出れなくなってしまうらしい。

「へえ……。じゃあ、ここもその『不思議のダンジョン』って言われている場所の1つなんだな。」

と説明を聞いて納得をした。

「ところでキュベレーは、『不思議のダンジョン』に来たことないの？」

「昔、すぐく有名な探検隊の人に付いて行って入ったことがあつて…それがここ『海岸の洞窟』だったんだ。」

「へえ〜。」

と、しばらく他愛のない話をしながら進むと…

「…ん？あれは…？」

そこにいたのはカブトとカラナクシである。

「フィールド君、気を付けて…。彼らは野生のポケモンで私達のように『ダンジョン』に入ったポケモンを襲ってくるのよ！」

再び先ほどのカブト達を見てみると、2匹ともすでに戦闘体勢に入っていた。

「やるしか…ないんだな…」

フィールドも構えた。キュベレーもすでに戦闘体勢に入っていたが緊張をしているのか、あるいは戦闘は初めてなのか体が若干震えていた。

「君なら出来るよ！」 勇気”を持っている君なら…！」 「う…うん！ありがとうございます！フィールド君も気を付けてね」

2匹の会話が終わったのを合図にカブトとカラナクシが”水鉄砲”を放った。

その攻撃をフィールドはかわし、反撃に出る。一方のキュベレーはみずでっぽうに当たる直前に姿が消えた。

「なっ…キュベレー！？」

これにはさすがのフィールドも心配して攻撃を止めてしまった。一方のカラナクシ達もまた姿を消したキュベレーに戸惑いを隠せずにいた。

「私はここにいるよ！」

いつの間にかキュベレーはカラナクシ達の後ろに立っておりカラナクシ達はいつの間にか苦痛の表情を浮かべていた。

「な…何があつたんだ？」

「今のは”騙し討ち”を使ったの。一瞬の内に敵の死角に回り込んでダメージを与える技なんだけど…」

「……けど？」

「…まさかここまでうまく成功するとは思ってなかったよ。」

キュベレーがフィールドのいる場所に来て話をしている間にカラナクシ達は再び立ち上がったいた。

「やっぱり倒しきれなかったんだ…。」

「そう悔しがるなよ。今から倒しても遅くはないから…：…な？」

残念そうに悔しがるキュベレーを慰めるフィールド。そして、2匹は互いに顔を合わせ頷き合うと再びカラナクシ達に向かっていった。当然カラナクシ達も”水鉄砲”で反撃に出る。そんな状況の中キュベレーはある事に気付きフィールドに聞いた。

「あれっ？フィールド君、技を出さないの！？」

それは先ほどから通常攻撃ばかりを行うフィールドに質問というかたちで言っているようにも聞こえるし、まだ技を出さないフィールドを急^せかそうとしているようにも聞こえた。

「…記憶喪失だから、覚えてないんだって！（てか、それ以前に元人間なんだぞ！）…！！」

キュベレーに応えていた時、何かが頭の中によぎった。

「（…何だこれ？…ひょっとして、これが技の出し方か？）…とにかく、出すしかないみたいだな…！」

そう呟きながら、両手をカブト達のいる方向へとかまえた。

「…（それで…意識を集中するんだったな…）」

フィルドは目を瞑った。すると、彼の掌から青白い球体が現れ、カブト達のいる方へめがけて高速に飛んでいった。ターゲットは……カブトだった。あまりの速さに対応しきれなかったカブトはそのまま直撃をくらい、倒れた。

「す……すごい……!!」 波動弾” が打てるんだね……!!」

「い、いやゝ。なんか直感でやったら、でたみたいだなあゝ。(ふうゝ、どうやら、土壇場で思い出せたみたいだ……。) キュベレー! 後ろだ……!!」

「えっ……?」

フィルドを見ていたためか、完全に動きが止まっていた。そこへ残っていたカラナクシが” 水鉄砲” を放つ。

「きゃあああ……!!」

炎タイプであるキュベレーにとって、水タイプの技は致命的なダメージとなった。

「キュベレー……!!? ……そうだ……!!」

すると、フィルドは懷から何かを取り出した。それは――

「あつ、オレンの実……」

「さっき、拾ったんだ。これを今のうちに食べるんだ。」

「フィルド君……ありがとう!」

キュベレーにオレンの実を渡すとフィルドはカラナクシに向き直す。

「さて、さっきみたいに――!!」

——”波動弾”を出そうとした時、再び何かが頭によぎった。

「（さつきとはパターンが違うな。とりあえず出してみるか…。）行くぞ！」

するとフィルドは素早く動きカラナクシとの距離をつめていく。そして、そのままの勢いで体当たりをしてカラナクシを倒した。

「今のは…」電光石火”ね。」

「…なるほど、技にもいろいろあるんだな…（しかし、突然使えるようになるなんて…くっ！？また…）」

先ほど技を急に出せた理由を考えようとした時、三度技の出し方が
みたひ
頭をよぎった。今度ばかりはキュベレーに苦痛の表情を見られた。

「フィルド君！？大丈夫なの！！？」

「…ああ。心配ないよ…。初めての戦闘だったから、少し疲れただけさ。それよりもキュベレーこそ大丈夫？」

これ以上の心配をかけたくなかったのか、キュベレーの容態を確認するフィルド。

「私は大丈夫。フィルド君からもらったオレンの実のおかげで楽になったから。」

と笑顔でいうキュベレー。

「よし、じゃあ敵も倒したことだし先に進むか！」

く海岸の洞窟 奥底く

それからしばらく進むと

「あつ、灯りが…」

「もうすぐで奥に出られるのか…。そして、あいつらもいるはずだ…!!」

そして、フィルド達は灯りに向かって走りだした。すると、案の定行き止まりで立ち往生しているドガスとズバットがいた。

2匹は気配を感じて一瞬怯えたように振り向いたが、その正体がフィルド達だと分かった途端、余裕を含めた意地悪そうな表情へと変わった。

「ケツ、誰かと思えば…」 「あの時の弱虫じゃないか？」

「…うう…。(…いや、ここで”勇気”を出して言わないと…) あ、あなたがもっている石を返して！それは私の大切な宝物なの!!」

「…ほう。大切な宝物か…。なら、余計に返せねえなあ！」
「ええっ—!？」

キュベレーが勇気を出して彼らに言ったものの、ドガスは“宝物”を強調してキュベレーを一蹴する。どうやら返す気など全くないようだった。

「そんなに返してほしいなら力強くで——」

「…おい…。…こっちが弱そうだからって、好き放題言いやがって…。」

フィールドが静かに言ったがその言葉1つ1つに威圧を含めて言ったためドガース達の表情は若干恐怖に引きつっていた。

「…さっきは“返してほしいなら力強くで取り返してみろよ!”…
つても言いたかったんだろう?」

「そ…そうだ!それがどうした?!」

フィールドの気迫に押されて声が上がらずながらもいい返すクロ。

「…なら、遠慮はしない…!!」

すると、フィールドの周りに風が現れ、刃を複数形成していた。

「…ついさっき思い出したわざだ…。食らえ…。”真空斬り”!!」

フィールドの周りを浮遊していた風の刃がドガース達を襲った。

「うおっ!?!」

「うぎゃあ!!」

フィールドの攻撃をドガースはなんとか耐えたようだがかなりのダメージを追ったようだ。一方のズバットは大ダメージをくらい、今にも倒れそうだった。

「(キュベレーの大切な宝物はたしかクロっていうズバットが持つ

ていたんだな…。）今だ、キュベレー！クロを倒すんだ！！」
「分かったよ！」

フィールドに促されてキュベレーはクロに向かっていく。

「なっ、なに！？」

「クロ！！」

ドガースがキュベレーを追おうとするが、

「おっと、やらせないよ！」

そこにフィールドが立ちふさがっていた。

「ちいつ、ならお前から先に始末してやる！くらえ、”スモッグ”
！！」

「…なら、こっちだって切り札を見せてやるさ。」

ドガースから大量の”スモッグ”を出し、フィールドに向かわせた。
一方のフィールドは”真空斬り”を出すのか、先ほどの風の刃が彼の
周りを渦巻いていた。ただ一点だけ違うのは、その状態で”波動弾”
を出す構えをしていることだ。

「…いくぜ！」真空…波動弾”！！」

まず”波動弾”を放ち、次に”真空斬り”を出す。すると、”真空
斬り”の刃がはどうだんに取り込まれ、巨大な刃となった。その刃
はドガースと彼が放った”スモッグ”を飲み込んだ。

「ぎゃあああー!!」

「マ、マタドお!!」

「今度こそ返してもらっよう!!」

クロがドガス——マタドに氣をとられている間にキュベレーは、クロとの距離をつめていた。

「しまっ——」

「”電光石火”!!」

キュベレーは”電光石火”を繰り出し、クロを倒す。それと同時に大切な宝物をクロから取り返した。

「やったじゃないか! キュベレー!!」

「うん!! ありがとう、フィールド君!!」

キュベレーは無事に宝物を取り返せす事ができて嬉しいのか、満面の笑みをフィールドに送った。

「チキシヨウ…調子に乗りやがって…」

「くそう、合わせ技だなんて卑怯だ…。覚えていやがれ!!」

お決まりの捨て台詞をはき逃げていく2匹。

「さて……と、宝物も取り返せた事だし俺達も行くか！」

「うん……！そうだね！！」

〈海岸〉

「フィールド君、さっきは一緒に取り返してくれて、ありがとう！」

「いやいや、お礼なんていいよ。俺はキュベレーのサポートをした
までだよ。君は自分で取り返したんだから……ちゃんと”勇気”をも
つてね！」

「ううん……。フィールド君がいなかったら、きっと取り返せなかつた
よ。だから、お礼だけは本当に言わせて。」

フィールド達はドガース達からキュベレーの宝物を取り返した後、再び
海岸へと戻ってきた。海岸の洞窟に入る前よりも夕陽はさらに沈
み辺りはやや暗くなっていた。

「……あつ、ところで君の宝物どんなのが見せてくれる？」

「いいよ。でも、その前に話したい事があるの。」

「話したい事？」

訝^{いぶか}しげるフィールドにキュベレーは話を始める。

「…実は私ね、探検隊をやりたいんだ。」

「探検隊？」

フィールドが聞き返す。

「そう、探検隊。探検隊になれば、今まで誰も足を踏み入れてない場所を探したり、後はお宝を探したりするんだ…。」

「それって本当なのか!？」

目を輝かせながら話を聞くフィールド。

「そうなの!…でもね私、フィールド君に会うまですごく弱くて意気地なしだったから。そんな夢と憧れ、そして弱かった自分に葛藤している時にこの宝物を拾ったの。」

そう言い終わると懷から先ほど取り戻した宝物をフィールドに見せた。

「…これって、石…だよね…。」

「…まあね。普通に見ればその辺の石と変わらない。でも、よく見て…。」

「…?」

キュベレーに言われてよく見てみる。すると、何か不思議な模様が描かれていた。それを見たフィールドは再び目を輝かせた。

「うわぁー!すごい不思議な模様が描かれてるなぁー!」

「ね？あつ、それで私はこれを『遺跡の欠片』って呼んでいるんだ！」

「『遺跡の欠片』かあ……。なんかロマンみたいなものを感じるよ……！」

さらに目を輝かせるフィルド。

「そうでしょ？！それで私ね、いつか探検隊になってこの『遺跡の欠片』を謎を解きたいと思ってるんだ……。」

「……今のキュベレーなら、きっと探検隊になって謎を解けるはずだよ！」 勇気”を持った君なら！」

「そうかなあ……。あつ、そういえば……。」

一瞬キュベレーの声のトーンが暗くなつたが、何かを思い出したようにまた普通の声のトーンに戻っていた。

「ねえ、フィルド君。君はこの後どうするの？」

「……えっ？」

キュベレーに言われて、腕を組むフィルド。

「うーん……そうだな……。あんまり考えていなかったな……。」

「そうかあ……。……！それならお願いがあるの！」

「な、なんだい？急に改まって……。」

キュベレーはフィルドを見据えていた。しかし、その瞳は初めて会った時のような恐怖や不安の色はなく、期待と希望に満ちていた。

SIDE：フィルド

「…フィルド君……私と一緒に探検隊を結成しない？」
「……えっ!？」

突然“探検隊を組もう”と言われて俺は一瞬焦った。

「お、俺となのか!？……本当に——!？」

本当に俺も一緒にやっていいのか——そう言おうとした時には何かに口を塞がれていた。その塞いだものの正体は、キュベレーの前足だった。

「お願いだからそれ以上は言わないでほしいの。…私はフィルド君から教えてもらった”勇気”を持ってたとしても1匹じゃあ、怖くてダメなんだ。それに一緒にやってくれるのもフィルド君じゃないといけない気がして……。」

一瞬だが、胸に熱いものが込み上げてきた。それが何なのか気にはなったものの今は考えるべきではないと思い、それを抑えて再びキュベレーを見た。彼女は俺の返事を待っている。ちゃんと真っ直ぐに俺を見据えて。——なら俺の答えはもう1つしかないじゃないか！

「…分かった。一緒にやろう…探検隊を!!」

「本当に!?!…ありがとう!」

まるで太陽のように明るくてまぶしい笑顔を見せるキュベレー。なんだか俺まで嬉しくなってきた。

まあ、一緒にやろうと思ったのは探検隊に興味があったとか、自分の記憶の手がかりをつかむことなどほかの理由もあった。

「それじゃ、まずはギルドに行かないとね。」

「…ギルド?なんでだ?」

また初めて聞きなれない言葉を聞いて俺は聞き返す。そもそもギルドは何なのかを聞くのが先なんだが…。

「探検隊になるには、まずギルドへ入門して登録を行って弟子入りをしていないとなれないの…。」

「へえ…。なんか大変そうだな…。」

まあ、説明を聞いて納得はした。ギルドについては分からないのか、何も言っではくれなかった。…まあ今は気にしなくてもいいけど…。

「ふふつ、大変けどちゃんと手順を踏まないと探検隊になれないからね…。あつ、この辺りで近いのはプクリンっていうポケモンがやっているギルドなの。」「なるほど…。じゃあ、そこに行ってみようか。」

そして、俺は歩き出そうとする。

「あつ、待ってフィールド君。」

「ん？どうした？」

「…これからは一緒に探検隊目指して頑張ろうね！」 「ああ！それと俺の事は呼び捨てでもいいから。」

「…分かったよ！……フィールド……！！」

こうして、俺達はギルドへ向かった。だけど俺は……いや俺達はこの先で世界を揺るがす重大な事が待ち受けているなんて、まだ知る由もなかったんだ――。

SIDE：三人称

く？？？く

ここはとある場所。全体が岩場で覆われ、岩と岩の間に入ってきた光がぼんやりと地面を照らしていた。その光で創られた場所に1匹のポケモンの座っている影がぼんやりと映っていた。動く気配すら感じられない。

やがて、その影がピクリと動く。すると、何処からか足音が聞こえてきた。そして、近くまで来たのか足音がピタリと止んだ。

「…こんな所で何をしている？」

低い声でその足音の主は聞く。

「…ただ考え事をしてただけのこと…。汝が気にする必要はない。」

考え事をしてたポケモンは足音の主より、若干声のトーンは高いものの威厳に満ちていた話方で答えている。

「…まあいい…。それよりも“あの方”が呼びだ。どうやら今回は全員呼ばれてるようだな…。」

「…すぐにでも行く。汝は先に行くがよい。」

その言葉を聞くと足音は静かに去って行き、やがて聞こえなくなつた。そして、そのポケモンは静かに立ち上がると目の前にあった岩場…正確に言えば銀色の岩を見つめていた。

「…後は汝次第だ。……フィールドよ…。」

その時、銀色の岩が光によって反射し、立っているポケモンの顔に向けて反射光を当てた。そこに映っていたポケモンの顔は——人間に少し似ていた。やがて、そのポケモンもその岩場を後にし、何処かへといってしまった…。

#3 キュベレーの宝物〜探検隊サンライズの第一歩〜 完

#3 キュベレーの宝物〜探検隊サンライズの第一歩〜（後書き）

キュベレー「はびねずさん！6ページいったよ！！」

ふい〜、我ながらよく頑張った方だと思うよ…（疲）

キュベレー「お疲れ様〜。」

フィルド「…なんでオリ技は漢字なんだ？」

いや…その方がカッコいいし、区別つくかな〜って思って…

フィルド「なるほど…。ところで最後のは？」

…その正体はかなり先にならんと分らないよ…

フィルド「…はあ…。」

次回はいよいよギルドへ入門します！

#4 ギルド入門　く結成！探検隊サンライズく（前書き）

やゝと更新…。

フィールド「遅いぞ、作者。」

いろいろあったから、更新が遅れたの！

…あ、今回は後書きが長いです。

キュベレー「なんで？」

それは本文を読んだ後で！では、どうぞ！

#4 ギルド入門 〱 結成！探検隊サンライズ〱

〱 ギルドの前〱

フィールドとキュベレーは高台にあるギルド前へとやってきた。

「……ここが……ブクリンのギルド……なのか……？」
「うん。そうだよ。」

2匹が来た頃には辺りが暗くなっており、松明の灯りが周りをぼんやりと照らしていた。

「……で、入り口は閉まつてるんだけど……どうしたら入れる？」
「これはね、そこにある格子の上に乗ると開く仕組みなんだ……。……わ、私が先に乗るね？」
「分かった。気を付けろよ？」

その言葉にキュベレーは頷くと、格子の前に立った。

「……ふう……。」

呼吸を整えたキュベレーが格子に乗る。すると、

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

「誰の足型？誰の足型？」

「……！！！」

「のわあっ！？い、今……下から声がしたぞ！」

フィールドは初めて来たため、下からの声に驚いた。一方のキュベレ

「一瞬体をビクン、と震わせたものの前のように格子から離れることはなかった。」

「足型はロコン！足型はロコン！」

（うう……早く、終わらないかなあ……。いや、ここで退くわけには……）

なんとか、耐えるキュベレー。そして、

「（ほう、今日は逃げなかったようだな。）……よし、いいだろう。
……おい、もう1匹いるだろ？そいつも乗れ！」

下から再び声が聞こえた。その声は先ほど“誰の足型？誰の足型”と連呼したのぶとい声の持ち主だった。

「……これって俺の事を言ってるよな……？」

「そう……みたいだね……。」

そう言いながらキュベレーが格子から離れると入れ替わるようにフィールドが格子の前に立ち、格子を見る。

（……なんか足をくすぐられそんな感じがするけど……とにかく乗るしかないな……。）

意を決して格子の上に乗るフィールド。するとすぐに先ほどの掛け合いが聞こえた。今度ばかりはフィールドは驚く事はなかった。だが――

「足型は……エート……ウンと……。」

「……おい？……おい！どうした！？見張り番ティラス！」

明らかに先ほどとは違う雰囲気が漂っていた。

「た…たぶんリオル！たぶんリオル！」

「……たぶんだとお！？」

急に怒りだすのぶとい声の持ち主。

「…だつてえ、分からないものは分からないもん……」

「お前は見張り番という重要な仕事についてるんだろぅ！？そんなお前が…っておい！泣くな！」

「…なにかもめ事があつたのかなぁ…？」

「さ、さぁ…。(てか早くしてくれないか…。本当に限界が近づいてるんだけど……。)」

それからしばらく経ち――

「…すまない。またせたようだな。」

(いいから早く開けてくれ～～！！！)

フィールドが心の中で叫ぶ。

「……確かりオル…だったか。まあこの辺じゃ、見かけないが…悪

いやッではなさそうだな……。なので『プクリンのギルド』に入ることを許可する！」

のぶとい声の持ち主が話を終えるのと同時にギルドの入り口を閉めていた扉が大きな音を立てて開き始めた。

「うわぁー!!」

「きゃぁー!!」

突然のことに2匹は驚いていた。その間に扉が開いていた。

「えーと……中に入れたことかな……？」

「た……たぶん。」

フィールド達はギルドの中へ入っていった。

くプクリンのギルドく

入り口を抜けて、目の前にあった梯子を降りるとそこにはたくさん
のポケモン達——いや正確に言えば探検隊達が集まっており情報交
換をしたり、依頼の報酬を受け取ったりしていた。

2匹がその光景に目を奪われていると、1匹のポケモンが地下から
あがってきた。その気配を感じフィールドは後ろを振り向き、キュベ

レーも慌てて振り向いた。

「えー…さっき入ってきたのはお前達か？」

「は、はい！そうです！」

「私はここ、『プクリンのギルド』の親方一の子分であり情報通でもある、ペラップのペラトだ。早速だけど勧誘サービスやアンケートならお断りだよ。さあ、帰った帰った！」

そついい翼を使って追ひ払うような仕草をする頭が音符の形をしているペラップ——ペラト。

「早合点しないでくれ！俺達はここのギルドに弟子入りに来たんだ！」

「なっ、なんだってえ—————！！？」

フィールドがただ弟子入りたいと旨を伝えただけなのに驚きの声を上げるペラト。

「…今どき、このギルドに弟子入りなんて…めずらしいよ……。このギルドは修行が厳しくて脱走する者も後を絶たないと言つのに…。」

「…なんだ？脱走する者もいるくらいに厳しいのか？ここのギルドの修行は？」

ペラトが言っている小言をほぼ言い当てたフィールド。

「……はっ！そ、そんな事ないヨー！修行はとくてもラクチン、なんだ、弟子入りするなら早く言ってくればよかったものを…（あ、あのリオル私が言った小声を聞いてたとはな…。地獄耳なのかー！？）」

小言を聞いていたフィールドに焦りながらも態度を180度変えるペラト。

「…なんか急に態度が変わったよね…」

「ホント……大丈夫なのかなあ………」

「ほら、お前達」についておいで」

2匹の話さえも気付いていないほどの上機嫌で階段を降りていったペラト。そんなペラトにフィールド達についてはいった。

ペラトについていきギルドの弟子達が働く地下2匹へと着いた。先ほどの地下1階のようにたくさんの探検隊達がいなかったため、かなり広く感じた。

「本当なら弟子達が働いているんだが、今日はもう食事を食べ終わって部屋で休んでいる…。だから静かなんだよ。」

「へえ」。

歩きながら説明するペラトに納得をするフィールド。その間にもフィールドが目を輝かせていたのはここだけの話である。そして、少し進むと扉がある部屋に止まった。

「ここが親方の部屋だ。…くれぐれも粗相のないようにな。」

「はい。」

ペラトが扉の前に立つ。

「親方様、ペラトです」失礼します！」

「失礼します！」」

そして、3匹は親方の部屋へと入っていった。

親方の部屋には探険中に手に入れたお宝が山のように積まれていた。そして、真ん中の絨毯が敷いてある所にピンク色の体をしたポケモン、プクリンの後ろ姿があった。

「親方様！この者達が新しく弟子入りを希望しております。」

「……………」

ペラトが報告しても反応がない親方。

「親方！…親方様…………？」

（…まさか…………聞こえてないとか…………）

フィールドがそう思い始めたその時だった。

「……………親方——」

「やあ！」

「うわあ！？」

「きゃあ！？」

「ひゃあ！？」

突然プクリンが振り向いたと同時に声を出す。その行為が突拍子もなかったためフィルド、キュベレー、ペラトの順に悲鳴に近い声を上げた。

「あ…あの……。」

「ボクの名前はサクヤ♪この『プクリンのギルド』の親方を務めてるんだ。ところでキミ達が新しく弟子入りを希望してるんだって？」

「そうですけど…。」

「じゃあ、これからよろしくね♪」

戸惑うフィルドとキュベレーを余所に話をさくさく進める親方ことサクヤ。

「早速だけど、ギルドに弟子入りするには探検隊になって登録しなければならんだ。」

「（海岸でキュベレーが言った事と似ているな…。）ところで登録する方法みたいなのはあるんですか？」

「うん♪その方法はとってもカンタン♪キミ達の探検隊の名前をボクに教えればいいんだよ♪」

「えっ…？」

フィルドの質問に笑顔で答えるサクヤ。その答えにキュベレーは戸惑った。

「いきなり言われても……」

「大丈夫！一応考えといたんだ。」

不安そうなキュベレーにフィールドは言った。そして、彼女を見据えて探検隊の名を口にした。

「……俺達の探検隊の名前は……『サンライズ』だ。」

「『サンライズ』……」

「そう。この意味って単に言えば”陽は昇る”って意味。だから、俺達は何度倒れてもまた立ち上がり絶対に諦めないって意味合いを込めてるんだ。」

「……『サンライズ』……。すごくいいよ！！それで登録しよう！」

フィールドの説明を聞き、満面の笑みで言うキュベレー。そして、2匹はサクヤに向き合う。サクヤのまるで我が子を見るような眼差しで2匹を見ている。

「決まったようだね。それじゃあ、『サンライズ』で登録するよ？」

「……お願いします……！」

フィールドとキュベレーの声が揃った。

「じゃ、登録するよ……。『サンライズ』で登録……とうろく……みんなとうろく……」

（なんか嫌な予感がするなあ……。）

「お前達！早く耳を塞いで伏せるんだ！！」

「えっ！？なんで……！」

「ここはペラトの言う通りにした方がよさそうだよ……！」

サクヤが登録の準備を始めるとペラトはフィールド達に指示を出す。

状況が呑み込めないキュベレーにすでに耳を塞いでいたフィルドが促した。そして、サクヤが大きく息を吸った――。

「……すう……… たああー………!!」

「ぐわああ!! み、耳があああ!？」

「きやあああ!？」

「ぎよえええ!？」

おそらく耳を塞いでも無駄なぐらいの威力を誇るハイパーボイスがギルド中に響き渡った。その威力で積んであったお宝が崩れ、扉も吹き飛んでしまった。そしてサクヤの部屋は埃が大量にまい、^{もや}靄を作り出していた。

その^{もや}靄が晴れるまで少しばかり時間がかかった。

そして、^{もや}靄が晴れるとそこにはニコニコと笑っているサクヤが立っていた。

「おめでとう、これでキミ達は今日から正式な探検隊になったよ」
「…けほけほ…… ありがとう……ございます…。」

埃を吸ってむせながらもお礼を言うフィルド。

「じゃあ、探検隊になったからこれをあげないかね」

サクヤは今だにむせているキュベレーに箱のようなものを差し出した。

「…えふ…あ…ありがとう…ござい…けほけほ…」

埃のせいでむせかえりが止まらないキュベレー。そして、ようやく落ち着いた頃サクヤから箱を受け取った。

「えーと…これは何ですか？」

「これはポケモン探検隊キット！探検隊がダンジョンに入る時に必要な道具が揃ってるんだ」さあ、開けてみてよ？」

キュベレーは言われた通りにポケモン探検隊キットを開ける。そこには3つの道具しか入っていなかった。それでもフィールドは目を輝かせていた。そして、手を伸ばしバッチを取り出す。

「このバッチは？」

「これは探検隊バッチって言うてね。救助を求めているポケモンにかざせばダンジョンの外に脱出させてくれるんだよ」あと、探検隊にはランクがあつてそれによってバッチの色が変わるんだよ。」

「へえ」。じゃあ、このバッチは？」

続け様に質問をするフィールド。

「これはトレジャーバッグだよ。それはダンジョンで拾った道具をしまっておけるんだ。それでキミ達の活躍に応じてどんどん大きくなっていくんだよ」

最後に不思議な地図！これはいろんな所に雲がかかっているんだけど、

キミ達はその辺りを一度いけば周辺の雲が晴れてきて見える仕組みになってるんだ♪…以上が3つの道具の説明だよ♪
あつ、そうだ。…キミ達にまだ渡してないものがあつたよ♪」

そついい今度はフィールドに別の箱を渡す。

「…実はね、このギルドに弟子入りしたのキミが5000匹目なんだよ♪」

「え……5000匹目ー!?」

今日何度目か分からない驚きの声を上げたフィールド。

「そつ♪だからその記念にあげるね♪…あつ、1つ聞きたい事があったよ。」

何かを思い出したように話すサクヤ。その表情が妙に真剣でフィールド達は息を飲む。

「キミ達……晩ご飯を食べてないでしょ？」

「…「…がくつー!」「」」

質問の内容があまりにも普通だったためずっこけた3匹。

「い…いえ、そんなことは——」

キュベレーが質問に答えていた時——

ぐりゆるるるうゝ

とどこからか腹の虫が鳴いた。

「…すいません。夕食はまだ食べてないです…／＼／」

照れながら白状するフィルド。

「それじゃあ、今日は特別にボクがおすそわけするよゝ」

するとサクヤは懷から何かを2つ取り出し、フィルドとキュベレーに渡した。彼らがもらったのはリンゴ――よりはふたまわり大きかった。

「お…親方様！？そ、それは…！！」

「……！これってまさか…？」

キュベレーとペラトは驚きの声を上げたが、フィルドは2匹の様子に首を傾げていた。

「サクヤ親方。これってリンゴ…ですよ？なんでみん…」

「違うよ！これはねセカイイチっていう食べ物！ボクの大・大・大好物なんだ！！」

フィルドの質問を遮って言うサクヤ。

「そ、そんなものを……私達が食べていいんですか！？」

「うんゝ…本当は弟子達の分はセカイイチじゃなくてちゃんと用意してあるんだけど、キミ達は突然きたからね。用意出来なかったん

だ。…あつ、そうそう！ペラトにも…はい」

理由を語ったサクヤはまた懷からセカイイチを取り出すと、ペラトに差し出した。

「お、親方様！？」

「ペラトも今日だけ特別。キミも食べてないでしょ？」

サクヤの問いに答えるかのようにペラトのお腹がぎゅるるうと情けなく鳴った。

「親方様…！！ありがたき…ご厚意を…！！」

よほど嬉しかったのか、涙を流したペラト。

「そんな事ないよ」それよりボクもお腹が空いたから早く食べよ？」

自分の分のセカイイチを用意して頭の上に乗せたサクヤ。

「…ゴホン！…それでは今夜は特別という事でセカイイチを皆で食べるよ」では…いただきます！」

「…いただきますーすー！！」

涙を拭いたペラトが挨拶をしてフィールド達はセカイイチを食べたのであった。

「ご馳走でした!」

「親方様、本当にありがとうございました!」

セカイイチを食べ終わりフィールド、キュベレーはサクヤにお礼を述べた。

「いいよ!お礼なんて」それより、ここでセカイイチを食べた事は誰にもいつちゃダメだよ。もちろん、ペラトもね?」

「了解です!」

「分かりました!」

「十分承知しております。」

サクヤの忠告にフィールド、キュベレー、ペラトの順に返事をする。

「さあ、明日から忙しくなるから今日はもう休んで。明日からの修行、頑張つてね」

「はい!」

フィールドとキュベレーは声を揃えた。

「それじゃあペラト、空いている弟子部屋に案内しておいてね?」

「かしこまりました」お前達、ついてきなさい。では親方様、失礼しました」

「はい。じゃあ親方様、失礼しました!」

「明日から宜しく願います!失礼しました!」

ペラトについていき、フィールド達はサクヤの部屋を後にした。

「…久々に弟子が入ってきたよ。…彼らの成長が楽しみだなあ」
誰もいない部屋でサクヤはポツリと呟いた。

フィールドとキュベレーはペラトについていた。しばらくすると、扉がある部屋の前でペラトが止まる。そして、フィールド達も止まった。
「ここがお前達の部屋だ。」

そう言い、扉を開けるペラト。

「え…ええー！ー！！」

「ちよつとたんま！ここが本当に俺達の部屋なのかあ！？」

フィールド達が驚きの声を上げた。それもそのはず、その弟子部屋は2匹にしてはもったいないぐらいの広さを誇っていたのだから。
そして、部屋には藁で敷いたベッドが何個もあり、切り株で出来たテーブルと椅子も置いてあった。

「…ここしか空いてなかったんだよ。それよりお前達、明日から住み込みで働いてもらうからな」早起きしなきゃならないんだから、

今日は夜更かししないで寝なさい。…それじゃあな。」

「お、おやすみなさい！」

言うことだけ言って部屋を後にするペラトにキュベレーは声をかける。すると、右翼を上げて手を振るような感じで動かした。そして扉が静かに閉まった。

「…ふう。なんかあつという間だったね。」

「本当。俺ももう少し時間がかかるかと思っただよ。」

それぞれの感想を口にする2匹。そして、すでに敷かれてるベッドの中から入り口に一番近い場所を選びその上に乗る。

「早起きしろって言ってたな…。あのペラトって奴、地下1階で会った時に言ってた事と絶対食い違ってるよなあ…。…修行絶対大変だと思う…。」

「確かに修行は大変そうだけど…。でも私、ギルドに弟子入りが出来てよかったよ…。…明日から楽しみだなあ！」

厳しい顔をするフィルドに対し、キュベレーは笑顔だった。そんな彼女の笑顔を見てフィルドの表情も自然に柔らかくなった。

「…ふあ…。私眠くなってきたからそろそろ寝るね？おやすみなさい、フィルド…。」

「おう、おやすみな！」

やがて隣からキュベレーの寝息が聞こえてきた。そしてフィルドは仰向けになり天井を見て考え事を始めた。

（…どうして俺は自分の名前と人間だった事以外の記憶がないんだ

ろっ…。それに技の出し方も知らなかったのに急に思い出して出せるようになって……。ああ、ダメだ。考えれば考えるほど分からなくなってくるなあ！

…はあ、何か瞼も重くなってきたし俺も寝るとするか。…ひよつとしたら修行中に自分の記憶が思い出すかもしれないし、…記憶を失った理由に辿り着けるはずだ……。)

そして、フィールドも深い眠りに着いた。自分の記憶が蘇る事への期待と明日から始まる探検隊『サンライズ』の修行に若干胸を膨らませて…。

#4 ギルド入門→結成！探検隊サンライズ→ 完

#4 ギルド入門 〱結成！探検隊サンライズ〱（後書き）

さてついに『サンライズ』が結成です♪なので後書きでキャラクターを1匹ずつ紹介しようと思います！

フィールド「これは単に作者が最初にやるの忘れたからやるんだよ。」
うるさいぞ。

…てな訳で

名前
種族
年齢
性別
性格
一人称
スカーフの色（波動の色）
説明

というような感じに紹介します！記念すべき第1回目はもちろん、主人公のフィールドです！

名前：フィールド
種族：リオル
年齢：13才

性別：♂

性格：勇敢、素直

一人称：俺

スカーフの色（波動の色）：黄緑（明るいグリーン色）

説明：

本作の主人公。海岸で気を失っていた時、キュベレーに助けられる。その後キュベレーの『遺跡の欠片』を取り返したのをきっかけに探検隊『サンライズ』のリーダーになる。誰よりも『サンライズ』のメンバーを想っている。また、滅多に怒らないが度が過ぎて怒るといきなり技をだしてくるなど結構怖い。物事を考えたり、思い出すとする時は腕を組むくせがある。聴力がとても優れている。記憶喪失で自分の名前と元人間だった事以外の記憶がない。

という感じです。

フィルド「思ったんだけど、なんでスカーフがあるの？てか、波動って何？」

それは次回あたり出来たら教えるよ♪

キュベレー「結構曖昧なんだね…。」

#5 波動のスカーフ（前書き）

今回の話はオリジナルです。

フィルド「どの辺りが？」

それは見れば分かりますよ」

キュベレー「それでは、第5話をどうぞ！」

#5 波動のスカーフ

「夢の中」

「…ここはどこだ…？」

フィールドが目を開くと七色に輝く空間にいた。——どうやら、夢の中にいるようだ。そして、目の前には黄色の曲線が付いている透明な球体が浮遊していた。

“——汝にこの波動のスカーフを与えよう。”

「波動のスカーフ？」

フィールドは聞き返す。すると何処からか光が現れフィールドに近づいた。フィールドは無意識にその光に両手を伸ばすとそれは黄緑色のスカーフへと変わった。

“そのスカーフは汝に眠りし力を引き出すことができ…る…”

説明の途中からその球体は薄く、消えかけようとしていた。それと同時にフィールドも自分の意識がどこかに引っ張られるような感覚に襲われた。

「くう………待ってくれ……！俺に眠る力ってなんなんだ？！……教えてくれ……！」

“汝……は………ばれた………世界………救………する………達………。”

やがてその球体は消えてしまった。そして、フィールドの意識も一気に引つ張られた。

「待ってくれ……まだ……知りたい……こ……とが……。」

フィールドの願いも虚しく目の前を黄緑色の光が包んだ。そして、フィールドの意識もそこで途切れた――。

くプリンのギルドく

「……待ってくれ!!」

「きゃあ!」

突然大声を出したフィールドに驚き起きてしまうキュベレー。

「……あ……あれ……?」

「突然隣で叫び声が聞こえたからビックリしたよお……」

「ああ……ごめん……。」

キュベレーに謝りながらベッドから離れ窓際に立つフィールド。夜は少しだけ明けており、太陽が昇るのを待っているようにも見えた。

「…フィールド、もしかして夢を見てたの？」

「（やっぱりポケモンになっても夢は見れるんだな…）…まあ、ね。」

「…私で良かったら話してくれる？」

「分かった。」

フィールドは夢で見たことをキュベレーに話した。

「…フィールドも見たんだね。その夢を。」

「えっ？…まさかキュベレーも俺と同じ夢を見たのか…？」

思わず窓際から離れるフィールド。

「うん…でも、最後の光ったところは黄緑色じゃなかったよ。確か…ピンク色だったの。あ、あとスカーフの色もピンク色だったよ。」

キュベレーも夢で見た事をフィールドに話した。

「…それってこのギルドに入る前から見てた？」

質問の内容を少し変えて訊くフィールド。

「うん…。たまに…だったけどね。それに今回みたいにはつきりと覚えていたのは初めてだよ。…前は見たとしても目が覚めたら覚えていなかった事が多かったから…。」

「そうかあ…。うーん……………」

キュベレーの答えを聞いて腕を組むフィルド。

「…あつ、ひよっとしたら……………」

「？」

訝^{いぶか}しげるキュベレーを余所にフィルドは近くにあったトレジャーバッグの中をあさはじめる。やがて、目当ての物が見つかったのか立ち上がるとキュベレーの近くへとやってきた。

「あつ、それって……………」

フィルドが持ってきたのは『プクリンのギルド』の親方であるサクヤから弟子入り5000匹目記念とやらでもらった箱だった。まだ開けていないため、中身は分からないままだったが…。

「俺思っただけど、この箱の中身が怪しいって思う。何か意思みたいなものを感じるんだ。…そこで、この箱を開けようと思うんだけど…。」

「サクヤ親方様からもらったものだし…大丈夫だと思うよ…。」

若干怯えながらも質問に答えるキュベレー。フィルドは、大丈夫だよ、と口パクで告げると箱の蓋を掴む。

「ふう…。。じゃあ、開けるよ？」

呼吸を整えて蓋をそつと開けてみる。

「……！！」

箱の中身が見えた時、2匹は思わず息を呑み込んだ。何故ならその中身は、夢で見た球体と同じだったからである。

「……何でこんなところに……。」

そう言いながらキュベレーは若干後退りしたが、フィールドは臆することなくその球体を手にとった。

「……！！フィールド……！？」

「……大丈夫だよ。これを持っても嫌な気分にならないし、なんて言うか……悪意がないって感じかな……。」

「それってリオルが持つ能力、波動を読む力があるからなの？」

球体を持ちながら話すフィールドに別の質問を投げ掛けるキュベレー。

「（なるほど……ポケモンや意思を持つ物の周りにあるオーラみたいなのが波動なんだな……。）そうみたいだなあ……。……なっ！」

「どうしたの？フィールド……？」

「この球体……波紋が広がってる……。」

「えっ？……！！」

フィールドに言われて球体を見たキュベレーも思わず絶句をした。その球体はフィールドの手が触れている所から波紋が広がっていたのだ。やがて透明だった球体にも黄緑色に変わっていた。そして、完全に色がついた球体に今度は何やら足跡のような文字が浮かんでいた。

「この文字みたいなものって何だ？」

「これは…足型文字だね。」

「足型文字??」

聞きなれない言葉にフィールドは言葉のオウム返しをした。足型文字というのは、その名の通りポケモンの足跡が文字になっている。

「…なんて書いてあるんだ？」

「えーと…汝の波動は明るいグリーン色である。よって汝に黄緑色のスカーフを与える——。」

キュベレーが文字を読み終えた時、黄緑色の球体から小さな光が生まれた。

（もし、夢で見た光景と同じなら…!）

フィールドは足元に球体を置くと両手を光に伸ばした。すると、光はまるで吸い寄せられるようにフィールドへゆっくりと近づき、やがて彼の両手の中で姿を変えた。

「…やっぱりな。」

「これって…夢で見たスカーフ…。」

フィールドの両手には黄緑色のスカーフが収められていた。

「あつ、フィールド見て！球体の色が…。」

キュベレーに言われて足元に置いた球体を見てみると球体の色がいつの間にか薄まっていた。そして、最初に見た透明色に戻ってしまった。

った。

「…この球体、ずっと触れてないと透明に戻るんだな。」

そういいながらフィールドは先ほどのスカーフを首に巻いた。

「うーん……………」

「どうしたの？」

「いや、夢で言っていた“新たな力に目覚める”って言うのが気になつてね。それで着けてみたらわかるかな…って思ったんだけど…」

「

頭を掻きながらいうフィールド。どうやら、効果は現れなかったようだった。

「そつかあ…。あ、私もこの球体触ってもいいかな？」

「うん。いいよ。」

キュベレーの質問にあっさりと了承するフィールド。そしてキュベレーは右前足を球体に伸ばそうとするが、足先が若干震えておりあと少しのところで届かない。

「…無理しなくてもいいからね？」

「大丈夫…。ここで”勇気”を出してやらないといけないから…」

…だから心配しなくても平気だよ…。」

そういいながら球体にちよつとずつではあるが、前足を出すキュベレー。そして目を瞑った。

（お願い…私に”勇気”を…下さい……！）

心の中でそういい、前足をおもいつき球体に向けて伸ばした。何やら冷たい感覚が前足に伝わり、目を開けると前足は球体に触れていた。

「…ふう〜」

キュベレーが安堵の溜め息を漏らすと彼女の前足が触れていた部分から波紋が広がってきた。波紋が広がったところはフィルドの時とあまり変わらなかったが、違ったのは球体の色がピンク色になった事だった。そして、完全に色づいた時再び文字が浮かんでいた。

「えーと…汝の波動は……。」

「汝の波動はふんわりとしたピンク色である。よって汝にピンク色のスカーフを与える——って書いてあるんだよ。」

最初の部分は読めたが続きが読めないフィルドの言葉を受け継ぎ読み上げたキュベレー。

すると、球体から光が生まれキュベレーに近づいていき、今度はピンク色のスカーフへと変わって彼女の足元にゆっくりと落ちていった。

「すごい…夢で見たのと同じだよ…！」

キュベレーは震えながらいった。ちなみにこの震えは感動してる方の震えである。

「（…まあ、球体とスカーフの事は後で親方様にでも訊くとするか…。）…ところでキュベレー？スカーフどこに着ける？」

ピンク色のスカーフを拾いながらフィルドはキュベレーに訊いた。

「えっ、と…首に巻こうかなって思ってるんだけど…」

「じゃあ、俺が着けてあげるよ。」

「……えっ！？っ…着けてくれるの?!」

驚きの声をあげているキュベレーを余所に手際よくスカーフを着けてくれた。

「あ…ありがとう…／＼／」

「どういたしまして！ところで顔真っ赤だけど…熱あるの？」

「あ…！う、ううん違うの。ただこうやってスカーフを着けてくれたの初めてだから、ちょっと緊張しただけなの…あっ、もう日が昇ったのね！」

心配するフィルドに慌てて理由を言ってさらに話を逸らすキュベレー。太陽はちょうど半分出たところで窓から光が差し込んでいた。

「じゃあ、そろそろ弟子部屋から出ないとな。」

「そ、そだね！」

フィルドとキュベレーはベッドから離れて、部屋を出る準備をした。

「おっと。これも持つておかないとな。」

そういいすでに透明に戻った球体をトレジャーバッグにしまい込み、ドアの前で待っているキュベレーのところへ行った。

「それじゃ、行くか！」

「うん！」

お互い頷き合つてドアをゆっくりと開けるフィールド。だかそこに1匹のポケモンが立っていた事にまだフィールドとキュベレーは気が付かなかった。

5 波動のスカーフ 完

#5 波動のスカーフ（後書き）

サンライズメンバー紹介コーナー！

フィールド「コーナー化したんだな…。」

はい！第2回目はパートナー兼ヒロインのキュベレーの紹介です♪

名前：キュベレー

種族：ロコン

年齢：13才

性別：♀

性格：穏やか、臆病

一人称：私

スカーフの色（波動の色）： ふんわりとしたピンク ピンク色

説明：

本作のヒロイン。ギルドに弟子入り出来なくて海岸で黄昏ていた時にフィールドに出会い宝物の『遺跡の欠片』と一緒に取り返してくれたのをきっかけに探検隊『サンライズ』を立ち上げる。臆病なためすぐに怯えるが、やる時はやるタイプ。また、自分より目上の人には敬語を使うなど一般常識も備わっている。『遺跡の欠片』の謎を解く事が夢。フィールドから教えてもらった”勇氣”という言葉が気に入っている。また怪談話や心霊写真などオカルト系が少し苦手。（ゴーストタイプは平気らしい）

フィールド「”勇氣”って言葉気に入ったんだね。」

キュベレー「うん！この言葉のおかげで私はギルドに入門出来たし

…フィールドには本当に感謝してるよ!」

はいはい。次回はいいよいよ初任務ですよ?

フィールド「よし!立派な探検隊になるために頑張ろうな!キュベレ
ー!!!」

キュベレー「もちろんだよ!」

頑張ってくれ!

フィールド「作者も更新スピード、上げてくれよな?」
か、考えておくよ…(汗)

#6 ギルドの洗礼（前書き）

今回は最初の少しの部分だけがタイトルに合ってるかもしれない。

フィールド」とりあえず第6話をどうぞ！」

#6 ギルドの洗礼

「起きろおおおおお!!」 「ぐわあああああ!!?」

「きやあああああ!?!」

フィールドがゆつくりとドアを開けたと同時にいつの間にか2匹の目の前にいたポケモンが大声で叫ぶ。サクヤのハイパーボイスと同じくらいのポリュームにフィールドとキュベレーは耳を塞いだ。(ほとんど無駄に近い行為だった…。)

その大声を出したポケモンは口がやけに大きく耳がスピーカーのようになっていてドゴームというポケモンでフィールド達がギルドに入る時に聞いたポケモンの声の1匹である。

「あ…あの…もう起きてますよ…?」

「もう起きてるなら何故さっさとでこない!!朝は朝礼をやるために親方様の部屋前のロビーに集まるのが常識だろーがぁ!!」

「ぐううう…。(そ、そんなの聞いてないよ!!ぺ、ペラト…そんな説明してなかったな…!)」

キュベレーはふらふらになりながらもいうが先ほどとほぼ変わらないポリュームで怒るドゴーム。フィールドは心の中でペラトの愚痴を言う。

「…もし、早く来なかったら…親方様の……」

急に声のポリューム(それでもやや大きい…)が小さくなりフィールド達に背を向けて呟くドゴーム。心なしか背中が震えているようにも見えた。

「あ、あの…大丈夫ですか…？」
心配したキュベレーが声をかけるが…。

「心配も何もお前達が早く来れば親方様のあれを食らわずに済むんだよ！！わかったか！！」

ブチン！

何処からか血管が切れたような音が聞こえた。その音に周りの空気が一瞬凍った。

「な…なんだ？この寒気は…。…ひっ！！」
「……………」

フィールドがドゴームを睨んでいた。その表情に気付いたドゴームは一步後退りをした。そして、フィールドは何やら技を出す構えに入っていた。そして――
いきなり”波動弾”をドゴームに向けて放った。

「え――ぐわああああ！！？」
必中技のため直撃を食らうドゴーム。

「ファイ…フィールド…………？」
「…さっきからポケモンの近くで大声出して…平気でいられないだろ…？」

静かに言うフィールド。しかし、ドゴームはその言葉とフィールドから放たれている威圧に恐怖を感じその場から動けなかった。

「…はつきり言わせてもらおうか…。…お前が大声を出していると、頭が痛くてしょうがないんだよ！」真空波動弾”！！”

「ちよつと待て！大声出したのは悪かつ——」

フィールドの”真空波動弾”が謝ろつとしたドゴームを飲み込んだ。

「ぎゃああああああ！！！！？」

そして、ギルドに1匹のポケモンの悲鳴が響いたのだつた。

しばらくしてフィールド達はサクヤの部屋の前に来た。

そこには9匹のポケモンが集まっており、そこには弟子部屋に案内してくれたペラトがいた。

「おや、やつとお目覚めかい？今回は初めてだから許すけど…次回からは早く起きてくれよな」

フィールド達に気付いたペラトが声をかけた。

（まったく…ペラトが朝礼があるって説明しなかったからこつちは朝から大変だつたんだぞ…。）

フィールドが心の中で呟く。それから少ししてフィールドの技を食らいボロボロ状態となったドゴームが現れた。

「まあ！今日は新人さんより遅く来るなんて…しかも体がボロボロで…先輩としてどうかしてますわ！」

ドゴームが来た途端に口を開いたのは、向日葵のような姿をしたキマワリという種族。喋り方からすればどうやら女らしい。ちなみに誰もドゴームが体中傷だらけの事に一切触れていない。

「なんだと！こっちは起こしに行つてひどい目に…」「おだまり！お前の声はうるさくて私達まで頭痛を起こしかねないんだよ！」
「うう…す、すまん…」

キマワリに言われて抗議しようとしたがペラトにピシヤリと制されたドゴーム。

「さて、本日から一緒に修行する新人を紹介するよ、お前達こっちだよ。」

ペラトに手招き（実際は翼で招いてる）されて前に出るフィールドとキュベレー。2匹とも緊張しているのか落ち着かないようだった。

「簡単な自己紹介をしてくれ。」

「（いきなりかよ…）えー、本日から一緒に修行するフィールドって言います。どうぞ、よろしく願います！」

「は、はじめまして！探検隊『サンライズ』のキュベレーと申します！本日からよろしく願います！！」（やばっ！探検隊名言うの忘れた！）

8匹の先輩達の前で自己紹介をしたフィールド達。だがフィールドは緊張のあまり探検隊名を言うのを忘れてしまったようだ。

「じゃ、新人の自己紹介が終わったから私達も自己紹介をしよう。昨日も言ったが私の名はペラト。改めてよろしくな♪それじゃ…私達から見て左側から自己紹介してくれ♪」

メトロノームのような尾羽を振りながら言うペラト。

「それじゃあ、わたくしからですわね！わたくしの名前はサンシャって言いますわ！」

先ほどドゴームと話したキマワリ——サンシャが名前を言った。

「ボクはティラスって言います。主に見張り番の仕事をやっていきます。」

「あつ、ひょつとして昨日あの格子から聞こえていた声って…」

メンバーの中でおそらく小さいもぐらのようなポケモンのディグダ——ティラスの自己紹介が終わった時キュベレーは思った事を口にした。

「はい！フィールドさん達の足型を判別したのはボクなんですよ！」

「でも、ほかに声も聞こえたけど…」

「それはボク以外にもう1匹見張り番の仕事をしている方がいるからです。」

フィールドの疑問に答えたティラスは体の向きを変えた。ティラスが向きを変えた方向を見ると、そこには先ほど大声を出して、ペ

ラトに怒られたドゴームが視界に入った。

「ワシの名前はゴルダ。ティラスと同じく主に見張り番をやっている。あと…今日みたいな…大声を聞きたくないなら…お…起きたらすぐに来るんだぞ…」

体を若干身震いさせながら自己紹介をするゴルダ。

「まあ！ゴルダがこんなに震えて…明日は雨でも降りそうですわー！」

「う…うるせい！き、緊張してんだよ！いちいちポケモンの態度を気にするなあ…！」

サンシヤのからかいにすぐ乗ってしまうゴルダ。この2匹のやりとりは、もはや日常茶飯事らしい。

「うるさいよ！まだ自己紹介中だよ！」

「す、すまねえ…」

「う…ごめんなさい…」

ペラトの仲介で2匹の茶番劇は終わる。そして、自己紹介の続きが始まった。

「あ…あつしの名前はビートでゲス。よ…よろしくでゲス！」

「私の名前はフウです。よろしくお願いしますね。」

語尾が特徴的なビーバーのようなポケモン——ビッパのビートに丁寧な挨拶する風鈴のようなポケモン——チリーンのフウ。

「ハイハイ！オイラはヘイトスだ！よろしくな！」

「俺はレード。よろしくなあ。」

「私の名前はクリオという。ティラスの父親だ。よろしく！」

やや騒がしく話すザリガニみたいなポケモン——ヘイガニのヘイトス、青い体にお腹の線がありにやけた顔が特徴的なグレックルのレード、そしてティラスの父親であるディグダが3匹揃ったようなポケモン——ダグトリオのクリオの順に自己紹介をした。

「以上だ。お前達は今日から一緒に修行するから、それぞれの顔と名前を覚えておくようにな」

「はい！」

「いい返事だ」それじゃ、お前達はサンシャとティラスの隣に立ちなさい。」

一通りの自己紹介が終わりフィールド達に指示を出すペラト。2匹は言われた通りにサンシャとティラスの隣に立った。

「えー、自己紹介も終わった事だし朝礼を始めるよ」

ペラトや弟子達はサクヤの部屋を見つめている。昨日サクヤが放ったハイパーボイスで扉は壊れたのだが、いつの間にか直っていた。(所々ガムテープらしきものがついていたが...)その扉が開き中からサクヤが現れ、前に出る。

「では、親方様！一言を」

「……ぐう……。ぐうぐう……。」

「……はい？」

「……えっ？」

明らかに寝息の音が聞こえた。フィールドとキュベレーは思わず顔を

見合わせ、それから弟子達の様子を見た。

「…出たよ。親方様得意の立ち寝」

「しかも…目をあけたまま寝てるのよね……」

弟子達は小声で話ながら立ったまま寝てるサクヤを見ている。

（サクヤ親方、たったまま寝てたのかよ!？）

フィルドは思わず心の中で突っ込んだ。

「…はい!ありがたき言葉をありがとうございます」

（何も言っていないのに分かったの?）

キュベレーも心の中で突っ込んだ。

「さあ、いつものやるよー!」

ペラトの号令で弟子達の表情がやや真剣になった。

「なっ、何をやるんだ!」「せーのっ…」

「…ひとっ、仕事は絶対サボらない!」「」

「…ふたっ、脱走したらお仕置きだ!」「」

「…みつっ、みんな笑顔で明るいギルド!」「」「さあ、今日も張り切って仕事を頑張るよー!」

「…おーっ!!!!」「」

弟子達は復唱をすると自分達の持ち場へと散っていく。

「…さっきのを毎日やってるのかあ？」

「た、たぶん…」

「ほら、お前達こっちにおいで。」

呆氣にとられているフィールド達にペラトは翼を使って招く。

「…ペラトさん。さっきのは…？」

「ああ、さっきの号令は”『ブクリンのギルド』 探検隊の心得 10箇条”のうち特に心掛けている3つを声にだしてるんだよ。その詳しい内容は入り口付近ある看板に書かれてる。お前達も早く覚えなさい。」

キュベレーの質問に答えるペラト。そうしている間に地下1階に着いた。ペラトについていくと大量の紙が貼ってある掲示板の前にきた。

「これは掲示板。ここに各地から救助の依頼や頼み事が届くんだよ。それらの詳しい内容が書かれているのが依頼書だよ。」

「確か…最近はおかしくなったせいで『不思議のダンジョン』が増えてきてるんですよね？それで遭難者や物をなくしたポケモンが増えていたりとか…」

「その通りだ。その遭難者を救助したり、ダンジョンに落とした物を取りにいくのが探検隊の仕事の1つだよ。」

（なるほど…探検隊は困ったポケモン達を助ける。そのための情報元がギルドか。また、探検隊が有名になればその探検隊を育てたギルドも有名になるという事か…なるほど、これですっきりしたよ。

…でも、時がおかしくなったってどういう事だろう？）

ペラトとキュベレーの会話を聞き、前から疑問に感じてたギルドについての大きな役割とメリットを把握したフィールド。しかし、ま

た新たな疑問が生まれてしまい、結局考え事が増えてしまったのだ。
った。

「お前達は探検隊に成り立てだから……これがちょうどいいだろう。」

いつの間にかペラトが掲示板から依頼書を取りフィールドに差し出した。受け取ったのはいいがまだ足跡文字が読めないフィールド。すると、横からキュベレーが紙に書かれている内容を読み始めた。

「えーと……わたくしの名前はバネブーと申します。ある日散歩をしていたら、近くにいた野生のポケモン達に襲われました！慌てて逃げたのですが、その時に大事な真珠を落としてしまったのです！落とした場所は『湿った岩場』というダンジョンですが、そこに巢食うポケモン達が凶暴でとてもわたくしではいけません！どうかわたくしの代わりにとってきてくれませんか？お願いします！——そんな感じに書いてあるね。」

「つまり、落とし物探しってわけか……。」

フィールドが若干肩を落とした。

「簡単なやつを選んだから心配はないと思うけど、ダンジョンで力尽きたらトレジャーバッグの中身の半分と所持金の全額は消えるから油断しないようにな。」

ペラトは忠告をすると地下2階へと降りていった。

「……弟子になりたてだから、いきなり探検は無理みたいだな。」
「うん……。ちょっと残念だけだね。」

キュベレーも少し頭が下がっていた。

「とりあえず、探検らしい仕事をもらうために下積み修行をがんばらないとな!」

「…うん!」

ペラトからもらった依頼書をしまい2匹は外に出るための梯子を登っていった。梯子を登りきり外に出ようとした時、フィールドは足を止めた。

「…?どうしたの、フィールド?」

「…ああ、実はこの看板に書かれているのペラトが朝礼の後にいったやつかなって思ってた。」

後からきたキュベレーも足を止めると看板のところへと戻っていった。そして、看板を見てみると『プクリンのギルド』 探検の心得 10箇条”と書かれており、朝礼で言ってた3つも書かれていた。

「…本当はじっくり読んでおきたいけど…」

「今は仕事をこなさないとな。」

互いにの顔を見合せ頷くと2匹はギルドを飛び出していった。

6 ギルドの洗礼 完

#6 ギルドの洗礼（後書き）

フィルド…

フィルド「あっ…ついカッとなって…ね…」

多分これ以降は起こしに来ないよ。

キュベレー「（むしろその方がありがたいよ…）」

#7 初めての依頼（前書き）

連続更新！

キュベレー「はぴねすさん、頑張ったね！」

まあね。じゃ、そんな第7話を！

作者・キュベレー

「どうぞ」

#7 初めての依頼

「湿った岩場」

「ここが依頼に書いてあった場所か…。」

そっつい、フィールドは辺りを見渡す。空気は湿気でじめじめして、至る所に苔が生えていた。

「ここにバネブーさんが落とした真珠があるんだね。」

「そっみたいだな…。とにかく奥を目指してみよっか?」

そして、フィールド達は『湿った岩場』へと入っていった。このダンジョンは水タイプのポケモン——というよりは水路を泳いでくるポケモンが多かった。そうして襲ってくるポケモン達を倒していくフィールド達。

しばらく進むと1匹のポケモンと出くわした。そのポケモンは鈴のような姿をしていた。

「…あれも野生のポケモンだな…」

「うん…。あのポケモンはリーシャンっていうの。」

フィールド達は技を出す構えをした。

「…ひしやあああん!!」

リーシャンもまた叫び声を出してフィールド達に迫ってきた。

「突っ込んできた…なら、かわすまで!」

通常攻撃をしてきたリーシャンをかわすフィールドとキュベレー。

「当たって！」火の粉”！！」

キュベレーが”火の粉”を繰り出し、リーシャンが怯んだ。

「今だ！」電光石火”！！」

リーシャンに反撃の隙をあたえないよう素早く技を当てるフィールド。リーシャンは一瞬よろめいたが耐えていた。

「くっ！？確かに手応えはあっただけだな…！」

次の技を出そうと構えるフィールド。するとリーシャンは頭に付いていた紐を伸ばした。フィールドはかろうじてかわしたが、反応が少し遅れたキュベレーは当たってしまった。

「きゃあ!？」

バランスを崩したキュベレーにリーシャンが伸ばした紐が巻き付いてきた。

「キュベレー!!」

「…！う…動けない…！?」

キュベレーがどんなに足掻こうとも紐はなかなかとれない。そうしている間にも彼女にまきつく紐は次第に強くなっていった。

「……もう…ダメ…か…も……。」

「しつかりするんだ、キュベレー！！こんな所で諦めるな！！」

意識が朦朧とし始めたキュベレーに必死に声をかけるフィールド。

（くっ、どうすれば……そうだ！あれを使ってみるか…）

何かを思い出し、トレジャーバッグをあさるフィールド。そこから取り出したのは、爆裂の種だった。

「さっき拾ったやつだけどーか八か…やるしかないな！」

フィールドはリーシャンを睨んだ。リーシャンはキュベレーを軽々と持ち上げてしめつける力をさらに強くしていた。

「…うう…ごめん……フィールド……。」

その力に耐えられなくなったキュベレーは気を失ってしまう。

「キュベレー…必ず助けるから！」

するとフィールドは爆裂の種をリーシャンに——正確にはリーシャンの足元に向けて投げた。種はリーシャンの足元に落ちると爆発した。

「ギャアアアアア！！」

つんざくような悲鳴を上げるリーシャン。その爆発でバランスを崩したリーシャンは捕らえていたキュベレーを離した。

「……！やらせるかよー！」

宙に放り出されて落ちてくるキュベレーをフィールドは両手で受け止めた。

「こいつで止めだ！」波動弾”！！」

フィールドは片手で”波動弾”をつくり放った。相性的に考えるとエスパタイプのリーションにかくとうタイプの”波動弾”は効果がいまひとつなのだが、体力の限界がきていたのかリーションは、”波動弾”を受けて気絶した。

「ふう。一時はどうなるかと思ったよ。」

そう言いながらキュベレーを見るフィールド。彼女はまだ気を失っているらしく目を覚ます様子はなさそうだった。

「…仕方がないなあ…。」

フィールドはキュベレーを抱き抱えて歩きだした。その間は奇跡的に敵と出くわす事はなかった。

く湿った岩場 奥地く

しばらく進むと開けた場所に着いた。所々岩場から湧き水が出てい

た。

「…水、濁ってるなあ。」

そついいながら辺りを見渡すと少し進んだ所に丸い何かが落ちていた。

「あれが…真珠かな…」

「……う、うん……」

「お、ようやくお目覚めか。おはよ！キュベレー。」

フィールドが真珠に近づこうとした時、キュベレーが気が付いた。しかし、まだぼう々としている。

「…あ、あれ……フィールドの声がすごく近くで聞こえるような…」

「そりゃそうだよ。だってキュベレーの事抱き抱えてたんだよ。さつきまでね。」

「えっ…。」

理由を言いながらキュベレーを地面に降ろすフィールド。それから、3秒くらい間を置いて…

「ええええええー！！？／／／」

顔を真つ赤に染めたキュベレーの悲鳴のような声が響き渡った。

「い…いつから……私を抱えてて？！そ…それに…リーシャンは！？」

「落ちて着いてキュベレー。リーシャンはとくに倒したよ。んで、君は気を失ってたから抱えてきたんだ。」

慌てるキュベレーに冷静に状況を説明したフィールド。

「そ…そうだったんだ。あ…ありがとう…／＼／」

「どういたしまして」ところでキュベレー、やっぱり熱あるんじゃない？」

「そ…そんな事ないよ…!!」

ようやく落ち着いたキュベレー。しかし、頬がいつもより赤く見えたのか心配をするフィールド。

「と…とにかく真珠を拾って帰ろう!!」

再び慌てたキュベレーは真珠の所へ行く。

「…なんなんだろう…?」

理由が思い浮かばないフィールドは頭に?マークを浮かべながら、キュベレーの後についていった。

「…よし。これで依頼は完了だな!」

「早くバネブーさんに真珠を届けよう!」

キュベレーも落ち着き目的の真珠をトレジャーバッグにいれたフィールド達はバッグについていた探検隊バッチを空に掲げた。すると、バッチは光輝きフィールド達を包みこむ。そして、彼らを包んだ光は『プクリンのギルド』に向かって飛んでいった。

くプリンのギルドく

「いやあゝありがとうございます!!」

「そ…そんな…私達は困ってるポケモンを助けたまでですよ…。」

ギルドに帰ってきたフィールド達を待っていたのは依頼主のバネブーとペラトだった。そしてたった今、真珠をバネブーに返していたところである。

「ああ…この真珠がなければ歩く度に転んでしまっ…でも今日からはそんな心配はありません!本当にありがとうございます!」

何度も頭を下げるバネブー。その体の所々に絆創膏が貼っており、青丹になっている所もあった。

「とにかくお礼をしなくてはなりませんね。この謝礼金と道具を受け取ってください!」

すると、バネブーは懐からちいさなビン3本と袋をフィールドに渡した。

「お礼はタウリン、ブロムヘキシン、リゾチウムと2000ポケです!」

「に、2000ポケ!?」

謝礼金の金額にフィルドとキュベレーは驚きの声を上げた。

「こんな大金を…いいんですか!？」

「はい!この真珠に比べたら大した事じゃないですよ。…では本当にありがとうございました!」

そういうとバネブーは器用に梯子を登っていった。

「い、いきなり大金持ちじゃないか!」

「ほ…本当に…夢じゃないよね…!」

いきなり大金をもらって喜びを隠せない2匹。

「お前達、初めての依頼にしては上出来だったな」本当によくやったよ。だが…」

フィルド達を褒めたと思ったら翼で2000ポケが入った袋を掠め取った。

「な…何するんだよ!？」

「お前達は入り口にある”『プクリンのギルド』 探検隊の心得10箇条”の最後を読んだかい？」

「えっと、少ししか読んでませんけど確か…稼いだ賞金はギルドに分ける…って書いてあったような…」

『湿った岩場』にいく前に看板に書かれていた内容を思い出すキュベレー。

「その通りだ。だからお前達の報酬は…これくらいだ。」

ペラトは袋から硬貨を2つ出すとフィルドに手渡した。その硬貨は数字で小さく、100と書いてあった。

「…つまり俺達の報酬は2000ポケの10分の1の…。」

「200ポケしかないの…?」

「そういう事だ」

おそろおそろ聞く2匹にペラトは上機嫌に答えた。

「まあ、これからも頑張って稼いでくれよな」

1800ポケが入った袋を持って地下2階へと降りてしまったペラト。フィルド達は当然肩を大きく落としたのであった。

それからしばらく経った。何処からか風鈴の音が聞こえてきた。

「皆さん、お待ちせしました。夕食の準備が出来ましたよー!」

音を鳴らした正体——フウが食堂から現れた。

「まってましたー!」

「早く食べようよ!」

夕食の準備が出来たと聞いただけで大歓声がギルドを包んだ。そして、弟子達が我先にと食堂へ向かっていく。

「俺も初仕事やったから腹ペコだよ……」

「じゃあ私達も早く食堂へいこ？」

フィールド達も食堂へ行った。そして、夕食を食べ終わり弟子達はそれぞれの部屋へと戻っていく。フィールド達もまた自分達の部屋に戻っていた。

「初めての依頼成功出来てよかったよ。」

「まあ……ペラトに謝礼金の9割とられたのが残念だったけど……喜んでいる依頼者を見たらそんなのどうでもよくなったよ。」

フィールド達はベッドの上で横になっていた。

「……でも、今日は本当に……ありがとう！」

「リーシャンを倒したお礼か？別にいいって。」

「う……うん……。抱かれてた時……少し起きてたけど……本当は嬉しかったんだよ……。」「」

本音を抑えるように顔を埋めたキュベレー。

「明日からゴルダさんに起こされないように早く寝ないと……じゃあ、おやすみ……。」「」

「ああ。おやすみ、キュベレー。」「」

まもなくキュベレーの寝息が聞こえた。

「……まだ眠くならないな……。そうだ！せっかくだから足型文字を読

めるようにしないとな…。」

フィールドはベッドから身を起こすと切り株のテーブルに置かれていた本を手にとる。それはキューベレーが家から持ってきた足型文字についての本だった。

「いつまでもキューベレーに読ませる訳にはいかないからね…。」

そついい読み始める。

それから1時間くらい時間が過ぎた。

「…さて今日はこれぐらいにして寝るかな…。」

本を閉じてベッドに向かうフィールド。そして、ベッドに横になると睡魔が襲ってきた。

「…明日も頑張らないとな……………」

やがて、フィールドも深い眠りについたのだった。

#7 初めての依頼 完

#7 初めての依頼（後書き）

初めての依頼お疲れさん！

フィールド「ふう…いろいろあつたけど…成功出来て良かったよ。」

この調子で修行頑張るんだよ！

フィールド「作者もこの調子で更新してくれよ！」

が……がんばりまーす…

#8 眩暈と助けを呼ぶ声（前書き）

文章がダメになってきたかも…

フィールド「俗にいうスランプか？」

たぶん…

8 眩暈と助けを呼ぶ声

「さあ、今日も張り切って仕事を頑張るよー！」

「「「おーっ！！！」」」

いつもの朝礼が終わり、弟子達はそれぞれの持ち場に散っていった。フィールド達『サンライズ』は朝の朝礼の始まる前にはロビーにいるようになった。おかげでゴルダの大声を聞かずに済んだ。

また、ゴルダ本人も昨日の事があって以来『サンライズ』の前で大声を出す事をやらなくて安心してたのはここだけの話である。

「おーい！お前達こっちにおいで！」

早速ペラトに呼び出しを食らい、フィールド達は今日もペラトについて行った。すると、昨日と違う掲示板の前でペラトの動きが止まった。

「…あれ？昨日と違うような…」

「あつ…本当だ。今度はポケモンの似顔絵がいっぱいある。」

昨日見た掲示板は文字が並んでいるだけだったが、今日のは文字のほかにポケモンの似顔絵が描かれていた。

「…ペラトさん。昨日の掲示板と何が違うのですか？」

「よくぞ訊いてくれた！」

まるで訊いてくれるのを待ってたかのような口調でペラトが説明を始めた。だがその内容は――

「向こうは救助や物を手に入れる事を頼む依頼書だが、こちらはお尋ね者…つまりこの似顔絵に書かれているポケモンを退治するために集められた依頼書だよ」

「なっ…!?!」

「えええー!?!」

驚きの声を上げるフィルド達。さらにキュベレーはすでに体を^{すく}竦ませた。

「…まあ、お尋ね者って言われてもぴんからきりまでいるからな。超極悪非道な者もいればちよつとしたコソドロもいるってわけさ」
お前達は探検隊に成り立てだからいきなり難しいやつを頼まないよ」

「（むしろその方が助かるよ…。）」

ペラトの説明にフィルドが心の中で思った。

「とりあえずトレジャータウンで準備をしていきなさい。」

ペラトは地下2階へ繋ぐ梯子の近くまで行き、とあるポケモンの名を呼んだ。

「おい、ビート!」

「はい、今行くでゲスう。」

ペラトに呼ばれ地下2階が上がってきたのはビートだった。

「はあはあ……ど、どうしたんでゲスか?」

急いで登ってきたためか、肩で息をしている。

「『サンライズ』の2匹をトレジャータウンに案内してくれ。…お前達、先輩の言うことを聞くんぞ。」「はい!!」

「それじゃビート、後は頼んだぞ」

「りよ、了解でゲス!!」

言うことだけ言って、地下2階へと降りていくペラト。

「それじゃビート先輩、案内をよろしくお願いします…って、どうしたんですか!？」

やがて、ペラトの後ろ姿が見えなくなりフィールドがビートに話し掛けた時、ビートが泣いていた事に気が付いた。

「ビートさん!何があつたんですか!？」

「…うう…実は嬉しいんでゲス…。(泣)」

「…?」

ビートが嬉しいと言いながら泣く理由が分からず、フィールド達は頭上に?マークが浮かんだ。

「実は…フィールド達が入門するまで…あつしが一番下だったんでゲスよ…。だから…後輩が出来た事に嬉しくて…涙が止まらないんでゲスう…。(泣)」

「なるほど…じゃあ先輩として俺達にトレジャータウンの案内をよろしく願います!」

「りよ…了解でゲス!それじゃあ、あつしについてくるんでゲスよ?」

「「はい!!」」

涙を拭いたビートにフィールド達は元気よく返事をして彼の後をついていった。

「トレジャータウン」

「うわぁー！！」

フィールド達はビートに連れられてトレジャータウンにきた。フィールド達がいる中央広場にはヨマワルが経営している銀行やまだ開いていないがエレキブルの連結店やお世話屋ラッキーなど様々なお店が軒を並べていた。そして、フィールドが目を見輝かせながら辺りを見回していた事は言うまでもなかった。

「私はカクレオン商店に行きたいかなあ。」

「カクレオン商店？何やってる店なんだ？」

フィールドがキュベレーの言葉に反応して彼女の方を見た。

「カクレオン商店は主に探検に必要な道具を揃えてる店でゲスよ。」
「へえー！ビート先輩は物知りなんだな！！」

さらに目を輝かせながら話を聞くフィールド。

「そ…そんな大袈裟でゲスよ…／／／」

照れたのか頬を赤く染めるビット。

「それじゃあ、準備は2匹で出来ますので。」

「分かったでゲス。お尋ね者退治の依頼は一緒に選んであげるでゲスよ！」

「「ありがとうございます！！」」

「お礼なんていいでゲスよ…／／それじゃあ、あつしは先にギルドに戻るでゲス。」

依頼と一緒に選ぶ約束をして戻っていくビット。

「それじゃあ、俺達も行くのか？」

「そうだね！カクレオン商店は橋を越えた先にあるから…案内するね？」

「よろしく頼むよ！」

そして、フィールド達はカクレオン商店へと向かっていった。

「あつ、ミドリさん！ムラサキさん！」

キュベレーの声に気付き店から顔を出したのはカクレオンと言うポケモン。先に出したのは普通のカクレオンで後から出たもう1匹は色違いで体が紫色だった。

「おや、誰かと思えばキュベレーちゃんじゃないかあ！後ろの子は運命の人かい？」
ポケモン

「ミドリさん、こんにちは！…一緒に来たポケモンはそんなんじゃないありませんからね／＼！」

親しげに話かけた緑色のカクレオン——ミドリにキュベレーは顔を真っ赤にしながら答えた。

「キュベレー、彼らとは知り合いなんだね？」

「うん…私がギルドに入門する前からお世話になってくれたの。緑色のカクレオンはミドリさんで紫色のカクレオンがムラサキさん。2匹は双子でね、ミドリさんがお兄さんでムラサキさんが弟さんなんだよ。」

「へえー。俺の名前はフィールドって言います。よろしく願います。」

キュベレーの説明を聞いた後、カクレオン兄弟に挨拶をするフィールド。

「はい、よろしくね」ところで今日は何を買いに？」
「うーんと…それじゃあ、リンゴとオレンの実を2つずつ！」

「はいよ」

ミドリは店の奥に姿を消した。まもなくして、リンゴとオレンの実が入ったお膳を持って姿を現した。

「150ポケだよね？はい！」
「毎度あり〜」

キュベレーはポケを払い、リンゴとオレンの実を受け取った。

「それにしてもキュベレーちゃん、スカーフが似合ってるよ？」

「あ…ありがとうございます／＼あつ、ミドリさん達に報告が…
！実は私、探検隊になったんですよ！！」

「そうかい！？そいつはおめでとさん！！」

「憧れの探検隊になれて良かったね！キュベレーちゃん！！」

キュベレーが探検隊になった事を報告するとミドリとムラサキは自分の事のように喜んだ。

（自分の子供のようにキュベレーを可愛がってるんだなあ…）

とフィルドは思った。すると――

「すいませーん！！」

何処からか声が聞こえた。すると橋の向こうから青い体の小さなポケモンが2匹走ってきた。

「おお、ノルクちゃんにリイナちゃん！」

「すいません！リンゴを1つください！」

ミドリが優しそうな眼差しを送りながら名前を呼ぶと丸い体格をしているポケモン――マリルがリンゴを注文した。ミドリは了承すると店の奥に入る。そしてすぐに出てくるとリンゴが入った袋をマリルに手渡した。

「はい、どうぞ。」

「ありがとうございます!」

「ありがとうございます!ミドリさん!」

「どういたしまして。早くお家にいきなさいな。」

リンゴを受け取りお金を払いそしてお礼を言うと、2匹は来た道を走って戻っていった。

「幼いのに偉いよね。」

「あの兄妹…ノルクちゃんとリイナちゃんのお母さんは病気で体が弱くてね。いつもリンゴを買いに来てるんだよ。」

「へえ!。」

どうやら先ほどのマリルが兄のノルクと一緒にいたノルクより小さくて尻尾が大きいポケモンのルリリ——リイナが妹のようだった。

「すいませ〜ん!」

そんな2匹の話をしていると、再び兄妹が走って戻ってきた。

「どうしたんだい?」

「リンゴが1つ多いです!」

そう言いながらリンゴを店のカウンターに置くノルク。なんとノルク達はリンゴが多い事に気が付いてはるばると戻ってきたのだった。

「リイナ達はリンゴを2つ頼んでないですよ?」

「その1つはおまけだよ。2匹して仲良く食べなさい。」

ミドリはカウンターに置かれたリンゴをリイナに差し出した。

「あ…ありがとうございます！！それじゃあ、行くよ？リイナ。」

「あつ、待つてよお！お兄ちゃん！！」

ノルクがお礼を言い走り出した時だった。リンゴを持ったリイナが慌てて追い掛けようとして走り出した途端、石につまずいて転んでしまったのだ。案の定ノルクはまだ気付いてないようだった。また、転んだ拍子に持っていたリンゴを落とした。そのリンゴは転がっていき、フィルドの足に当たってようやく止まった。フィルドはリンゴを拾い土などを払うとリイナの元へと歩きだした。

「痛いよお…。あ…あれ？リンゴは？」

「リンゴはここだよ。落とさないように気を付けてな。」

リンゴを探してキョロキョロとしているリイナにフィルドは優しく声をかけるとリンゴを差し出した。

「あ…ありがとう…えーと。」

「俺の名前はフィルドだよ。」

「フィルドさん…！リンゴを拾ってくれてありがとう！」

リイナはお礼を言いさらにペコリと頭を下げるとフィルドからリンゴを受け取った——その時だった。

「……！！（な…なんなんだ…これ……）」

突然耳鳴りが聞こえたかと思うと視界がぼやけてきた。やがて、一気に視界が真っ暗になるとどこからか声が聞こえてきた。

“た…助けてー！！！”

（なっ……………！？）

フィールドが驚きの声を上げた時視界が一気に明るくなった。

「…ルドさん？フィールドさん？」

「……………！！！」

リイナの声に現実に戻されたフィールド。そこは先ほどと変わらない風景があった。

「あの…大丈夫ですか？」

いつの間にかリイナが心配そうに顔を覗き込んでいた。

「ああ…心配しなくていいよ。それよりもお兄ちゃんがそこに立っているよ?」 「え……?」

リイナの頭を撫でながら指を指すと先に行ったはずのノルクが戻ってきていた。

「あつ…お兄ちゃん!」

「ついてこないから何かあつたかと思ったよ。」

「ごめんなさい…お兄ちゃん。」

そついいながらノルクの方へ歩きだすリイナ。そして再びフィールドの方へ向くとペコリと頭を下げ、ノルクと一緒に歩いて行った。

「幼いのにすぐく礼儀正しい子達だったねフィールド…?」

(…さっきの眩暈がして…その後に聞こえた助けを呼ぶ声……あれつてリイナじゃないかな……。)

「…フィールド!」

「…ん?ああ…ごめん。どうしたの?」

キュベレーの声を聞き思考を中断したフィールド。

「さつきから何回も呼んだよ?」

「気が付かなかったよ…。ところでさつき助けを呼ぶ声しなかった?」

「えっ……聞こえなかったけど…。ミドリさん達はさつき声とか聞こえなかった?」

いつの間にか腕を組んでいるフィールドの質問に答えながらミドリ達に質問をするキュベレー。

「いえ…何も聞こえませんでしたよ。」

「私も……。」

2匹は首を横に振りながら答えた。

「…フィールド、きっと気のせいだよ。」

「そう…かもな…」

キュベレーに言われて無理矢理納得したが、組んでいた腕は解けそうになかった。

カクレオン商店を後にしてしばらく進むと中央広場の芝生が布いてあるところに先ほどのノルク兄妹がいた。

「あつ、先ほどの…」

「フィールドさんだ!!」

フィールド達と目が合い声をかける2匹。

「2匹ともなんだか嬉しそうな顔をしてるね？何かあったの？」

「実は僕たち、前に大切な物を落としてしまったんです。そしたら…」

「リーパーさんが見かけた事があるって言ってたから一緒に探してくれるの!」

ノルクとリイナが説明をする。

「いやあ…君達みたいな幼い子が困っているのを見ていると放ってはおけないんですよ。」

といったのは鼻が妙に長いポケモン——スリープのリーパーだ。彼はノルク達に微笑んでいるがフィールドはリーパーを纏まとっている邪悪なオーラが見えて嫌な予感しか頭に入っていなかった。

「それじゃあ、僕たちはこれで…リーパーさん、案内をお願いします！」

「お安いごようで……」

そして、3匹は広場を後にしようと歩きだす。その時、フィールドの肩にリーパーの体が当たった。

「…痛っ……」

「おっと、これは失礼…。」

「いや、こつちこそごめんなさい…。」

互いに謝るとリーパーは先を走る2匹を歩いておいかけた。

「リーパーさんは優しいポケモンだったね。今のご時世、悪いポケモンが増え続けてるのにね。」

「いや…俺には——！！」

——優しいポケモンには見えなかったと言いかけた時だった。先ほどの耳鳴りがして再び視界がぼやけてきたのだ。こればかりはキュベレーに見られてしまった。

「フィールド！？どうしたの！？」

「…くう…また…眩暈が…」

「えっ！？眩暈！！？」

だんだんとキュベレーの声も遠くなっていき、再び視界が暗くなつた。だが、今回は映像が映し出されていた。

そこはどこかの山で地面がでこぼこしていた。そこに2匹のポケモンがいた。1匹はリイナでかなり怯えた表情をしていた。もう1匹はリーパーで先ほどの優しい表情は消え、焦りと憤りで歪んだ表情をしながらリイナに近づいていた。

“言うことを聞かないと痛い目に合わせるぞ！！”

“た…助けてー！！！”

（やっぱりか！！）

フィールドが確信した時、映像はブツリと消えた。

しばらくすると、再びトレジャータウンの広場の風景へと戻っていた。

「フィールド！？大丈夫なの！？」

「…急がないとリーナが危ない！！」

「えっ？き…急にどうしたの！？」

「あっ！そうだった…。キュベレー、話があるんだ！」

「話って…？」

状況が読めないキュベレーに気付いたフィールドは先ほどノルク達がいた芝生で先ほどの眩暈の事について話した。

「……話は分かったけど…私…。」

無理はなかった。幼い2匹にあんなに優しく接してたリーパーがどうしても悪いポケモンに見えないのは当たり前だったのだから。

「……やっぱり気のせいだよ！疲れとかとれてないのかめよ？」

「だけど、リーパーから邪悪な波動を感じたんだ！あいつは…！！」

「私だってフィールドが言ってたことを信じてるよ！…でも、私達にはやるべき事があるんだよ？」

珍しく声を荒げたフィールドにキュベレーはうつむきながらも反論に出る。

「それに私達はギルドに修行してるから勝手な行動は許されてない

はずだよ…?」

「……っ！わ…分かったよ。」

キュベレーの正論で言い返せないフィールド。

「夢でもみたんじゃないかな?」

「……たぶんな…。(そうだ…。きっと夢なんだよ…。あの助けを呼ぶ声も映像も…。)」

そう自分に言い聞かせて歩きだしたがフィールドは後ろ髪を引かれる思いでギルドに戻った。

くプリンのギルドく

「やっと来たでゲスね。」「ビートさん！遅くなってすみません！
！」

戻ってきたフィールド達に声をかけたビート。

「そんな事ないでゲスよ。…ゴホン！それじゃあ、あっしが先輩として選ぶでゲス。」

「あんまり怖いのは選ばないでね…。」

咳払いして掲示板の前に出るビート。キュベレーは体を若干震わせながらその様子を見ていた。フィールドはというと相変わらず腕を組んでいる。するとサイレンの音がギルド中に響き渡った。その音にフィールドは珍しく驚かなかったが、キュベレーが驚いたのはいうまでもない。

「掲示板を更新します！危ないので下がってください！」

「この声は…クリオ先輩なんですか？」

「そうでゲス。」

ようやく口を開いたフィールドの質問に答えるビート。まもなく地響きが聞こえたかと思うと掲示板が回転し裏返しになる。

「きゃあっ！？」

「うわあっ！？」

今度は2匹揃って声を上げた。そして、少し経ってからキュベレーが口を開いた。

「ねえビートさん、クリオさんは何をしていますか？」

「掲示板の情報の入れ換えをしてるんでゲスよ。依頼は常に各地から届いているから、こうやってクリオが情報を入れ換えしてるんでゲス。一見すると裏方作業で地味なんでゲスが…クリオはこの仕事に誇りを持ってるんでゲスよ。」

「へえ〜。」

ビートの説明にキュベレーが感心した。

「掲示板の更新終了しました！危ないので下がってください！」

そうしてる間にもクリオが更新を完了していた。地響きが鳴り再び掲示板が回転して元に戻る。さすがに慣れたのかフィールド達は驚かなかった。

「さて、さっきの続きでゲス。」

そついい再び前に出るビート。フィールド達も掲示板を見てみると、先ほどとは違う依頼書が何枚か貼ってあった。だが、

「——！！」

フィールドの視界にとある依頼書が入った時声にならない悲鳴を短く上げた。

「ど…どうしたの？フィールド？」

キュベレーも心配をしたのか、声をかける。

「キュベレー…左上の依頼書を見てみる…」

「えっ？」

フィールドが指を差した方向にある依頼書をキュベレーは見ている。すると、そこにはスリープの似顔絵が書いた依頼書が貼ってあった。

「ま…まさか……」

「そのまさか…だよ。」

急に体を震わせたキュベレー。そして、依頼書には、お尋ね者——パー…と書かれていた。

「……！！フィールドが言った事は間違いじゃなかったんだ……！！」
「やっぱり夢じゃなかったんだ……！！急がないと……リイナが危ない……！！」

フィールド達は顔を合わせるとギルドを勢いよく飛び出していった。

「えっ？！な……何があったんでゲスかぁー！！！？」

1匹取り残されたビートの叫びがギルド中にこだました。

8 眩暈と助けを呼ぶ声 完

#8 眩暈と助けを呼ぶ声（後書き）

キュベレー「はびねさん、7ページいったよ！」

正直言つとここまで書くつもりなかったんだけどなあ…（；／＼　／＼　A

フィルド「次回もこんな感じでよろしく！」

いや…無理かも…

フィルド「…作者から駄作者に下げるぞ…。」

…ヒドイなあ…（泣）

あつ、ルリリちゃんの話になりますけど自分の小説は妹役になっています。

フィルド「なんで？」

見た目…かな？

フィルド「そうなんだ。」

#9 初めてのお尋ね者退治（前書き）

なんだかんだで小説書き始めてから1ヶ月経つてた！！
フィルド「めんどくさがりやの作者がよく続いたよな。」

確かに…我ながらビックリだよ…。

フィルド「じゃ、そんな第9話をどうぞ」

#9 初めてのお尋ね者退治

〈交差点〉

フィールド達が勢い良くギルドを飛び出し十字路になっている交差点に差し掛かった時、1匹のポケモンが彼らの視界に入った。

「おい、あれって!」

「ノルク君!」

「あつ…あなた方は…!!」

フィールド達の声に気付き辺りを見渡しながら近づいてきたのはノルクだった。

「リイナちゃん達は!」

「それが…僕が目を離れた隙にリーパーさんがリイナを…」

「…どこにいったか分かるか？」

頭と尻尾を元気なく下げるノルクだったが、フィールドの質問を聞いてまるでスイッチが入ったように頭と尻尾を上げた。

「確かこっちに行きました。今から案内します!」

「よろしく頼む。」

ノルクを先頭にフィールド達はリイナ達が向かったところへと急いだ。

くトゲトゲ山く

ノルクに案内され辿り着いた場所はゴツゴツした道が特徴のダンジョン『トゲトゲ山』だった。

「こつちに向かっていったんだね？」

「はい……。」

キュベレーの質問にノルクは元氣なく答えた。

「心配するなよ。リィナは必ず探し出すから、ノルクはここで待っててくれよ？」

そっぴいながら頭を撫でてくるフィールドにノルクは頷いた。

「それじゃあ行こう！」

「ああ！」

2匹は頷き合うとダンジョンに入っていった。

「ここで待ってて言われても……そうだ！」

ノルクは何か思いついたのか『トゲトゲ山』を後にしようとする。一瞬フィールド達が登っていった山を振り返るが再び前を向くとそのまま走り去っていった。

『トゲトゲ山』で襲ってくるポケモン達は『海岸の洞窟』や『湿った岩場』に住んでいるポケモン達よりも強い。フィールド達は現在ムツクル2匹とイシツブテ1匹の計3匹の相手をしていた。

「今までのよりなかなか強いな……」波動弾”！」

ムツクルに向け”波動弾”を撃ち、2匹のうちの1匹に当たった。そして、フラフラになっているところへ――

「隙だらけだよ！”体当たり”！」

キュベレーの”体当たり”が追い討ちをかけてムツクルは気絶した。

「あと2匹……。」

残されたムツクルとイシツブテはかなり興奮していた。

「俺はイシツブテの相手をするから、キュベレーは……。」

「分かった！ムツクルの相手をするよ！」

フィールド達は自分達の相手に向かっていった。イシツブテ達も応え

るように”体当たり”を繰り出してきた。

「あたるわけにはいかないな……”電光石火”！」

フィールドはイシツブテの”体当たり”を”電光石火”をかわし一気に距離を詰めていく。

「ゼロ距離とつたよ……”波動弾”！！」

”電光石火”で追いついたフィールドは振り向いたイシツブテの顔面に手をかざすとそこから”波動弾”が放たれる。ゼロ距離だったためイシツブテは為す術もなく直撃を食らい、気絶した。

「相性が良かったから呆気なかったなあ……。ところでキュベレーは……？」

イシツブテを倒したフィールドは辺りを見回すとキュベレーはまだムツクルと戦闘中だったが、ムツクルの方はかなりのダメージが蓄積されているようでキュベレーは有利に戦っていた。

「これでとどめよ！」火の粉”！！」

キュベレーが出した”火の粉”は今でも倒れそうなムツクルに見事に命中し、ムツクルは気絶した。

……実はこの時波動のスクーフをしているためフィールド達の能力が＋1加算されていたのだが、フィールド達は気付いていないようであった。

「キュベレー！怪我はないか？」

「私は大丈夫！今までより強かったけど、倒せたから。それよりも早くリイナちゃん達を探さないで…。」

「そうだな…。とりあえずオレンの実を食べよう。」

フィールド達はオレンの実を食べて、体力を回復したあとリイナとリパーの搜索を再び始めた。

トゲトゲ山 山頂

一方リイナとリパーは『トゲトゲ山』の山頂に着いたところだった。

「あれ？リパーさん、落とし物は？」

「落とし物は…ここにはないよ。」

「えっ…。」

リパーは出会った時とはまた違う笑みを浮かべている。その笑みに戸惑いながらもリイナは兄のノルクがいない事に気付いた。

「…お兄ちゃんは？一緒だったよね…？」

「残念ながらお兄ちゃんも来ないんだよ。実は…お前を騙してたんだ。それよりも…」

「えっ……だま……してた……って……？」

リイナはリーパーの言っている意味は理解出来なかったが、彼女の心はリーパーに対するある感情——”恐怖”が生まれていた。すると、リーパーがリイナの——彼女の横にある小さな穴に指を差しした。リイナは自分に差していないのに体が反射的にビクン、と動いてしまった。

「お前の後ろに穴があるだろう？そこには、とある盗賊が集めた財宝が隠されているらしいんだ。……だが、俺じゃ体が大きくて入らないんだ。さあ、早く入って取りにいくな。なに、おとなしく言う事を聞けば帰してやるからな……。」

邪悪な笑みを浮かべながら言うリーパー。だが今のリイナの心は完全にリーパーに対する”恐怖”の感情に塗り潰されていたため、リーパーの言ってた事が聞こえていなかった。

「……嫌……お兄ちゃん……！！！」

ただこの”恐怖”から解放されたい——その想いを胸に大好きな兄の名前を叫びながら逃げようとするがリーパーが既に先回りをして進路を塞いでしまった。

「……うう！？」

「聞こえなかったか！？おとなしく言う事を聞けば帰してやると！？」

言う事を聞かないリイナに対し憤りと焦りで歪んだ表情をしながら彼女に迫るリーパー。リイナも後退りをするが後ろには壁がありそれ以上は下がれなかった。

「言うことを聞かないと痛い目に合わせるぞ!!」

「た…助けてー!!」

「そこまでだ!!」お尋ね者リーパー”!!」

リーナが叫んだ時何処からか声が聞こえた。リーパーがその方向を見てみると――

「私達は探検隊『サンライズ』!! い…今すぐリーナちゃんから…離れなさい…!!」

声を震わせながらも言い切ったキュベレー。

「な、何故探検隊が!!…どうしてここにいとわかった…!!…つて、おや?」

リーパーは驚きの表情をしたがキュベレーの様子がおかしい事に気付く。

「…そうか。お前達、探検隊と言ってもまだ結成仕立ての新人って事か…。」

「うう…。」

震えるキュベレーを見て余裕を含めた笑みに変える。

「…弱そうに見えるからついていい気になるな!!…先入観で判断したらどうなるか…教えてやるよ!」

「フン…。口先だけは威勢がいいようだな。だが、お前達新人探検隊にそうやすやすと捕まる訳にはいかないなあ!」

そういうと戦闘体勢に入るリーパー。

「キュベレー！君には” 勇気 ” があるはずだろ？しっかり気を持つんだ！！」

「……！！分かったよ、フィールド！！」

フィールドに鼓舞されリーパーをしっかりと見据えるキュベレー。そしてフィールド達も戦闘体勢に入った。

「行け！” 電光石火 ” から ” 真空斬り ” ！！」

” 電光石火 ” で後ろに回り込み ” 真空斬り ” で攻撃をしようとするフィールド。

「無駄だ！」

「なっ……！！？」

しかし、リーパーは後ろを振り向かずに ” 真空斬り ” をかわしてしまっ。

「今の攻撃、避けられないはずなのに……！」

「まさか……特性の力！？？」

「特性？」

戦闘中なのに？マークが浮かんだフィールド。ちなみに特性とはポケモンに秘められた潜在能力の事である。

「俺の特性は予知夢…お前達の攻撃は何処から来るのか分かるわけさ。」

「ご丁寧に自分の特性を説明するリーパー。」

（それなら複数で攻撃すれば…！）

フィールドはリーパーを挟んで反対側にいるキュベレーに口パクで作戦を伝えた。最初は分からないような顔をしてたキュベレーだが、理解したのか次第に顔が引き締まっていき頷いた。

「…もう1発”真空斬り”…！」

「無駄だと言ったはずだが？」

リーパーが”真空斬り”を避ける。

「なら、これならどう？」

キュベレーはリーパーに向け”火の粉”を吐く。つまり、フィールドの技を避けている間に別の方向から技を当てる——という作戦だった。

「フン…”念力”…！」

ところが”火の粉”は”念力”でリーパーに当たる直前で止められてしまう。それどころか、”念力”で返されてしまった。跳ね返された”火の粉”はキュベレーに向っていく。

「キュベレー、逃げるんだ!？」

「……!!」

だがキュベレーは動揺しておりフィルドの声も耳に入っていないかった。そして、跳ね返されたひのこはキュベレーに当たった。

「……あつ!？」

「……キュベレー!？」

「これでまずは1匹目だ!ひやはははは!」

フィルドはキュベレーの名前を呼びリーパーは高笑いをした。ところが――

「あ……あれ?ダメージを受けていない……」

「ひやはは……?! なっ……何だと!？」

フィルドが気の抜けた声を出す。なんとキュベレーは全くの無傷で立っていた。これにはリーパーも動揺したようだ。

「な……何故ダメージを受けていないんだ……」

「……よし!今だあ!!」

フィルドは口をあんぐりと開けているリーパーに何かを無理やり食わせた。すると、リーパーは体が硬直したように動けなくなった。

「な……何をしたあ……!？」 「口が開いてたから縛られの種を食べさせた訳さ。……さあ、キュベレー!トドメを刺そうか。」

「分かったよ!」

自分に何が遭ったのか分からないリーパーに説明をするフィルド。

「まずは私から……。」

キュベレーは攻撃体勢に入るが、お尋ね者であるリーパーを目の前にするとどうしても体の震えが止まらなかった。

（大丈夫……これで”勇気”を出せば……！！）

キュベレーは自分を落ち着けるために目を瞑る。

「やはり……その小娘……は……動けないよ……うだな……！」

なかなか攻撃してこないキュベレーを見て硬直状態でありながらも余裕ぶるリーパー。

「それは……どうかな？」

フィルドがリーパーに向けてにやりと笑う。

「な……何がおか……しい！？」「フィルド……いくよ！」

リーパーが口を開いた時にはキュベレーがこちらに向けて攻撃しようとしているのが見えた。

「フ……フン！どうせはつたりに決まって——」

「もう迷わない……」火の粉”！！」

「なっ……！！？」

キュベレーはリーパーに向けて”火の粉”を吐く。自分の予想が外れた事に驚いたリーパー。

「ちっ……動き……やがれ……！」

リーパーは逃げようとするが彼は今硬直状態でいくら予知夢があるとしても体が思うように動けなかった。そして、そんな彼を”火の粉”——それよりも何倍も大きい”火の粉”が包みこんだ。

「ぐわあああ！？な……何故これほどの威力が……！？」

「あなたに特性があるように私達にもあるのよ。私の特性は貫い火でああなたが弾いた”火の粉”を吸収したの。それで能力があがったんだけど……まさかこれほどの威力になるなんて……」

”火の粉”の威力に驚きながらもキュベレーは説明をする。先ほどリーパーが”念力”によって弾いた”火の粉”に当たったキュベレーは自分の特性——貫い火によって攻撃と特攻が上がったのだ。

「あとは目を瞑った時……キュベレーはただ落ち着かせるためにやった行動なんだけど……どうやらその時に”瞑想”を修得したようだったね。」

フィールドもその説明に付け加えた。つまり、知らない間に修得した”瞑想”を使った事により特攻がさらに上がった。結果”火の粉”がかなりの威力になった訳だという。ちなみにロコンは”瞑想”を覚えられないらしいのだが、その事には触れないでほしい。

「さて……こいつでトドメだ！」真空波動弾”！！」

説明を終えたフィールドは”火の粉”のダメージで呻いているリーパー

「にダメ押しの”真空波動弾”を放った。その技はもちろんリーパーを飲み込み、中規模の爆発が起きた。」

「そんな…俺が新米の探検隊に…ぎゃあああああ！！！！？」

「やったの！？」

煙が晴れるとそこには片膝をついているリーパーがいた。だが、限界がきたのかそのままゆっくりと前のめりに倒れた。

「や…やったあ！！私達お尋ね者を倒したよ！！」

「なんとか勝てたな…。それよりも…。」

喜ぶキュベレーを余所にフィールドはリーナに近づいた。

「フィールドさん……。」

「山のふもとでノルクが待ってるよ？一緒に行こっか。」

そういいリーナの頭を撫でるフィールド。リーナは涙を流しながらただただ頷いた。

「…あれ？バッチが点滅してる…」

フィールドがそういいながらバッチを見る。確かにバッチは真ん中のピンク色の部分（フィールド達はノーマルランクであるため）が点滅していた。すると――

「探検隊『サンライズ』ノ皆サン、『トゲトゲ山』ノフモト二来テ下サイ。」

「のわっ！？」

「ひゃあ！？バッチから声が…！！」

「この声、聞いた事ある！確か…ほあんかんのバイルさんだよ！！」

バッチから声が出てきて驚くフィールドとキュベレーに対して（なぜか）冷静なリイナ。

「そうなんだあ…初めて声を聞いたよ。」

「……ほあんかん？」

納得をするキュベレーとオウム返しをするフィールド。

「保安官って言うのはお尋ね者みたいな悪いポケモンを逮捕するポケモン達の事だよ！」

俗に人間で言う警察と同じ職業である。

「なるほど…それじゃ、保安官に会いに山のふもとに行くか！」

フィールドはバッチを空に高く掲げる。そして、3匹と倒れている1匹は光に包まれて『トゲトゲ山』を脱出した。

フィールド達が山のふもとに着くと銀色の体にUの字磁石を体の斜め下2つ付けたポケモン——ジバコイルが浮遊していた。そして後ろには丸い体にUの字磁石を真横に2つ付けたポケモン——コイルも浮遊していた。

「ハジメマシテ！ワタシハ保安官ヲ務メテイルバイルト言イマス。」

丁寧な自己紹介をするバイル。フィールド達もお辞儀をした。

「ところでどうしてここが分かったのですか？」

「ソレハノルクサンガ我々ニ通報シテクレタカラデス。」

キュベレーの問いにバイルが答えると彼の後ろからノルクが出てきた。

「……！！お、お兄ちゃあ——ん——！！」

「リイ……リイナあ——！！！！」

リイナは猛ダッシュをして両腕を差し出すノルクに飛び込んだ！！

「お兄ちゃん！！怖かったよあ——！！！！」

「お兄ちゃんが目を離した隙に……ごめんよ……!!」

2匹は再会出来て嬉しかったようでした。しばらく声を出して泣き続けた。

「……あつ、思わず見入っちゃったよ！バイルさん、……コイツをよろしく願います!!」

思い出したように倒れているリーパーをバイルに見せるフィルド。

「……確力ニ才尋ネ者リーパーデスネ。」

リーパーを確認すると後ろで待機していたコイル達がリーパーに向けて動き出す。そして、リーパーを立たせた。

「……うう……なっ……保安官!？」

ようやく目を覚ましたリーパー。しかし、両サイドをコイル達に抑えられており逃げ出す事はほぼ不可能な状態だった。

「チョウド目ヲ覚マシタカ。……ソレデハ『サンライズ』ノ皆サン、ゴ協力アリガトウゴザイマシタ！賞金ハギルドノ方ヘ送りマシタノデ……。サア、来ルンダ！」

「トホホ……。」

肩をがつくりと落としたリーパーを連れてバイル達は先に下りていった。残されたフィルドとキュベレーはすでに泣き止んだノルク達の元へ向かっていった。

「リイナ……怪我はしていない？」

「うん！大丈夫だよ!!」

「本当に……？」

「大丈夫だよ。リイナは怪我は1つもしていないよ。」

心配するノルクにフィルドが声をかけた。

「あつ…フィルドさん、キュベレーさん！リイナを助けていただき
ありがとうございます！……でも。」

フィルド達に頭を下げたノルクだが、その表情はどこか申し訳なさ
そうにも見えた。すると――

「……ごめんなさい！」

「「えっ？」」

突然ノルクが謝ってきたのだ。フィルド達も何故ノルクが謝って
くるのか理由も分からず戸惑った。

「実は……フィルドさん達がダンジョンに入った時、ここで待つ
て言ってくれたのにここを離れたんです…。」

ノルクは山のふもとから動かないとフィルド達に言われたが、バイ
ルを呼ぶために離れてしまった事を悔いていたのであった。

「そんな事はないよ。ノルク君がバイルさんを呼んでくれたおかげ
で、リーパーは拘束できたんだよ！もしかしたら君が呼んでいなか
ったらリーパーがまた逃げて悪い事をしてたかもしれない……。ノ
ルク君にはむしろ感謝してるんだよ！」

満面の笑みで言うキュベレー。その言葉を聞きノルクの表情がパ
ツと明るくなった。

「フィルドさん、キュベレーさん……本当にありがとうございました！ほら、リィナも」

「フィルドさん！キュベレーさん！助けてくれてありがとうございます！」

ノルクとリィナが揃って頭を下げる。

「どういたしまして！」

「気を付けて帰るんだよ？」

「はい……！本当に……ありがとうございました……！」

フィルドとキュベレーは笑顔で言うとノルクとリィナは再び揃って頭を下げて、帰っていった。

「さてと、俺達も帰るか！」

「そうだね！」

こうしてフィルド達は初めてのお尋ね者退治は無事に成功したのだった。

くプクリンのギルドく

「お前達、保安官のバイルさんから賞金が届いたぞ、初めてのお尋ね者退治は成功したようだな」

フィールド達がギルドに帰ってくるとやけに上機嫌なペラトが出迎えてくれた。

「今回の賞金は3000ポケだよ」

「ええーっ！！さ、3000ポケえ！！？」

「昨日より多いじゃないか！！」

3000ポケという単語を聞いただけで驚きと嬉しさを隠しきれないフィールドとキュベレー。そして、

「……………」

期待の眼差しでペラトを見つめる。フィールドに至っては手を前に差し出していた。

「そうだな…。お前達の報酬はこれくらいだな」

フィールド達の眼差しをスルーしながらフィールドにポケを渡す。

「えっ……………これだけなんですか……………」

キュベレーがフィールドの脇から覗きながらショックを受けたような感じで言う。何故なら彼らが貰った報酬は3000ポケのうち2700ポケ引かれた300ポケ（硬貨3枚）であつた。

「さ……………300ポケだけかよー！！」

「……………当たり前だ。これもギルドのしきたりだからな」

フィルドの悲痛な叫びとは対照的に上機嫌に話すペラト。

「この調子でうんと稼いでくれよ。」

ペラトは先ほどと変わらず上機嫌で階段を降りていった。

「はあ……結局こうなるのかよ……。」

「もう少し多くても良かったのにね……。」

ペラトが去った後、昨日と同じくらい肩を下げだキュベレー。そしてフィルドは地べたに座りこんでしまった。

「でも……初めてお尋ね者を退治出来てよかったよ！」

「そうだな！キュベレーも頑張ってたよ！」

「そ……そうかなあ……。あとね……あの時はフィルドの言ってた事より修行の方を優先させてごめんなさい……。」

「いや、急に謝られても……それにあの時って……。」

急に謝るキュベレー。フィルドは腕を組みながら記憶を辿^{たど}ってみる。そして、1つの事に辿り着いた。

「ああ、トレジャータウンでリーパーと初めて会った時か。別に気にしてないよ。俺だって最初は自分の事疑ったし……それよりも謝るのは俺の方だよ。あの時は急に声を荒げてごめんな……。怖くなかったか？」

フィルドもまた謝る。そして、不安そうな顔をしながらキュベレーに聞いた。

「うん…ちょっと怖かったけど、大丈夫だよ！フィールドが教えてくれたおかげでリイナちゃんを助けられたんだから！」

キュベレーの答えを聞き、少し顔がほぐれたフィールド。そして2匹は互いの顔を見て微笑みあった。すると――

ぐりゅるる～

腹の虫が鳴った。

「あ……」

「や……やだ、私ったら…／＼／」

完全に顔を赤くして俯くキュベレー。

「きっとリイナを助けるのに必死だったからお腹が――」

ぐりゅるる～

再び鳴る音。

「…あはは、俺もお腹すいたよ…／＼」

フィールドは照れながら頭を掻く。そして、今度は2匹のお腹から同時にぐりゅるる～と鳴った。

「お腹が鳴った事に気付いたら余計にお腹が鳴っちゃったよ……。」
「そつだな。それじゃあ食堂でご飯を食べに行くか！」

フィルド達は食堂へ向かって走り出した。

9 初めてのお尋ね者退治 完

#9 初めてのお尋ね者退治（後書き）

キュベレー「ねえ、ロコンってめいそう覚えられたっけ？」

それは言わないでー！てか本文でもそう書いたでしょうがー！

フィールド「しかし、文章イマイチだな…。早く立ち直れよ？」

はぁい。

#10 初めての探検と…（前書き）

ついに2桁突入！！

フィールド「それにしてはタイトル微妙だよな。」

気にするな…。

では記念すべき第10話をどうぞ♪

#10 初めての探検と…

「さあ、今日も張り切って仕事を頑張るよー！」

「「「おおー！！！」」」

いつもの朝礼が終わり弟子達は自分の持ち場へと散っていった。

「今日も掲示板の仕事かな？」

「そうなんじゃん？最近はそればかりだし…。」

そんなたわいのない話をしていると……

「おーい、お前達！！！」

今日は珍しくペラトがフィールド達に近づいた。

「お前達は最近よく依頼をこなしているな。特にこの前のお尋ね者を逮捕した事は親方様もお褒めになっていたぞ」

ペラトが言うお尋ね者の逮捕——それはリィナを誘拐したリーパーの事を指していた。後にフィールド達は知った事だがリーパーの逮捕のランクはAランクだったらしい。つまり、通常ノーマルランクだったら手に負えないお尋ね者をフィールド達は逮捕したと言うわけだ。そんな訳でギルドの兄弟子達を驚愕させたと言う事はまた別のお話

「さて、そんな功績もあるからいいよお前達に探検をさせようと思う。」

「「えっ……？」」

ペラトの口から出た言葉でフィールド達はハモる。

「とりあえず不思議な地図を出してごらん。」

ペラトに言われた通りトレジャーバッグから不思議な地図を出し広げた。

「今回探検してほしいところは……トレジャータウンからやや北東に行った所に雲で覆われている場所があるだろう?」

「……あつ、本当ですね。」

ペラトの翼がトレジャータウンから目的の場所まで——まるで線を正確に引いている感じで動しながら説明をする。そして、雲で覆われている場所で動きがピタツと止まった。

「つまりここを調査する事が仕事なんですね?」

「そうだ。ここは『秘密の滝』と呼ばれている。」

「『秘密の滝』かあ……!!」

キュベレーの質問に頷くペラト。そして、フィールドは毎度の如く目を輝かせていた。

「この滝には何か秘密じゃないかと噂がある。近場だし初めての探検にはちょうどいいだろう。それじゃあ、よろしく頼むぞ。」

そついうとペラトは梯子を登っていった。

「それじゃあ俺達も行くか!」

そついい歩きだしたフィールドだが…。

「あれ？キュベレー、どうした……！！」

キュベレーが付いて来ない事に気が付いたフィルドが彼女の方を見ると、キュベレーは震えていた。

「お……おい！？大丈夫か、キュベレー！？」

「う……うん……大丈夫だよ……。実は……あまりに嬉しくて武者震いが……とまらないんだ……。」

心配するフィルドに笑顔で言うキュベレー。しかし、震えてるせいかどこかぎこちなかった。

「（とにかく震えをほぐしてやらないとな……。あのさ、キュベレー？とりあえず片方の前足を俺の手にのせてくれないか？」

「えっ！？き……急にどうしたの！？」

フィルドの突然の申し出に戸惑うキュベレー。こころなしか顔が少し赤くなっている。

「いいから！早くのせてよ！」

「う……うん……分かった。」

幼子おねだりのようにせかすフィルドに右前足を載せるキュベレー。

「そうそう♪それで今から俺が『ファイター！』って掛け声を言うキュベレーは『おおー！』って言うってくれる？」

「うん……！」

フィルドが何をするか若干の期待を込めて頷くキュベレー。

「よし……。じゃあやるか。……『サンライズ』！ファイトー！！」
「えっ！！？……あっ、お……おぉー！！」

フィールドが言った掛け声があまりにも普通すぎて返すタイミングが少しズレたキュベレー。またその間にフィールドは手を少し下げたかと思うといきなり上に上げる動作をした。（その時、キュベレーは自分の前足を支える感覚が一瞬なくなっただかと思っただけ鈍い痛みを感じた。）

「あ……はは……前からやってみたかったんだ。こんな掛け声みたいな事……。」

頭を掻きながら言うフィールド。

「そうだったんだ。でも……」

キュベレーは1つ間を置いて――

「ありがとう……！」

満面の笑みでフィールドにお礼を言った。

「えっ……あ……ああ……どういたしまして」

突然お礼を言われたため一瞬目をぱちくりさせていたフィールドだが

すぐに笑顔になった。

「どうやら震えも止まったようだし……準備して行くか!!」

「そ……そうだね!!」

フィールドとキューベレーは準備をするためトレジャータウンへと向かっていった。そして――

「秘密の滝」

フィールド達は不思議な地図に書かれた『秘密の滝』へと辿り着いた。

「す……すごい……!! 滝がものすごい勢いで落ちてる!!」

毎度の事ながら目を輝かせているフィールド。そんな彼が見ている滝は勢いを衰える事無くザアと音をたてながら下にある滝壺へと流れ落ちていく。

「ねえ! もつと近くで見てみない!？」

「そうだな!!」

フィールド達は滝へ近づこうとした時――

「きゃあ!？」

先に近づいたキュベレーが滝に触れようとした瞬間、およそ1、2メートルほど後方に吹き飛ばされたのである。

「キュベレー!？大丈夫か!？」

「うん……平気だよ。滝の勢いがすごくて飛ばされたただけだから。フィールドも近づいてみたら？」

吹き飛ばされたのにも関わらず表情はどこか楽しそうなキュベレー。そんな彼女を見て大丈夫そうだな、と呟いたフィールドは滝を見て一歩一歩と歩みを進めた。そして、先ほどのキュベレーと同じく滝に触れようとしたが――

「うわあ!？」

また彼もキュベレーの近くまで吹き飛ばされてしまった。

「ね?すごいでしょ?」

「ああ……本当にここ秘密なんてあるのかな!？」

フィールドも楽しそうな笑みを浮かべたその時――

「……ぐうう……!？」

耳鳴りがした。そして、フィールドは辛そうに片手で頭を押さえる。

「フィールド!？」

「……この感覚……また……あの眩暈が……」

——来る！

フィルドがそう思った瞬間彼の視界がぼやけてやがて真っ暗になった。そして、映像が映し出された。

映像が映っていた場所は現在フィルドがいる『秘密の滝』だった。すると、1匹のポケモンの影が滝の近くへとやってきた。その影は滝からおよそ5メートルくらい後ろに下がると助走をつけて滝の中に突っ込んでいった。

（たっ…滝に突っ込んでいった！？）

フィルドが驚いているうちに今度は洞窟らしい映像へと変わっていた。まもなくして先ほどの影が水しぶきと共に突っ込むような形で現れた。その影は何回か転がったが、立ち上がると洞窟の奥へと進んでいった。

（まさか…あんな滝の後ろに洞窟が…！！）

驚いているうちに映像はいつの間にかフィールド達がいた滝の前になっていた。今度はまた別な影があったが、先ほど見た影より結構小さかった。その影もまた同じように滝へ近づいた後、先に入っていた影よりもかなり後ろに下がってから助走をつけて滝へ突っ込んでいった。その後はまた同じように洞窟の映像が映し出されて、小さな影もまた水しぶきと一緒に現れる。そして、辺りをキョロキョロと見渡すと洞窟の奥の方へと進んでいった。そこで映像は途切れた。

しばらくすると滝の轟音が聞こえてきた。フィールドが目を開けると隣ではキュベレーが心配そうに見ていた。

「フィールド！！大丈夫！？」

「ああ……それよりさっき映像が見えたんだ。」

「映像って……リイナちゃんを助けるきっかけになったあれのこと？」

キュベレーの問いに静かに頷くフィールド。

「それで…何が見えたの？」

「実は……ポケモンの影があつた。俺に突っ込んでいったんだ。」

「えええええ！？あの俺に突っ込んでいった！！？」

驚きの声を上げながら前足で俺を指すキュベレー。

「俺も見つめた時は驚いたよ。でもあの俺の中……洞窟が広がっていてその影は奥の方へ進んでいったんだ。だから……」

1つ間を置き――

「俺達も俺に突っ込むしかないよ。」

俺を見据えながらフィールドは言う。しかし……俺に突っ込んでいくしかないと言ったのはいいが、もしあの映像が嘘で洞窟などなかったら……大怪我どころじゃすまないだろう。

――その考えがフィールドの決意を少しずつ削っていく。同時に彼の表情は迷いの色が漂いはじめていた。

「やっぱり突っ込むしかないんだね……ちょっと怖いけど……」

――瞬表情が暗くなるキュベレー。

「でも……私はフィールドを信じるよ……！」

その言葉にフィールドは思わずキュベレーを見る。彼女はそんなフィールドに満面の笑みを返した。

「キュベレー……ありがと……！……！」

フィールドはキュベレーに負けなくらいの笑みを返す。その表情に

は、もう迷いはなかった。

「それじゃ……いち、にのさんで助走をつけて突っ込もう。」

「分かった。やるからには思い切ってやらないとね!!」

「ああ!!」

滝からおよそ7メートル離れた所まで下がりフィールドとキュベレーは互いに頷き合った。そして、滝に向き合う。

「行くよ……。いち、にの……」

「「さん!!」」

声を揃えて走りだすフィールドとキュベレー。2匹の横の列は見事に揃っていた。そして、滝に近づいた瞬間――

「頼む！俺達に……」

「お願い！私達に……」

「「勇気を下さい!!」」

フィールドとキュベレーは滝の轟音に負けなくらい大きな声で言い、滝の中に突っ込んでいった。その時、互いに言っている事が同じでしかも言うタイミングも一緒だったという事に知る由もなかった。

「う……うーん……。」

ひんやりとした空気が体全体を撫でてフィールドは目を覚ました。

「ここは…洞窟なのか……って!？」

自分で言った言葉に反応しすぐに立ち上がって辺りを見渡す。辺りは暗くひんやりとしている。

フィールドの後ろにはややおおきな穴があり、青いカーテンのようなものが上から下へと絶え間なく落ちているのが見える。そこからは『秘密の滝』に來たときに聞いた滝の轟音が鳴り響いていた。

「これって滝だよな…。」

そう言い青いカーテンに手を伸ばす。すると、冷たい感覚と水圧の感触が手を通して伝わった。

「冷たっ!…やっぱりこれはあの滝なんだな。」

フィールド達は滝に突っ込んだ後、この洞窟に倒れていた。つまり、

フィルドの見たあの映像は真実だったのである。

「……………」

「あ、キュベレー！気が付いたのか！？」

フィルドからやや離れて倒れていたキュベレーが気が付いた。

「あ……フィルド……ここは……？」

「ここは滝の裏だよ。」

「えっ！？滝の裏！？？」

辺りをキョロキョロと見渡すキュベレー。そして後ろに流れ落ちる滝を見て、本当に滝の裏なんだ、と呟いた。

「……どうやら奥に進めるようだな。」

フィルドは前方の入り口を見ながら言った。

「きつと奥に何かがあるはずだよ！早く奥に行こうよ！！」

「そうだな……！」

目を輝かせながら先に進むキュベレーをフィルドも追いかけた。

〈滝壺の洞窟〉

フィールドが今いるダンジョン『滝壺の洞窟』は水タイプのポケモン達が住んでいる場所である。また、洞窟内はひんやりとしており涼しかった。

「…ふう。やっぱり苦手なタイプのポケモンと戦っていると疲れちゃうね。」

キュベレーは小さな溜め息をつきながら言った。炎タイプである彼女にとってここは少し厄介なダンジョンであった。

「大丈夫か？少し休もうか？」

「ううん、大丈夫だよ。」

心配するフィールドに笑顔で答えるキュベレー。そして、野生のポケモン達と戦いながらしばらく進んで行くとフィールドは急に止まった。

「…？…どうしたの？」

「静かに……。」

フィールドは自分の指を口元に当ててジェスチャーをする。そして、彼は耳を澄ます。

「…今、悲鳴が聞こえたんだ。……こっちだ!!」

急に走りだすフィールド。

「えっ!?!…あ、待って!!」

キュベレーも慌てて彼を追いかけた。

一方別なフロアでは1匹のポケモンが野生のポケモン達に囲まれていた。囲まれているポケモンは緑色の体に蛇を小さくして手足がついて尻尾が葉っぱの形をしているくさへびポケモン——ツタージャである。そしてその回りには4匹のポケモン達が囲んでいた。ツタージャの前に立っているニョロモから時計回りにコダック、ウパー、アメタマである。

「…これじゃ、先に進めないわね……。」

呟くツタージャ。そして、ニョロモとアメタマが”泡”を、コダックとウパーが”水鉄砲”を放ってきた。

「あたるわけにはいかないんだから！」

4方向からの攻撃をジャンプでかわした。

「……！？！？」

かわされた事に驚くニョロモ達。ツタージャはその隙を逃さなかつ

た。

「まずは……あなたからね！」 蔓の鞭”！！」

ツタージヤは体から蔓を勢いよく出した。そのターゲットはウパーである。”蔓の鞭”はウパーを捉えて叩きつけたのである。水タイプと地面タイプの両方を持つウパーにとって草タイプである”蔓の鞭”は効果は抜群、しかも通常の約2倍ぐらい（通常の効果は抜群は1.4倍）のダメージをくらったため、一撃で気絶してしまった。そして、ウパーを倒された事により他の3匹は狼狽した。

その隙を見逃さずツタージヤは”蔓の鞭”でアメタマとニヨロモに巻き付け、コダツクのいる方へと投げ飛ばした。

「これでトドメよ！」

ツタージヤは大量の葉っぱを出すとニヨロモ達に向けて放つ。ここまでは技、”葉っぱカッター”と対して変わっていない。だが、ニヨロモ達の所へ近づいた瞬間葉っぱは彼らの周りを高速で回りはじめた。その様子はまるで緑色の竜巻のようである。

「いけ！」 グラスミキサー”！！」

ツタージヤが技の名前を叫ぶと竜巻は勢いを増して、ニヨロモ達をダメージを与えた。やがて、竜巻が消えるとそこにはニヨロモ達3匹が気絶していた。

「ふいふ。これで終わった……」

その刹那、ツタージヤの頭上から岩が降ってきた。

「きゃあああ!？」

戦闘が終わって油断していた彼女は反応に少し遅れて直撃をくらってしまふ。しかし、岩が落ちた時にでる衝撃波が彼女を飛ばしたおかげで岩に埋もれる事はなかった。それでも、飛ばされたあとうまく受け身がとれなかったため、彼女は地面に叩きつけられてしまった。

「……はあ……はあ……一体誰が……」

彼女が顔を上げるとそこには蓮の葉っぱを付けているポケモン——ハスボーとドジョウのようなポケモン——ドジョッチがいた。

(水タイプのポケモン……彼らは岩タイプの技を覚えなはずじゃ……)

岩タイプの技が何故打てたのか分からなかったツタージャだったがハスボーが攻撃体勢に入った瞬間、その謎が一気に解けた。

(まさかあのハスボーの”自然の力”が……!?)

”自然の力”——それは入ったダンジョンのフロアの地形により技が変わるのである。『滝壺の洞窟』のフロアの地形は岩……なので”自然の力”は、”岩なだれ”に変わったのである。今まさにハスボーが出そうとしている技は先ほどツタージャに出した、”自然の力”から変わった”岩なだれ”である。

「くっ……ここまで……なの……?」

ツタージャは技を放とうと体を若干仰け反ったハスボーを見て思わず目を瞑った。

#10 初めての探検と… 完

#10 初めての探検と…（後書き）

キュベレー「あのポケモンは？」

それは次回で分かりますよ。

フィールド「どう見てもあれ……絶体絶命のピンチだよな……。」

#11 新たなる力（前書き）

今回は戦闘シーンが長い& a m p・地の文が微妙です。

フィルド「そんなセリフを吐く作者は放っておいて……第11話をどうぞ」

うおい！！そんな言い方はないだろっ！！！！

#11 新たなる力

「あつ！？フィールドあれ！！」

キュベレーが走りながら叫ぶ。そこにはハスボーとドジョッチがいて彼らの向かい側には今にも力尽きそうなポケモン——ツタージャが倒れていた。さらにハスボーはトドメを刺そうと岩を空中に浮かせていた。

「なんでハスボーが岩を浮かせてるんだ！？」

「あれは”自然の力”だよ！フロアの地形によって技が変わるの！！」

驚きを隠せないフィールドにキュベレーは走ってるせいか若干声を荒げながら説明をした。

「なるほどな……じゃあ、あの倒れているポケモンを助けに行くぞ！！”波動弾”！！」

フィールドは走りながら”波動弾”をハスボーに向けて放った。咄嗟に反応出来なかったハスボーは直撃をくらい岩を落としてしまう。

「大丈夫！？これを食べて。」

その間にキュベレーは倒れているツタージャの傍に近づいてオレンの実を手渡した。

「あ……ありがとう……。」

ツタージャはオレンの実を受け取って食べた。一方のフィールドはハスボーとドジョッチの2匹の相手をしていた。

「一気に終わらせる！！”真空波動弾”！！」

フィールドは巨大な刃を出して攻撃しようとする。”真空波動弾”はハスボー達を飲み込んだ。だが――

「な…なに！？」

倒れていたのはドジョッチだけだった。ハスボーは”真空波動弾”の射程外にいたのだった。

「まさか…あのドジョッチがハスボーを突き飛ばしたのか……」

ドジョッチは技があたる直前、ハスボーに”水鉄砲”を当てて射程外にとばしたのだ。まさにフィールドが思っていた通りである。すると、ハスボーは自分の目の前に小さな水色の光を作り出した。そして、その光を空に掲げる。光はゆったりとしたスピードで上がっていきある程度上がったところでまるでシャボン玉が割れるかのように弾けた。すると、頭上からばたばたと何かが降ってきたのである。

「これって……雨？」

「あのハスボー、どうやら”雨乞い”を使ったようだね…。」

少し顔色がよくなったツタージャは言ったその時、雨が一気に降ってきた。

「雨が降ったって別にかわら――！！」

フィールドがハスボーに視点を戻した瞬間、絶句をした。なぜならハスボーは先ほどいた場所にはいなかったからである。

「フィールド！後ろー！！」

「なっ……ぐわあああ！？」

キュベレーに言われて後ろを向こうとした時、ハスボーの”吸い取る”がフィールドを襲った。不意打ちをくらい思わず膝をついてしまうフィールド。

「フィールド！？」

「…！上よ！！」

心配するキュベレーにツタージャは声を上げる。彼女達の頭上にはいつの間にか岩が漂っていた。そして、大量の”岩なだれ”が彼女達を襲った。

「「きゃあああ！？」」

キュベレーとツタージャは”岩なだれ”をまともにくらってしまう。

「大丈夫か！？2匹とも！！」「うん…大丈夫…だよ。」

「私もなんとか平気…」

なんとか立ち上がった2匹。しかし、キュベレーは相性が悪かったためか、かなり苦しそうな表情を浮かべていた。そんなキュベレーに偶然近くに落ちていたオレンの実を拾って食べさせるツタージャ。そして、フィールドはというと目を閉じていた。彼は波動を読み取って素早く動くハスボーの位置を特定しようとしていたのだ。

そして――

「……そこだぁー!!」

”電光石火”を使い、真っ直ぐに突っ込んでいくフィールド。するとドカツ、という鈍い音が聞こえた。

「よし、手応えはあった!!あとは……!!」

フィールドはハスボーを見た瞬間言葉を失ってしまふ。

「えっ!?!さつき技をくらったはずじゃ……」

キュベレーも驚きの声を上げてしまふ。何故なら、ハスボーは先ほど技をくらったが平気そうな表情で立っていたのだ。

「……体力の自然回復で回復することはできるわ。けどこのダンジョンのポケモン達はすぐに全回復できるほどの回復スピードはないはず……なのにどうして……」

「……ハスボーの特性が……」

ツタージャの説明にフィールドはフィールドは顔を少し険しくしながら、反撃を食らわないようにハスボーから離れた。

ハスボーの特性はすいすいと雨受け皿の2つ――すいすいは雨が降っていると連続攻撃が出来たり、素早さがあがる。そして、雨受け皿は雨が降っていると自然回復のスピードが上昇するのである。

今フィールド達がいるフロアは先ほどハスボーが”雨乞い”を使ったことにより、雨が降り続けているためハスボーの特性が2つとも発動しているのである。

この状況を打破するには、天気を変えるのが一番手っ取り早いのだが、今のフィールド達は天気を変える技を覚えておらず道具なども持っていないかった。

「このままじゃ…やられっぱなしだ……」

ハスボーの技をかわしながらフィールドは苦虫を噛んだような表情になる。キュベレーとツタージャもハスボーの攻撃や流れ弾が来るためそれらが来る方向を見極めるために全神経を尖らせていた。

「…1つだけあるかも…」「本当なの!？」

そんな時にキュベレーが呟く。それを聞き取ったツタージャが詰め寄った。

「や…やってみないと分からないけど…」

そういいながら一步前へ出るキュベレー。すると、彼女が前へ出た事に異変を感じたハスボーは”自然の力”を出そうとするが――

「やらせはしない!”波動弾”!!」

フィールドの”波動弾”が先に出たため、それが命中して壁際に吹き飛ばされた。その間にキュベレーは目を瞑った。そして、目をカッと開いた。すると――

「……あ、雨が止んでいく…。」

先ほどまで降っていた雨がだんだんと弱くなり、しまいには止んでしまった。入れ替わって今度は強い日差しがフロア内を照らし始め

た。

「"日本晴れ"...?でも、ロコンってわざマシンを使わないと覚えられないんじゃない...」

ツタージャが考え込んでいるとふと後ろを振り向いていたキュベレーと目が合った。

「どうしたの?」

「えっ、いや...なんでもないよ...。それにしてもあなた、"日本晴れ"が使えたのね!」

「...うーん、そうなのかなあ...」

ツタージャの質問にキュベレーは曖昧に答える。その時ツタージャは自分を見つめているキュベレーの瞳が首に巻いているピンク色のスカーフと同じ色を帯びているように見えた。ずっと見つめているとまるで吸い込まれそうな感覚に少しだけ襲われた。

「でも...今はフィールドに加勢しないと!」

「そ...そうだね!」

キュベレーの声に現実引き戻されたツタージャ。そして先に走ってフィールドがある方向に向かって走りだした。

「急に天気が変わったな...。それじゃまた雨を降らせないうちにトドメを刺しておくか!」

「それなら私も手伝うよ!」

「私も手伝わせて!!」

キュベレーとツタージャも合流し3匹はハスボーに向き直す。ハスボーは再び”雨乞い”を出そうとしていた。

「やらせない！」グラスミキサー”！！」

まずツタージャの”グラスミキサー”がハスボーを包み込み、空中へと浮かせた。

「次は私！」火の粉”！！」

”グラスミキサー”を出している間に”瞑想”を使い威力が上がったキュベレーの”火の粉”を無防備状態となっているハスボーに当てる。

「こいつでトドメだ！！」真空波動弾”！！」

そして、追い討ちをかけるようにフィルドが”真空波動弾”を放った。技はかわされる事はなく見事に命中。ドスンという音を立てて地面に落ちたハスボーは目を回して気絶をしていた。

「どうやら…なんとかなつたみたいだな。ありがとう、キュベレー！それからえつと…」

「私の名前はエレナ。種族はツタージャよ。」

「エレナ…ありがとう！じゃあ、俺も自己紹介するよ。俺の名前はフィルド。種族はリオル。」

「私の名前はキュベレーです。種族はロコンです。」

フィルドはキュベレーとツタージャ——エレナに礼を述べる。そし

て、互いに簡単な自己紹介をした。

「ところでエレナちゃんは――」

「“ちゃん”はいらないわよ。エレナって呼んで。そのかわりに私も呼び捨てで呼ぶから。」

「う…うん。じゃあエレナ、あなたは どうしてダンジョンにいるの？」

キュベレーはどうみても探検隊らしくないエレナにごもつともな質問をする。

「…やっぱり、探検隊じゃないからそんな質問をするのね。」

「えっ！？じゃあ、1匹でダンジョンにきたの！？」

「そうだよ。でも、私はいろんなダンジョンを突破してきたから依頼を出すことはめったにしないの。」

エレナの話聞いてフィルドは彼女が探検隊じゃないのにかなり戦い慣れをしている事に納得をした。

「でも…今回はあなたが来なかったら、危なかったかもね…。」

「やっぱり…悲鳴をあげていたのはエレナだったんだな。」

「つまりあなた達は私の悲鳴を聞き付けて来てくれたのね？」

独り言のように呟いたフィルドに少し驚いたような表情をしながら聞くエレナ。そんなエレナにフィルドは頷いた。

「そうなの…… 本当に助けに来てくれてありがとう…！」

そしてフィルドとキュベレーを交互に見ながら礼を述べるエレナ。

「どういたしまして。ところで最初の質問の答えなんだけど…」

「分かってる。私が何故ダンジョンにいるか…だよね？…それは温泉に行くついでに来たの。」

「温泉??」

エレナは目を輝かせながら答えるが、キュベレーは初めて聞く言葉に首を傾^{かし}げた。

「キュベレー、温泉っていうのは天然のお風呂のことだよ。ちょっと匂いが独特なのが難点なんだけどね。」

「でも、温泉に入ると疲れがとれるし、美容効果があるのよ!」

フィールドが分かりやすく説明をしてエレナがさらに付け加える。

「そうなんだ!入ってみたいなあ…。」

2匹の説明を聞きながら目を輝かせるキュベレー。

「でしょ!!それに私が行こうとしている温泉は景色がいいのよ。」

さらに目を輝かせながら話すエレナ。

「それに…温泉に行く途中この『滝壺の洞窟』には秘密があるって噂を聞いたの。だから、探求心が湧いちゃって入ったのよ。」

ようやくキュベレーの質問に答えたエレナ。その答えを聞き、フィールドは何かを思いついたのか、キュベレーと顔を合わせる。

キュベレーは一瞬目をぱちくりさせたがフィールドの意思を読み取ったのかゆっくりと頷いた。

「奇遇だな。俺達もこの噂を聞いて探検しに来たんだ。もし良かったら…」

「私達と一緒に行かない？」

フィールドが思いついた事、それはエレナと一緒に行く事だった。いくら彼女が戦闘慣れていても先ほどのような状態になってしまったのはマズいと判断したためである。

「そうだね…あなた達には助けてもらったし…いいわよ!!」

エレナは承諾した。

「そうか！ならよろしくな！」

「ええ、こちらこそよろしく!!」

フィールドとエレナは握手を交わした。

「…ところでこの炎天下はいつまで続くんだ？」

少し進んだ頃、暑さに耐えきれなくなったフィールドが口を開いた。

「そうね…。通常ならコダックが出てくれば天気が戻るはずなんだけど……」

エレナが言うコダックとはフィールド達が来る前に彼女が倒した野生のポケモンである。コダックの特性——ノーてんきがあれば天候は穏やかになるはずなのだが、出てきて欲しい時に限ってなかなか出てこないのだ。

「ちょっと待って、元に戻るから。」

「元に戻すって……てかキュベレー、目の色がいつもと違うよ?」

キュベレーの言葉に戸惑うフィールド。またこの時に彼はキュベレーの瞳の色が違う事に気が付いたのだった。その間にも、キュベレーはゆっくりと目を閉じた。すると、それに呼応するかのように徐々に日差しが弱くなってきた。

「す…す…い…!!」

思わず感嘆の声を上げたエレナ。一方のフィールドは腕を組みながら先ほどの日差しについて考えていた。

（キュベレーが太陽…というより日差しの強さか…それを操れるとは…まさかこれって夢で言ってた“新たな力”のこと…なのか…!?!）

そんな事を思っているとキュベレーと目が合った。いつの間にか瞳が暗い赤色に戻っていた彼女も考え込んでいる様な表情をしてやがて口を開いた。

「…ひよっとして夢で見た新たな力の事かも…」

「夢……まさか、ギルドに入門した次の日に見たあれのこと!？」
「えっ? 夢って何のことなの?」

思い出したかのように声を上げたフィルドとキュベレーに対して事情を知らないエレナは頭に?マークを浮かべていた。

「そうだな……この際、話しちゃおうか。」
「そうだね。」

フィルドとキュベレーはエレナに夢についていきさつを話した。

「……なるほどね。じゃあ私も同類かも……」
「まさか……エレナもか!？」

驚きの声を上げるフィルドにエレナは頷く。

「たしか……そう、光と球体はミントのような色合いに近かったよ。」

思い出したのかのように話すエレナ。

「それと、あなた達がいう力ことなんだけど……たぶんあなた達が巻

いている波動のスカーフが関係していると思うの。」

「そうなの？」

「波動のスカーフを付けていると潜在能力の一部、第3の特性が目覚めるんじゃないかなって。」

「第3の特性？？」

初めて聞く言葉にフィルドとキュベレーはハモらせながら、オウム返しをする。エレナが言うには第3の特性はポケモンが生まれながら持っている事が多いらしい。大抵は気付かないで一生を過ごす事が多いが、何かをきっかけに突然目覚めて種族上使えない特性が発動することがあるという。

「なるほど……それが第3の特性の特徴か……。」

納得がいったように頷くフィルド。

「そういう事。それでさっきまでの日差しの強い状態……これはキュベレーの第3の特性、日照りのおかげなの。ダンジョンに入った途端に日差しが強くなるのよ。でも……その状態を自在に操れるのは珍しいわ……。」

つまり、キュベレーのような口コンや進化形のキュウコンの第3の特性は日照り。通常は力尽きたり、他に天気を変える技や特性がない限りは日差しが強い状態が永遠に続くが、キュベレーは任意で日差しを強い状態にしたり、晴れの状態に戻したりする事が出来ると言うのだ。

「そうなんだ……。」

キュベレーは自分の右前足を見ながら呟いた。

「まあ…キュベレーがいきなりそれを使いこなしたって事だよな。キュベレー…これからも頼りにしてるからな！」

「フィールド…：うん！ありがとう／＼／」

頭を撫でてきたフィールドに少し照れるキュベレー。そんな2匹をエレナは少し懐かしむように見ていた。

「ふふっ。本当に仲がいいのね！でも、そろそろ先に進まないと…」

「そ…：そうだな！」

「うん！！」

エレナに促されて2匹は頷く。そして、フィールド達は洞窟の奥へと進んでいった。

1 1 新たな力 完

#11 新たなる力（後書き）

今回出てきた第3の特性…これはポケモンB・Wに使われる夢特性とおなじです。

フィールド「なあ、俺にもあるのか？」

……… あると思います！

キュベレー「（今の間はいい……）」

そして、新キャラのエレナ。彼女は同行者です。

なので、今のところは…

名前：エレナ

種族：ツタージャ

性別：♀

性格：勇敢

…を頭に入れてくだされば結構です。

また…後半の夢を見た部分で疑問符がでた方は…

フィールド「第5話を見れば分かります！！」

人のセリフとるなよ！！

#12 洞窟の秘密（前書き）

フィールド「遅い……」

エレナ「10日も経ってるんだけど……」

いやゝなかなか文章がまとまらなくて……遅くなって申し訳ないです。

では第12話をどうぞ！

「これを持ち帰れたら皆本当に喜ぶよ!!」

「それじゃ、あなた達のお仲間さんのために手伝いますか!」

軽く腕を回して宝石を引き抜こうとするエレナだったが……

「……せーの、くうう!!……ぬ……抜けない……」

宝石はびくともしなかった。

「エレナ、今度は俺がやるよ。」

エレナと交代しフィールドも宝石を引き抜こうとするが――

「んのだ……まだまだ……はあああ!!……く、くそ微動だにも動かないのか……!」

先ほどと同じく宝石は引き抜けなかった。

「じゃあ……今度は私が!!」

フィールドと入れ替わるように宝石の前に立つキュベレー。そして、2匹と同じく引き抜こうとする。その様子を少し離れて見ていたフィールドだったが――

「くっ……!!?また……あの夢かつ……!!」

本日2度目の耳鳴りに襲われた。宝石を引き抜くのに集中しているキュベレーとエレナはフィールドが苦痛の表情をしている事に全く気が付いていないようだった。やがて、風景が歪み目の前が真っ暗になっっていく、映像が三度映し出された。

映像は先ほどフィールド達がいた『滝壺の洞窟 奥地』を映し出している。まもなくして、最初に滝に突っ込んだポケモンの影がやってきた。そして、大きな宝石の前に立つと躊躇なくそれを押したのだ。宝石は簡単に押し出される。

だが、その影は何やら慌てたようにキョロキョロと左右を見ていた。そして、右に体を向けると突然右端から大量の水が流れてきた。表情は読み取れなかったが、飛び上がったため驚いているのが分かった。そして水は影を飲み込み——そこで途切れてしまった。

（……今の映像は一体……）

フィールドは宝石を抜くのに悪戦苦闘中のキュベレー達の様子を見ながら先ほど見えた映像を整理を始めた。

（あの影が宝石を押した時、大量の水が流れてきた……って事はあれは押しちゃマズいんじゃない……）

フィルドの疑問が結論に達した時だった。

「……はあはあ……やっぱり抜けないよ……。」

「……あつ、それなら押してみよつか！」

先ほどまで座り込んでいたエレナが思いついたように立ち上がると宝石の前に立つ。

「……！！……エ、エレナ押すなあー！！！」

だがフィルドの制止も甲斐無くエレナは宝石を押した――

（あ……あ……あああああー！！！！）

フィルドが心の中で叫ぶが――

「んー！！！！……ってなかなか固いわね……。」

エレナが押しても宝石はびくともしなかった。どうやら彼女は腕の力が弱かったらしく、フィルドが見た影が簡単に押せた宝石を押す事が出来なかったようだった。

「……ふう……（た……助かった……）」

空気が抜けたように一気にその場で座りこんだフィルド。

「エレナ、私が押そうか？」

「大丈夫よ。キュベレーは休んでいて。」

だが、女性陣は諦めてなかったようだった。

「（あ、いけね！早く教えないと……）おい、2匹とも！その宝石は押しちゃ——」

「フィールド、今から集中するから話し掛けないで——」「あ……悪い……」

2匹に真実を教えようとしたが、エレナに制されてしまい言うタイミングを逃してしまったフィールド。そんなフィールドを一瞥し、宝石からおよそ5メートル離れるエレナ。

そして——

「うおおおおお——！」

雄叫びを上げながら走り出した。そして、宝石との距離が残り約70センチくらいにさしかかった時だった。エレナは突然ジャンプしたのである。

「んな……！！！」

「と、飛んだ……！！！」

フィールドが絶句をし、キュベレーが呆氣にとられている間にもエレナと宝石との距離はおよそ50センチになっていた。

「うおおおおりゃ——！！！」

助走した時に着いたスピードを落とさないまま、彼女は宝石に向か

って——飛び蹴りを放った。そして、カチツという音ではなくバコオン！と言う破壊音が洞窟内に鳴り響いた。その音を聞きフィールドはしまった、というような表情に変わった。

「ふう……なんとか押せた……」

「なっ……何してんだよおおおー?!」

爽やかな笑顔を作るエレナに対して悲鳴混じりの声を上げるフィールド。

「何って、押したただだよ」

「ちよつと手荒かったけどね……」

笑顔を崩さないエレナに苦笑いしながら言うキュベレー。

「と、とにかくここから離れるぞ!」

「えっ?」

やや声を荒げながら言うフィールドにキュベレーとエレナは状況が読めないためか疑問を浮かべたような表情をしながらも言われた通り走りだす。この後何が起こるか知っているフィールドはエレナが飛び蹴りしたとき、畏も一緒に壊れてるようにと強く願いながら来た道を走っていったが——

その願いも遠くから聞こえてきた激流の音に虚しく消されてしまった。

（やっぱり間に合いそうにないな……あと、15秒ぐらいで確実に来る……!）

フィールドがそう思ったと同時にゴゴゴゴゴ……という音が洞窟内に響

き始めた。

「なっ…何の音!？」

「キュベレー! エレナ! 俺にしがみつけ!！」

「でも……」

「いいからしがみつけ!！」

突然響き始めた不気味な音に若干パニック状態のキュベレーに、フィールドにしがみつくと事に戸惑うエレナ。そんな2匹に次第に大きくなっていく音に負けないぐらいの大声を上げるフィールド。そして、2匹がようやくしがみついた頃には音と同時にやや強い震動が洞窟全体を揺らしはじめていた。

「いいか……なにがあっても放すなよ。」

静かに言うフィールドにキュベレーとエレナは頷いた。この時、音が聞こえる方を見ながら言ったフィールドにキュベレーがカッコいい、と思っていた事はここだけの話。

まもなくしてフィールド達の視界に大量の激流が勢いよく流れてきた。

「うそ…!？」

「まさかさつき押したのは——!！」

エレナがいい終わらないうちに激流は彼らを呑み込んでいった。

〈温泉〉

場所が変わってここは温泉。緑が豊かな自然に囲まれており、長閑のどかな時間が流れていた。また源水が湧き出ている場所が平地よりやや高かったためか、木々の間から広大な景色が見れるのである。そんな温泉には数匹のポケモン達が入っていた。すると、どこからかゴゴゴゴ……と言う音が遠くの方から聞こえてきたのである。その音が聞こえたポケモン達は辺りを心配そうに見渡していた。音はだんだんと大きくなっていき、辺りが震動し始めた瞬間――

岩盤浴をしていた1匹のポケモンのすぐ後ろからブシャアアア、と水が噴水のように噴き出したのである。まもなくして水が作り出した冷たい雨が降り出したと同時に上から3つの影が叫び声を上げながら落ちてきた。

時はほんの少し遡る。フィールド達は宝石に組み込まれていた罫により激流に吞まれていた。その流れは想像以上に強くそして速かったため、フィールド達は何も出来ずに流されていたのだ。だが次の瞬間

（うわぁ!?!）

フィルドは宙へと放り出されたような感覚を感じたのである。

思わず目を開けてみると先ほどいた洞窟とはうって変わり青い空と白い雲が彼の眼下に映し出されていた。その風景に見惚れていると下に引つ張られる感覚を感じた。フィルドはその原因を確かめるために下を向いた。

「本当に浮いてたのか……てことは……この感覚は下に落ちているって事か!?!」

フィルドは今自分が置かれている状況を理解した。

「あれ……これって落ちているよね……?」

「キュ、キュベレー!?!まさか……じょ……冗談で言ってるのよね……?」

キュベレーとエレナもどうやら気がついたようだった。心なしかエレナの顔から血の気が引いていたようにも見える。そして、フィルドはキュベレーが言った事に再度重力に引かれる感覚、そして真下から吹き付ける風を改めて感じた。つまり――

「やつぱり……本当に落ちているんだぁぁぁ!?!?」

「きゃぁぁぁぁ!?!?」

「嫌ぁぁぁぁ!?!?」

3匹はもはや叫ぶしか出来ずに落ちていった。やがてバシヤアアア、と何かに叩きつけられた音が聞こえたのと同時にフィルドは意

識を手放してしまった。

「……て……ルド！……フィールド！起きて！！」
「……むぐっ！？」

誰かに呼ばれて返事をしようとしたフィールドだが、水と一緒に飲み込んでしまった。

「……ケホケホ……ここは……一体……？」

「うーん……見た感じだとさっきいた洞窟とは違うみたいだね……」

フィールドはむせ返りながらもキュベレーと状況を把握しようとする。

「あのーあなた達大丈夫？」

「えっ……？」

どこからか声が聞こえてきたため、2匹は声がる方へ体を向けた。そこには、茶色い体に額の三日月模様が特徴的なこぐまポケモン――ヒメグマが心配そうに見ていた。また、ほかのポケモン達もヒメグマと同じ表情をしてフィールドとキュベレーを見ていた。

「ああ……驚かせてごめんなさい……俺達は大丈夫です。」

「そう、なら良かったわ。でも、本当にビックリしたわよ。」

「どうしてですか…?」

「だってあなた達空から落っこちてきたんだもの。あっ、私はヒメ。」

ヒメグマのヒメはすこし安堵を浮かべた表情をする。そして、先ほどフィールド達が落ちてきた事を説明した。

「…あれ? そう言えばエレナは…?」

「おい!!」

キュベレーがエレナがいない事に気付き辺りを見渡すとどこからか聞き覚えのある声が聞こえてきた。声がする方向を見ると、岩盤の近くにエレナがいて岩盤には亀のようなポケモン——コータスが座っていた。

「エレナ…さっきよりは顔色が良くなったみたいだな。」

「え…何が…」

「空中に浮いてた時、顔から血の気が引いてたよ。」「そ、そうだった? ……あ、ここは温泉だよ!」

心配するフィールドを余所にはぐらかすエレナ。

「えっ!? これが温泉なの!!?」

「そうじゃ。」

キュベレーの声に反応したのは岩盤に座っていたコータスである。彼は温泉に入らない代わりに岩盤浴をしていたのだ。

「ほれ、地図を出してみなされ。」

言われた通りに地図を出すフィールド。激流に吞まれたのにトレジャ―バッグの中身が全く濡れていなかった事にフィールドはすごいなあ…、と呟く。そして、岩盤の上に地図を広げた。

「今お主達がいる温泉はちょうどこの辺りじゃ。」

コータスが温泉がある位置に指を差す。

「俺達がいた『滝壺の洞窟』はここだから……」

「私達は洞窟から温泉まで流されたって事なの!？」

コータスとフィールドが指差した場所を交互に見ながら驚きの声を上げたキュベレー。

「なんとそんな所から流されてきたのか!それはさぞ長い時間水に浸かっていて寒かっただろう……。この温泉に入って体の芯まで温まっていきなさい。」

「やったあ!」

コータスの勧めにエレナは大喜びである。

「あ、…ひよつとしてエレナが言ってた温泉って……」

「そう!この事だよ!この温泉は肩こりによく効くし、疲れも一気に吹き飛ぶの。また、水が苦手なほのおタイプのポケモンもはいれちゃうのよ!」

「おお!この温泉について詳しいのう」

温泉の特徴に熱弁を振るうエレナにコータスはかなり感心していた。その様子を見てフィールドが今のエレナはセカイイチについて語る親

方みたいだな、と心の中で言ったのはここだけの話である。

〈交差点〉

「ふう〜さっぱりしたね〜おかげで探検の疲れもとれちゃったよ!」

「でしょ!! あそこの温泉はね温泉マニアが5本指に入れるすごく有名な場所なんだよ!」

（ポケモンの世界にもマニアがいるもんだな……こうしてるとポケモンも人間とあんまり変わらないだな……）

温泉の事をまだ話しているキュベレーとエレナ。そんな2匹を見てフィールドは微笑みながらもポケモンと人間はあまり変わってないなと実感を感じていた。

——あの後フィールド達は体が温まるまで温泉に入っていた。そして、充分に体が温まったので温泉を後にし現在はギルドに戻っている最中である。

「さて、俺達は今からギルドに戻らないといけないんだな……エレナはこれからどうするんだ?」

「そっか……あなた達は探検隊で修行の身なんだよね……うーん……」

フィールドに話を振られてしばらく考えるエレナ。そして――

「……そうだ！私まだあなた達にお礼してなかったわよね？」
「えっ？温泉に案内してくれたからお礼はしたんじゃない？……？」

キュベレーの疑問にエレナは静かに首を横に振る。

「あれは流されて着いたって事でしょ？私は案内してないわ。」
「なるほど……それでお礼の内容は？」

エレナの理由に納得したフィールドは改めてお礼の内容を聞く。

「私のお礼……それはあなた達の仲間にしてほしいの。」
「「えっ……？？」」

フィールドとキュベレーの声がハモった。

「でも……俺達はまだ修行中なんだ。仲間になったら温泉に行けなくなるぞ？」

「温泉は堪能したからもう大丈夫よ。それに少しの間あなた達と探検してすごく楽しかったし……」

焦らすように話を区切るエレナ。そして――

「……あなた達、まだ仲間がいないでしょ？」
「うっ……」

エレナの発言に何も言い返せないフィルド。静寂が辺りを包む。お互いに黙ったまま時は静かに過ぎていった。

「…フィルド、私はいいと思うよ!」

「キュベレー……」

そんな静寂を打ち破ったキュベレー。

「確かにエレナのいう通り私達『サンライズ』には仲間がいない…それに私事が挟んじゃうけど、同年代の女の子でこんなに話したのは初めてなの……だから私は……エレナともっと話がしたいんだ…!」

珍しく強気で語るキュベレー。フィルドはその言葉から彼女の強い意志が込められているのを感じていた。

「そうだな…エレナが言ってる事は正論だし、キュベレーの意志も確認出来たからな。……エレナ、仲間になるからには途中で放棄する事は許されないからな。」

「……フィルド…!」

「覚悟は出来てるわ!」

言ってる事はややきついが穏やかな表情で言うフィルドにキュベレーは満面の笑みを浮かべ、エレナは強く頷いた。

「それじゃ、探検の報告と仲間の手続きをしにギルドに行くか!」

「うん…!」

「わかったわ…!」

こうして、エレナを加えた『サンライズ』はギルドへと走っていつ

た。

1
2
洞窟の秘密
完

#12 洞窟の秘密（後書き）

ちなみにエレナはまだ正式には仲間になっておりません。

キュベレー「登録しないといけないんだっけ？」

そうですね。

フィールド「ま……まさかあれを……」

それは次回にちゃんと分らないですよ。

#13 探検の報告にて（前書き）

いよいよ『滝壺の洞窟』での探検を報告すれば、任務は終了ですよ？

フィールド「長かったなあ」

エレナ「それでは第13話をどうぞ！」

#13 探検の報告にて

くプクリンのギルドく

『滝壺の洞窟』を探検し、秘密を解いたフィールド達はギルドに帰還しペラトに報告をしていた。

「なるほど……『秘密の滝』の裏側はダンジョンになっていたと……」

「ああ。」

「そして、ダンジョンの一番奥には宝石があつて……一際大きい宝石を採ろうとしたがそれは畏で……押した瞬間仕掛けが作動して、お前達は激流に流されたと……」

「はい。」

現在ペラトがフィールド達の報告を整理しており、フィールドとキュベレーが時折相づちを打っていた。

「そして……流れ着いた場所があ有名な温泉だったと……」

「ああ。」

「それで……一連の探検を後ろのツタージャも同行して……『サンライズ』のメンバーになる事を志願していると……」

「そういう事です。」

「お宝は採ってこれなかったのはすごく残念でしたけど……」

エレナが付け加えるように言うとキュベレーは暗い表情へと変わった。

「いやいや！そんな事はないよ！だいたいあの滝の裏に洞窟があつ

たなど誰も知らなかったわけだし……それが分かっただけでもすごい成果だよ」お前達、よくやってくれたよ」

その様子を見たペラトは珍しく褒めながらフォローをする。その言葉を聞きキュベレーの表情が一瞬のうちに晴れやかになった。

「ほ、本当ですか!？」

「本当さ」これは世紀の大発見だよ!!」

「やったじゃない!! キュベレー!!」

「うん!!」

キュベレーの両前足を手にとって上下に降るエレナ。その表情は笑顔だった。キュベレーもつられて表情が綻びる。ペラトも上機嫌にメトロノームのような尾羽を左右に動かしていた。だが喜ぶ3匹を余所にフィールドだけは腕を組み考え事をしていた。

（『秘密の滝』で見た2つのポケモンの影……小さい方は……エレナだろうな。じゃあ、もう1つは……）

フィールドは『秘密の滝』……いや『滝壺の洞窟』に映し出されていたポケモンの影について考えていた。

「（……あの長い耳にやや胴長でふつくらした体型……絶対見覚えが……!! まさかあれは……!!）なあ、ペラト？」

「おや、やつと口を開いたか」

先ほどとは変わらない上機嫌で反応するペラト。そしてサクヤの部屋に向かって歩きながらフィールド達に指示を出した。

「今回の探検と仲間の件については私が報告をするからお前達はこ

こで待っ——」

「単刀直入に聞くけど、サクヤ親方は、あの滝に行った事があるのか？」

フィルドの質問にペラトの足が止まる。そして、ゆっくりとした動きで振り返った。その表情は先ほどとは打って変わりがかなり驚いていた。

「な、何を今更！もし、親方様が既に探検をしていたらお前達には頼まないはずだよ——」

「だったら、報告するついでに本人に確認してほしいんだ！頼むよ——」

やや早口で理由を述べるペラトに必死に訴えるフィルド。その様子をキュベレーとエレナはただ見ているしかなかった。そして、1分半ぐらい口論した末にペラトが先に折れて渋々とサクヤの部屋へと入っていった。

「…フィルド。どうして親方様があの滝に行った事があるって聞いたの？」

ペラトが部屋に入ったのを見計らいキュベレーが口を開いた。彼女の表情はフィルドがとった行動に理解し難いと訴えるようにも見える。

「ああ、実は探検している途中で眩暈に襲われて映像が見えたって話をしただろ？その時に見た影の1つがサクヤ親方にそっくりだったような気がしたんだ。」

「そうだったんだ。」

「え、眩暈がして映像が見えたあ？それってどういう事??」

キュベレーは納得をしたがエレナは驚きの声を上げるエレナ。

「あ、まだエレナには話してなかったな。実は……!!」

フィルドがいきさつを話そうとした時、彼の表情が一気に青ざめた。

「2匹とも！耳を塞げ!!」

「……!!わかったよ!!」

指示を出すのと同時に耳を塞ぐフィルド。キュベレーも何かを悟ったのかすぐに耳を塞ぐ。一方のエレナは状況が読めないようですぐに耳を塞ごうとはしなかった。

「えっ、何!? どういう……」

そして、次の瞬間――

「たあああ――!!!!」

「きゃあああ!!!!?」

「ぐうう……!!」

「ううう……!!」

聞き覚えのある声質のハイパーボイスがサクヤの部屋からギルド中にこだました。部屋の外にいるため幾分和らいているがやはり耳を塞がないと辛い。そして、せっかくペラトが直した扉もバコン!と勢いよく吹き飛んでしまった。

（またペラトさんの仕事が増えそうだなあ……）

とキュベレーは心の中で呟いた。そして、埃が作り出す煙がサクヤの部屋から溢れだす。そしてケホケホ、とむせかえりながらペラトが煙の中から現れた。

「ペラトさん！！大丈夫！！？」

「ああ…なんとか…な…ケホケホ……」

（全然大丈夫そうに見えないって！！）

心配するキュベレーに大丈夫だ、と答えるペラトにエレナは心の中で突っ込んだ。

「…それでどうだったんだ？」

「あ、ああ…それが報告したついでに聞いたところ……」

ペラトが話を区切る。

「“思い出し出！…たああー！！！”と言ってから…“あ、よく考えたら行った事あるかも”とおっしゃってた…」

「そうだったんだ。聞いてくれてありがとうございます。」

体に付いた埃を落としながら説明するペラトにフィルドは大して気落ちせずに納得をした。

「はあ……せつかく苦勞して見つけたのに……」

一方のキュベレーは大きくうなだれてしまう。

「まあ、前回のお尋ね者退治と今回の調査でのお前達の努力は評価しているからそう気落ちするな。また明日から頑張ってくれ。…お

つと、忘れるところだったが夕食を食べたら親方様の部屋に行くようにな。」

ペラトはそう言う食堂へと歩き出す。

「ねえ……ひよつとしてさっきの大声を聴くことになる…?」

「ああ…耳を塞いでも無駄なくらいの大声がとんでくるよ…。」

辛そうに目を向けたエレナにフィルドは溜め息をつきながら答えた。こうして、3匹は食堂に向かってゆつくりと歩いていった。

フィルド達『サンライズ』は夕食を食べた後、ペラトと共にサクヤの部屋に来ていた。

「やあ!」

「ひゃあ!」

サクヤはフィルド達がギルドに初めて来た時のように突然振り向いて声をかける。ちなみに驚きの声を上げているのはエレナである。フィルドとキュベレーは1度経験したため特に驚いた様子はなかった。

「今回は大変だったね！でも大丈夫！！キミ達の活躍はちゃんと見てるから安心して♪…あ、後ろのキミははじめましてだね♪」

”後ろのキミ”とはフィールド達の後ろにいるエレナの事である。

「ボクの名前はサクヤ♪よろしくね、ともだち♪」

「よ…よろしく願いします… ツタージャのエレナです…」

サクヤのペースに少し戸惑いながらも簡単な自己紹介をするエレナ。

「それじゃ、ここからは本題に入るね♪まずはエレナの探検隊登録についてなんだけど……」

話を切るサクヤにフィールド達はゴクン、と生唾を飲む。

「……実は登録してあるんだ♪」

「」「ええっ！？」「」

意外な答えにフィールド達は驚きの声を上げる。

「……まさかペラトが報告してた時にか！？」

~~~~~

“ 2匹とも！耳を塞ぐんだ！！”

“ …！！分かった！！”

“ えっ、何！？どういう… ”

“ たあああー！ー！ー！！”

“ きゃああああ！！？”

~~~~~

「 ……まさにその通りだよ… 」

夕方のやりとりを思い出したのか、苦い表情をするペラト。その表情の8割方はおそらくサクヤのハイパーボイスが原因であろう。さすがにこれ以上の追及はしない方がいいかな、とフィールドは思い考える事をやめた。

「 まあ、次がキミ達を呼んだ訳に最も近いんだ。 」

『 サンライズ 』のメンバーを1匹ずつ見ながら言うサクヤ。その表情はフィールド達が見てきた中で一番真剣で真面目な表情をしていた。

「実はね近々遠征をやるうと思ってるんだ。」

「「遠征?」?」

聞き慣れない言葉を聞き、フィールドとキュベレーは声をハモらせる。

「遠征…って結構遠くのダンジョンまで探検に行くって事ですよね?」

「そうだ。今までのように近場を探検するわけじゃないから、それなりの準備をして行く。そして、遠征はメンバーの中から選抜して連れて行くんだよ。」

エレナに頷きながら補足をするペラト。

「それで通常は新入りした弟子は連れて行かないけど…キミ達はかなり頑張ってるじゃない?だから、今回は特別にキミ達『サンライズ』も選抜の候補に入れようと思うんだ」

「えっ……!」?

「ほ…本当ですか!」?

フィールドとキュベレーは驚いた声を上げてサクヤを見上げる。そんな2匹に彼は満面の笑みを浮かべる。

「質問なんですけど。」

「ん?何かな?」

エレナが手を上げた。サクヤは先ほど変わらない笑みを浮かべながら彼女を見る。

「それって私も加わっているんですか?」

「もちろん♪だってボクは『サンライズ』のメンバー全員に言っ

るんだよ」

エレナの質問にサクヤは当たり前と言わんばかりの答えを返した。

「やったあ！！エレナも遠征に行けるんだ！」

「入ったばかりで選ばれるっていいのかなって思っけど……すごく楽しみだね！！」

「こらこら。まだ決まった訳じゃないぞ！これからのお前達の頑張り次第だからな！！」

喜ぶ女性陣を見たペラトが一喝を入れる。

「…あ、親方様！俺も質問があります！」

フィールドが何かを思い出したように声を上げた。

「いいよ」

「実は……ギルドに入門した時にもらった箱……あれの中身についてなんです。」

フィールドの質問にサクヤのにやかな表情が急に真面目な顔つきへと変わる。キュベレー、エレナ、ペラトはサクヤの急変に戸惑う。フィールドもそれを気にしながらもトレジャーバッグから何かを取り出す。

「この道具は初めて見るな……」

「あ、それって……」

「「これ……見たことがあるわ……」」

ペラトが物珍しそうに球体を見る中、キュベレーが思い出したよう

に言う。またエレナも小声で呟いた。フィールドが取り出したのは弟子入りした翌日、サクヤからもらった箱に入っていた不思議な球体である。

「親方様はこれについて何か知ってますか？」

サクヤに見せながら言うフィールド。

「そうだね……ほんの少し知ってるよ。」

「ほ……本当なんですか！？」

サクヤの答えにキュベレーは声を上げる。

「うんゝだからね……見せてもらいたいんだ。」

「見せて……もらいたい？」

エレナは言葉のオウム返しをする。

「それが波動のスカーフを生み出せるのかを……ね。」「なっ……！」

「えっ……！？」

フィールド、キュベレー、エレナは思わず絶句をしてしまう。一方のペラトは話に全くついていけないようで何度も首を傾げていた。

「だってキミ達がしてるスカーフはボクがあげた探検隊キッドに入ってたんだよ？それに無地のスカーフはダンジョンに落ちていないよ？」

サクヤの説明にペラトはさすが親方様、と称賛しフィールドはサクヤの分析力に思わず舌を巻いた。

「それじゃ、証拠を見せないとな……エレナ、この球体を触ってみて。」

「分かったわ。」

フィールドに言われた通り球体に触れるエレナ。すると、フィールド達が前に触れた時と同じように波紋が広がり球体の色が変わっていった。その様子にペラトは口をあんぐりと開け、サクヤは黙って事の様子を見ていた。やがて球体が青みがかかった緑色に完全に色づいた時、足型文字が浮かび上がった。

「——汝の波動は優しいミントブルー。よってミント色スカーフを与える——か。」

サクヤが呟くように言うと球体から光が生み出される。そして、光はエレナに向かってゆっくりと向かい、彼女の目の前に止まった後、スカーフへと姿を変えた。エレナはふわりと落ちていくスカーフを慌てて掴んだ。

「なるほど……スカーフを生み出すのは本当みたいだね。」

サクヤの声に4匹は彼を見た。その表情はいつものにこやかな表情かおに戻っていた。

「さっき言った事…覚えてますよね？」

「うん」キミ達はちゃんと証明してくれたからね…ボクが知っている事を教えてあげるよ。キミ達にあげた球体…それは時空のオーブと呼ばれてるんだ。」

「「「時空のオーブ???」」」

サクヤ以外の全員の声が重なる。

「そう。実はボクも名前と”選ばれし者”に力を…つまり波動のスカーフを与える事しか知らないんだ。ごめんね？」

表情は崩さぬまま残念そうに言うサクヤ。しかしこれ以上は訊いてもムダ、と顔に書いてあるようにフィルドは見えた。

「（名前だけ分かっただけでも収穫にはなったかな…）いいえ、むしろ教えてくれてありがとうございます！」

その事を悟ったフィルドはとりあえず礼を述べる。

「どういたしまして」それじゃ、選抜メンバーに選ばれるように頑張ってるね？」

「あ、はい！頑張ります！！」

キュベレーが元気よく答え、『サンライズ』はサクヤの部屋を後にした。そして、彼らの後を付いていくようにペラトも失礼しました、と言って部屋を出ていった。やがて静寂がサクヤの部屋を包み

込む。

サクヤは絨毯の上に置かれた1枚の紙を手にとる。それは足型文字で“『サンライズ』メンバー表”と書かれていており、フィルド達の名前が書かれていた。これは通常、ギルドの親方の手書きで書かれるのである。（ちなみにサクヤの字はかなり汚いらしい）しかし、彼らの名前は手書きではなく、パソコンで打ったようにきれいな字になっていたのである。

「……まさか……あのオーブが役割を果たすとはね……これ以上はあれもお役ご免かな……」

サクヤは呟くように言う。そんな彼の言葉を聞いた者は誰もいなかった。

一方のフィルド達は部屋に戻って、今回の探検を振り返っていた。

「まさか…親方様が先に行ってたなんてね……がっかりだなあ……でも、探検をしてすごく楽しかったなあ……こんなに楽しめたのは久しぶりだよ!!」

キュベレーが嬉しそうに言う。

「キュベレーは小さい時に探検した事があるって言ってたな。」

「そうだよ。」

フィールドが思い出したように言う。キュベレーは頷いた。エレナもへえ、と言う。その彼女の手には先ほどのスカーフが握られていた。

「それに…あのハイパーボイスを間近で聞かなかった事だけでも助かったよな。」

「それにしてもフィールドは耳がいいよね。私の悲鳴を聞きつけて助けに来てくれるし、急に耳を塞げって言った後にあのハイパーボイスが飛んできたし…」

エレナは夕方の出来事を思い出し少し苦い表情をする。

「まあ、ハイパーボイスが来るって分かったのは親方様が技を出す前に大きく息を吸うからなんだ。それがたまたま聞こえたから来るなって思ったわけ。そしたら案の定だったんだ。」

フィールドは詳しく説明をする。

「あ、思い出した事があるんだけど……夕方の続き話してくれない？」

「ん？……ああ、眩暈の事か。あれは……そうだな。俺達が初めて出会った時から話した方がいいかもなあ……」

「そうだね。」

フィルドとキュベレーは頷くと今までの経緯を話始める。海岸で2匹が出会った事、フィルドが元人間で記憶喪失の事、キュベレーの宝物と一緒に取り返した事、その宝物の謎を解くためにギルドに入門した事、そして眩暈のきっかけになったお尋ね者退治——などを話した。エレナは相槌を打ったり、頷きながら聞いていた。

「へえ。そんな事があったのね。」

「ちなみにエレナが洞窟にいた事や親方様が既に行ってた事が分かったのも眩暈のおかげなんだ。…まあ、だいたいこんな感じかな。」

喋り疲れたのかベッドの上で大の字になるフィルド。

「それでフィルドは元人間ねえ……」

「そうなの。あ、その事でエレナにお願ひがあるんだけど……この事はエレナ以外まだ話してないんだ。だから……」

「内緒にしてほしい、って事ね？」

エレナが受け継いで言った言葉にキュベレーは静かに頷いた。

「分かった。私達だけの秘密ね…約束するわ！」

「エレナ…！ありがとう！！」

「ありがとう、エレナ。」

エレナの答えにキュベレーはパツと表情が明るくなる。フィルドも安堵の表情を浮かべながら、礼を言った。

「あ、フィルド！私ね、気付いた事があるんだ！」

「気付いた事？」

キュベレーが何かを思い出したかのように言う。フィルドは体を起

き上がらせながら言う。

「実は…フィールドの眩暈って必ず何かに触れた時に起きない？」

「…あ、そう言えば…!!」

キュベレーに指摘され、フィールドは今までの出来事を思い返して見た。初めて襲われた時はリイナにリングを渡した時だった。その後、リーパーとぶつかった時に2度目の眩暈が来た。今回の探検でも滝に触れた時や奥地の宝石を引いた時にも眩暈が来ていた。キュベレーの言う通り、眩暈は何かに触れた時に来たようであった。

「……それに…リイナがリーパーに脅されてるのが見えた……あれは未来に起こった出来事だったんだよな。」

「そして、今回の探検では私や親方様が洞窟に入って行つたのが見えた。つまり、過去が見えたって事ね。」

「そうなんだよ!!」フィールドは何かに触れた時に過去や未来を見れる力があるんだよ!!」

フィールドとエレナの結論を聞き、何度も頷くキュベレー。

「すごいよ!!」フィールドのその能力があれば探検に便利だよ!!」
「確かにそうね!」

キュベレーとエレナが喜ぶ中、フィールドは腕を解こうとはしない。

「…キュベレー、手を出して」
「うん。」

フィールドの言う通り前足を出すキュベレー。そして、フィールドは彼女の前足を手に取った。

「フイ、フィールド!？」

「ちょ……何やってるの!？」

「……………」

キュベレーは顔を赤く染め、エレナは驚いた様子でフィールドを見る。

「……………やっぱりな。」

「「えっ……?」」

「俺の能力、どうやら見たい時に見れるわけがないみたいだ。」

呆然とする2匹に説明をするフィールド。

「あ、それで私の足をいきなり掴んだんだね。」

「ああ……いきなりでごめんよ。」

納得するキュベレーにフィールドは謝る。

「謝る事ないって!」

対してキュベレーは笑顔で許した。

「まあ、俺の能力に頼らないで……俺達の力で遠征のメンバーに入れるように頑張ろうな!」

フィールドはキュベレーとエレナの前に右手を差し出す。それを見て察したキュベレーは自分の右前足を重ねた。エレナも続くように右手を重ねる。

「行くぞ……『サンライズ』！ファイトー！！」

「おおー！！」

「お……おおー！！」

そして、一番大きな弟子部屋から元気な声が響き渡った。

13 探検の報告にて 完

#13 探検の報告にて（後書き）

久々のサンライズメンバー紹介コーナー！！

フィルド「8話ぶりだよな？」

はい！今回は仲間フラグを散々撒き散らしたエレナの紹介dぐわああああ！？……↑（ただの蹴りでフメートルくらい吹き飛ばされる）

エレナ「撒き散らしたのは作者でしようが！！」

名前：エレナ

種族：ツタージャ

年齢：12才

性別：♀

性格：勇敢、冷静

一人称：私

スカーフの色（波動の色）：ミント色（優しいミントブルー）

説明：『滝壺の洞窟』で探検していて敵にやらせそうになっていたところをフィルド達に助けられ仲間になる。冷静な性格らしいが明るい性格が強く出ているため、周りからはそう思われてない。また、未知の地を探検したり、有名な所を巡るのが趣味でかなりのダンジョンを踏破したらしい。腕の力はあまりないかわりに脚力や尻尾の力はかなり強い。また、仲間（特にキュベレー）をととても大事にしており、少しでも侮辱すると渾身のとびげりを放ったり、尻尾でフルボッコにする。料理が得意でスイーツ系統が得意分野。また、高所恐怖症である。（足が地面についていれば大丈夫らしい）

フィルド「エレナも仲間想いなんだな。」

エレナ「当たり前だよ！」

キュベレー「エレナ、これからはよろしくね♪」

エレナ「もちろん！こちらこそよろしく♪」

ふいゝやつと着いたあ…

フィルド「よく生きてたな…作者（絶対あの蹴りを食らいたくないな……）」

#14 見張り番（前書き）

今回はタイトルに合ってる部分は何故か後半の方になっています。

エレナ「それじゃ、第14話をどうぞ！」

#14 見張り番

エレナが『サンライズ』のメンバーに入ってから次の日の朝――

「くううー……あ、エレナおはよう！」

「あら、フィルド。おはよう。」

おもいつきり背伸びをしながらフィルドは既に起きていたエレナに声をかけた。よく見ると彼女の首には昨日は手で握っていたミント色のスカーフが巻かれていた。

「早速付けたんだな。」

「エレナ、似合ってるよ。」

いつの間にかキュベレーも起きていた。

「そう？ありがとうございます！」

「じゃあ、皆起きた事だし朝礼場所に行くか！」

「うん！」

「分かったわ！」

こうして、フィルド達はまだ日が半分しか登っていない頃に朝礼に行くためにドアを開ける。

「なんだこれ？」

突然フィルドが呆けた声を出しながら何かを拾う。キュベレーとエレナも彼の後ろから顔を覗かせた。それは紙切れでそこには足型文字で何かが書いてあった。だが――

「字が…汚くて読みづらいな……」

フィルドが頭を掻きながら呟く。そう、その字は殴り書きでもしたような汚い字が並んであったのだ。

「…とりあえずペラトに聞くか……」

フィルドの意見にキュベレーとエレナは頷くとロビーへと急いだ。

「えー昨日の夕食の時も言ったが、この度に『プクリンのギルド』に新しい弟子が入門したぞ!」

朝礼が始まりいつもの誓いの復唱が終わった後、ペラトに手招きされフィルドの隣にいたエレナが前に出る。

「はじめまして!この度、『サンライズ』のメンバーとなり弟子入りをしたツタージャのエレナです!よろしくお願いします!!」

元氣よく自己紹介をしたエレナに兄弟子達の暖かい拍手が迎えてくれた。(ちなみに昨日の夕食時も彼女を紹介したため、弟子達の自己紹介は省略されている。)

「さあ、新入りも入った事だし今日も張り切って仕事を頑張るよー
！！」

「「「おーっ！！！」」」

朝礼が終わり弟子達は自分の持ち場へと散っていった。

「おーい、お前達！！」

ペラトがフィルド達に近付いてきた。

「親方様が呼んでいるぞ！！」

「ああ、あと俺達の部屋の前にこんな手紙が置いてあったんだけど
……」

今朝フィルド達の弟子部屋の前に置いてあった紙切れを渡すフィルド。

「……………これは、確実に親方様の字だな……………」

紙切れを受け取りながら言うペラト。表情はやや呆れてるようにも見えた。そして紙切れを懐にしまうとノックをして親方様の部屋に入っていた。もちろん、フィルド達も彼の後についていくように入っていた。

「親方様！『サンライズ』のメンバーを連れて来ました……ってあ
りや、（珍しく体をこっちに向けてるよ……）」

「……………」
（ふう……………これなら突然振り向く動作もしなそうだな……………）

今回は珍しく体を正面に向けていたため、フィルド達は警戒心を解
いた。

「親方様！！……………親方様……………？」

ペラトが何度も呼びかけても反応がないサクヤ。それどころか彼は

「……………ぐう……………ぐうぐう……………」

目を開けたまま立って寝ていたのだ。

「まさか…朝礼以外でも立ち寝をしてたなんてなあ……………」

「…あれは完全に常人超えしてるわね……………」

「あ、あはは……………」

フィルドとエレナは呆れたように、キュベレーは苦笑いをしながら
サクヤを見た。

「お、起きてください！！親方様あ！！！」
「……………はっ。」

ペラトが耳元で大声を出したことによりようやく起きたサクヤ。

「『サンライズ』を連れて来ましたよ？」

「……………へ？なんで？？」

「『ええー……………』」

キヨトンとした表情でペラトとフィルド達を交互に見るサクヤ。これにはフィルド達も啞然とするしかなかった。ペラトは溜め息をつきながら部屋の入り口で受け取った紙切れをサクヤに手渡す。そして、それを読んだ途端――

「……………あー！！」

「うわっ！？」

「『ひゃあー！？』」

サクヤが突然声を上げたため、油断していたフィルド、キュベレー、エレナは驚いてしまう。

「そう言えばキミ達を呼んでたね」

にこやかに言うサクヤ。この時『サンライズ』は全員で本当に忘れてたのかよ！、と心の中で突っ込んだのは言うまでもなかった。

「それで…どうして俺達を呼んだのですか？」

「それはね、これからの『サンライズ』のメンバー登録についての話があるからなんだ。」

フィルドの質問に先ほどまでのにこやかな表情から少し引き締めて答えるサクヤ。

「キミ達は探検隊やメンバー登録が終わったならその後どうするか知ってる？」

サクヤの問いにフィルド達は首を振る。

「それじゃ、簡単に説明するね。キミ達が登録をしたら、ポケモン探検隊連盟に申請書を送らないといけないんだ。」

「ポケモン探検隊連盟？？」

「ギルドを総括している本部の事だよ。そこから各ギルドに依頼書が届くんだ。ただし、その場所はギルドの親方様か一流の探検隊しか知らないらしいがな。」

首を傾げるフィルドにペラトが簡潔に説明をする。

「それで申請書はギルドの親方が書く決まりがあるんだけど……」

「親方様の書く字は幾何学的で私にしか分からないから、特例として私が代わりに書いてるんだよ。」

（なるほど……確かにあんな汚い字だったら……誰も分からないよな）

サクヤの言葉を受け継いで説明するペラトにフィルドは心の中で納得をした。

「さて説明はここまでにして……今回はキミ達に聞きたい事があって呼んだんだ。キミ達って昨日エレナをメンバーに入れる時にペラトを通じてボクに言ってたよね？」

「はい。」

サクヤの問いにフィルドが代表して答える。

「その事なんだけど……次からはボクの部屋まで来なくても大丈夫だよ」

「「えっ!?!」」

突然の発言にフィルド達は驚きの声を上げた。

「だってキミ達が来なくてもボクが”ハイパーボイス”を使えば…

…「いや、本当は使わなくてもいいくらいなんだよね…」

「親方様?」

途中から消え入りそうな声になるサクヤ。キュベレーは心配そうに彼の^{けしき}気色を伺う。

「ん?心配してくれてるの?ボクは大丈夫だよ」仲間になりたいなら今まで通りペラトに言うだけでOKだから」

いつの間にかサクヤはいつもの表情に戻っていた。

「そうですか……。じゃあ私達はこの辺で失礼しますね。」

「うん!昨日も言ったけど選抜メンバーに選ばれるように頑張ってるね!」

キュベレーは後ろ髪を引かれながら、サクヤの部屋を後にする。エレナも彼女を追っていく。そして、フィルドも部屋を出ようとした時、彼は立ち止まり振り返った。

「サクヤ親方は”ハイパーボイス”を日常に使う事に悩んでいたようです。でも、俺は…いや俺達はサクヤ親方の技を迷惑とか思っ

た事はないですよ？これからその響きあるサクヤ親方の”ハイパーボイス”を出してくださいね。」

最後に失礼しました！、と言って部屋を出ていったフィルド。一方のサクヤは終始驚いた様子でフィルドの話を聞いていた。

「……こんなに嬉しい気持ちになったのは久しぶりだなあ。」

サクヤの表情はいつも以上に笑顔だった。その様子を見ていたペラトも、また嬉しさを噛み締めていた。

サクヤの部屋を後にしたフィルドは近くで待っていたキュベレーとエレナに近づいた。

「親方様は大丈夫なの？」

「ああ、どうやら”ハイパーボイス”を使い続けていいかどうか悩んでたみたいけど……きっと大丈夫だよ。俺も伝える事は言っただけ。」

「そっか。じゃあ、親方様の方は大丈夫みたいね。」

フィルドの報告を聞き安堵の表情を浮かべるキュベレー。エレナはそんな彼女の頭を撫でた。

「もう……子供扱いしないでよっ／＼」

「別にいいじゃない！」

「まあまあ、それより仕事を探そ——」

「あの『サンライズ』の皆さん？」

フィールドが最後までいい終えていない内にいつの間にかティラスが会話に割って入ってきた。

「どうかしたの？」

「実は頼みたい事があってついてきてもらえないでしょうか？」

ギルドの兄弟子からの頼みを断ろうとはしないフィールド達は快諾をし、ティラスの後についていった。少し進むと穴が空いており、そこにはゴルダがいた。

「あ、ゴルダさん。」

「おお、忙しいのにすまないな。」

フィールド達を一瞥して話し掛けるゴルダ。喋る音量がかなり減ったらしく、うるささが減ったようであった。

「そんな事ないですよ？ところで手伝いつて何をすればいいんですか？」

「実は見張り番をやってもらいたいです。」

フィールドの質問に申し訳なさそうに答えるティラス。

「あれ？ティラスさんも一緒にやらないんですか？」

「実は僕の父さんが仕事をほったらかしにしてどこかに行っちゃったみたいで……」

「それであなたがお父さんの仕事をやる羽目になったって事ね。」

エレナが受け継ぐように言うのとティラスは小さく頷いた。ティラスの父——クリオは主に掲示板の依頼書の更新をするのだが、放浪癖があるらしく突然行方を眩ます事があるらしい。そのため、ティラスはクリオがいない時は彼の仕事を請け負っていると言うわけだ。

「なるほど……事情は分かりました。とりあえず仕事に行ってください。」

「すみません……では、お言葉に甘えさせてもらいますね。」

フィールド達に頭を下げると地面に潜っていった。

「それで……見張り番は何をすればいいんですか？」

「そこに穴があるだろ？そこに入って進めば上から光が射し込んでる場所があるから、そこまで進んでくれ。やり方はギルドにやつてくるポケモンの足型を見て俺に伝えてくれ。」

「了解です。」

エレナの質問にゴルダは簡潔に説明をする。そして、フィールド達は穴に入るうとするが――

「暗そうだね……この中を進んで行くの？」

「……みたいね。」

キュベレーとエレナは渋い顔をして穴を見つめる。

「ランタンみたいなものはないんですか……？」

「ん？まあ……あるが、そんなのがなくても行けるだろ？」

フィールドはゴルダに訊くが素っ気なく返されてしまう。

「（あるって分かったし……）ゴルダ先輩？そこは……頼みますよ」
「だから、なくても平——」

と言い掛け、固まってしまう。一方のフィールドは声を明るくして笑顔で質問をする。しかし、目は笑ってはおらず何故か手には”波動弾”を形成していた。フィールドはゴルダに脅しをかけていたのだ。

「は……はいいい！わかりましたああああ！！！」

一度コテンパにされたゴルダにその効果は絶大で彼は猛ダッシュでランタンを取りに行った。

「本当にどうしようね、フィールド……ってあれ、ゴルダさんは？」

どうするかフィールドに訊こうとしたキュベレーはゴルダがいない事に気付いた。

「ああ、ゴルダ先輩なら……」
「も、持ってきたぞ！！！」

フィールドが理由を話そうとした時、ゴルダが走って戻ってきた。そして、右手にはランタンを持っていた。

「これなら穴の中に入れるわね。」
「そうだな。ゴルダ先輩、ありがとうございます！！」「ぜえ……ぜえ

……とにかく光が射し込んでる場所についたら大声で……言ってくれよな……」

肩で息をしているゴルダからランタンを受け取ったフィールド達は穴の中に入っていた。

穴の中は日射しが照りつけていない分、ひんやりとしていた。当然、穴の中は暗いため借りたランタンの光を頼りに進んでいた。

「まだつかないのかな？」

「うーん……お、あれがそうじゃないのか？」

ランタンを持っていた手で奥を指すフィールド。彼が言った通り、奥には光が射し込んでおり、格子模様の影が出来ていた。

「ゴルダさーん、着きましたよー！」

エレナは大きく息を吸って大声で話す。

「そうかー、んじゃ格子の上に立ったポケモンの足型を大声で伝えてくれー！」

光の真下に入ったフィールド達はゴルダから次の指示をもらう。

「あ、来た!!」

上を既に向いていたキュベレーはポケモンが格子に乗ったのを確認する。

「足型はヨーテリー!! 足型はヨーテリー!!」

キュベレーはすぐに大きい声で伝えた。その後よし、正解だ!!、と言うゴルダの声が聞こえた。

「そうだ! キュベレー、足型が分かったら俺達に教えてくれないか?」

「私達が代わりに伝えておくから。あ、疲れたら言ってね?」

「うん! 分かったよ!!」

こうしてフィールド達は各々の役割を決め、見張り番を続ける。ちなみにキュベレーが疲れた時はエレナが代わりに足型を判別をしていたため、フィールドがほとんど大声で伝える役をやっていた。

「来客終了、来客終了」

「おーい、お前達ー！！戻ってきていーぞー！！」

見張り穴に射し込む光がオレンジ色を帯びてきた頃、ペラトの声が聞こえてきた。

「ふう〜終わったね……」「首が痛いわね……」

「おぜばのどがいだよ……（俺は喉が痛いよ……）」

などと話ながらフィルド達は穴の中を進んでいった。ちなみに戻った後、フィルドは速攻でうがいをして水を飲んだ事は言うまでもない。

「お前達、よくやったな♪」

戻ってきてしばらく立った後、ペラトがやってきて称賛の声をかけてきた。

「結果だが……見事パーフェクトだ♪初挑戦で素晴らしいぞ♪」

「「やった〜！！」」

結果を聞き、キュベレーとエレナは互いの手（と前足）でハイタッチをする。

「報酬もスペシャルバージョンだよ」

ペラトはフィールド達に500ポケ、幸せの種、生命いのちの種、カテキンを手渡した。

「こんなにくれていいんですか!？」

「お前達は頑張ったからな。それに見合った報酬を与えたまでだよ」

「「ありがとうございます!!!」」

フィールド達はペラトに礼を述べた。

「そうだ。忘れるところだったがエレナ、お前に会いたいと言ってたポケモンがいたぞ。」

「えっ……私に……ですか……?」

疑問を浮かべた表情をするエレナ。

「どんな種類のポケモンでした?」

「うーん……たしか鳥ポケモンだったかな。ギルドへは最後の来客として来てたし……」

フィールドの質問にペラトは考えながら答える。

「確か最後のポケモンの足型は……!!!まさか……!!!」

エレナは思い立ったように地下1階へと上がって行った。

「お、おい!エレナ!？」

「フィールド、私達も追いかけよう!」
「ああ!」

フィールド達もエレナの後を追いつけるように地下1階へと急いだ。

#14 見張り番 完

#14 見張り番（後書き）

フィールド「なんで中途半端で切ったんだ？理由を述べて。」

えーと……長くなってしまったので途中で切りました！以上！！

フィールド「単純な理由だな……。」

#15 新たな出会いと静かに動き出す運命の歯車（前書き）

果たして、エレナを待つ客人とは一体……

フィルド「いいから始めろよ……」

分かってるって。では第15話を……

???「どうぞ!」

フィルド「誰!？」

#15 新たな出会いと静かに動き出す運命の齒車

エレナを追って地下1階に辿り着いたフィールドでキュベレー。そこにはエレナと1匹のポケモン——体が青灰色で首から頭まで白い羽毛で覆われている雛鷲のようなポケモン——ワシボンの後ろ姿があった。

フィールド達の気配を感じたのか、ワシボンは後ろを振り返った。その額には1本の飾り羽が生えており、首には雫のような形をした水晶のネックレスがかけられていた。

「…エレナ……！やっぱりここにいたんだ……！！」

ワシボンはエレナを見た瞬間、喜びの表情に変わった。一方のエレナは喜びと驚きを含んだ複雑な表情をする。

「どうしてここに……？」

「ん、偶然ここに来たら君がこのギルドで弟子入りしてるって聞いたからさ、来たんだ。それにここに来たのはもう1つ理由があるんだよ。」

未だに驚いてるエレナにいきさつを話すワシボン。

「あの……2匹は知り合いなんですか？」

「幼なじみよ。」

「オレの名前はシンラって言います！」

会話の途中で割って入ったフィールドに答えるエレナ。そしてワシボン——シンラは名前を教える。

「ところでシンラ君はここに来たもう1つの理由って？」
「おお、忘れるところだったよ。」

キュベレーに理由を問われるとシンラはフィルドの前に立ち頭を下げた。

「…オレを仲間に入れさせてください！！」
「「「えっ！？」「」」

突然の頼みに驚きの声を上げるフィルド達。

「でも、村長さん達には言ったの？確か、あなたは村から出た事がなかったんじゃない……」

「大丈夫さ。ようやく認めてくれたし……それに『プクリンのギルド』に弟子入りして探検隊になる事が夢だったから……なのでお願いします！！」

再び頭を下げるシンラ。フィルドもしばらくうーん、と考えた後――

「分かった。入ってもいいよ……と言っても許可するのはサクヤ親方だからなあ……とりあえずついてきて？」

「は、はい！！」

フィルドはシンラを手招きして地下2階へと向かった。

互いに軽い自己紹介をした後、彼らは地下1階をあとにした。

「おや、お前達。どうだったんだ？」

フィールド達が地下2階に戻るとペラトが待っていた。

「ちょうど良かった！実は――」

「オレを弟子入りさせてください！！」

フィールドが説明しようとした時、シンラはペラトとフィールドの間に
入り頭を下げた。

「そ…そうか♪じゃあ、親方様に報告して行くから待ってなさい。」

ペラトは一瞬面食らったような表情をしたが、すぐに表情を戻すと
サクヤの部屋へと入っていった。――その足取りがやけに重そうに
見えたのはまた別の話。

「皆、耳を塞げよ？」

フィールドが言うのを合図にキュベレーとエレナは耳を塞いだ。シン
ラも2匹を真似するように耳を塞ぐ。

そして、『サンライズ』のメンバー全員が耳を塞いでからまもなく
して――

「たああああ――！！！」

とサクヤの”ハイパーボイス”とそれに混じって部屋の中からペラトの断末魔が聞こえた。

「うひゃゝこれが噂の”ハイパーボイス”かぁゝ」

耳を塞いでたシンラは”ハイパーボイス”のすざましさにやや感嘆まじりの声を上げる。

「へえゝ。それなら…今度は耳を塞がないで聴いてみるか？」

「そつ、それは遠慮しとくよ!!」

そんな彼をフィールドはからかう。

しばらくするとサクヤの部屋からボロボロになったペラトが出てきた。

「どうでした？」

「とりあえずシンラ……だっけ？…お前さんは『サンライズ』のメンバーに入るように弟子入り登録しといたからな……明日から働いてくれ……」

「あ、ありがとうございます!!」

ペラトは弱々しく報告をすると食堂へと歩いていった。

「良かったわね！ようやく弟子入り出来て。」

「ああ！！」

エレナに満面の笑みを送るシンラ。

「入ったからには途中で放棄するような事はしないでくれよ？ああ、それとこれからは敬語は使わなくてもいいからな。」

「はい！…じゃなくて、分かった！！」

「自己紹介がまだだったね。私はキュベレー、そして彼がリーダーの……」

「フィールドだ。ようこそ、探検隊『サンライズ』へ！！」

「キュベレーにフィールド……うん！これからよろしくな！！」

フィールドとキュベレーは笑顔でシンラを歓迎した。

「自己紹介も終わったし夕食を食べに行きましょう？」

「ああ、そうだな。」

「うん！」

「りょーかい！」

エレナの合図にフィールド、キュベレー、シンラの順に声を上げ、4匹は食堂に向かっていった。

そして、夕食ではシンラが自己紹介をし彼はエレナ同様兄弟子達の暖かい拍手で迎えられたのだった。

「ゴロゴロ……」

「うわぁ…雷が鳴ってるよ……」

フィールド達が部屋に戻った時には既に大雨が降ってきて、先ほどのように時折雷が光っていた。ちなみに呟いたのはキュベレーである。

「今夜は大嵐になりそうね……」

窓から外を見ていたエレナも呟く。そして、新入りのシンラはと言うと旅の疲れがあったのか早々と寝ていた。本人曰く、トレジャータウンに向かうために朝から村を出てきたとか。

「そう言えばフィールドと出会う前日もこんな天気だったんだよね……」

ふと、思い出したように呟くキュベレー。そして、シンラをチラッと見て――

「まだシンラ君には言っていないからあんまり大きい声では言えないけど……この天気を見て何か思い出せそう？」

「うーん……」

少し声を潜めて言うキュベレー。なぜなら、シンラにはフィールドが

記憶喪失で元人間である事は内緒にしているからである。

フィールドは窓辺に立ち時々稲光が走る黒い空を見ながら思い出そうとする。

「……………ダメだ。全然思い出せない。」

「そつかあ。でも、少しずつでもいいからね?」

「焦って思い出そうしても精神が疲れちゃうからね。ゆっくりでいいのよ。」

少し残念そうな顔をするフィールドにキュベレーとエレナは優しく声をかけた。

「2匹とも……………ありがとう。」

「……………どういたしまして……………」

「そうだ!前から気になってることがあったんだけど……………前に時がおかしくなっている影響で悪いポケモンが増えているって言ったよな?あれってどういう事なんだ?」

2匹に礼を言った後、思い出したように質問を投げ掛けるフィールド。

「あ、まだ話してなかったね。フィールドがさっき言ってた通り、少しずつだけど……………確実に時がおかしくなっている……………いや、狂い始めているのが近いかな。」

「そうね。最近その原因が時の歯車が影響されているんじゃないかって皆して言ってるの。」

「時の歯車??それって……………」

フィールドが時の歯車について訊こうとした時……………

「……………ピシァーン!……………」

「うわあっ!?!」

「「きゃあっ!?!」」

「のわああ!?!」

今までより大きな雷の音が鳴り響き、フィールド達は驚いてしまった。そして、あまりにも大きな音にギルドが少しだけ揺れる。またそれによりシンラが飛び起きた。

「あら、熟睡してるシンラが飛び起きるなんて珍しいわね。」

「だって今の音、凄かっただろ!?!おかげで目が冴えちまったよ…

…」

背伸びをしながら言うシンラ。

「ところでエレナ達はまだ寝てなかったのか?」

「ああ、なかなか寝れなくてな。」

「ふーん…。」

「あの…そろそろ話を戻していいかな?」

キュベレーが口を開く。

「なんの話をしてたんだ?」

「時が狂い始めた訳の話を聞いてたんだ。シンラも聞くか?」

フィールドの問いにシンラは首を何度も頷かせる。

「それで——時の歯車って?」

「うーんと……誰も見たことがないらしいから形は分からないけど……ただね、小さい時に聞いた事があるの。」

エレナは1つ間を置き――

「時の歯車は地域の時間を守っているみたい。それと世界のあちこちに隠されてるの。……例えば深い森の中、鍾乳洞や湖、火山の中――私達が普段立ち寄らない場所に安置されているみたいなの。」

エレナはフィールドとキュベレー、そしてシンラに分かりやすいように説明する。そんな中、シンラが右翼を上げた。

「しつもん！もし、時の歯車を盗ったらどうなるんだ？」

「たぶんだけど……その地域の時間が止まっちゃうと思うわ。……だから誰も時の歯車を盗りたがろうとは思わないのよ。例え悪事を働かせるポケモンまでもね。」

「なるほど……説明してくれてありがとな。」

フィールドがお礼を言った後やや重い空気が弟子部屋を包み込んでしまふ。そんな中――

「フィールド達はなんでスカーフしてるんだ？なあ、オレの分はないのか？？」

シンラが口を開いた。その内容は彼から見ればフィールド達がスカーフを巻いているのに自分にはないのは不公平だ、と言うものにも聞こえる。

「ドタバタしてたから気付かなかったよ。ちょっと待ってて。」

フィールドはトレジャーバッグから時空のオーブを取り出し、シンラに差し出す。

「触ってくれないか？」

「お、おう。」

フィルドに言われ時空のオーブに触れるシンラ。すると、触れた所から波紋が広がりオレンジ色を帯びていった。やがて完全に色づいた時、足型文字が浮かび上がった。そこには――“ 汝の波動の色はパワフルなオレンジ。よってオレンジスカーフを与える ” と書かれていた。やがて、時空のオーブから光が生まれシンラの頭上まで近づいてきた。そして、光はオレンジ色のスカーフに姿を変えるとシンラの頭の上に落ちた。

「エレナ！ スカーフ着けてくれ！」

「ふう……しょうがないわね……」

顔にかかったスカーフの端を上げながらエレナに頼むシンラ。頼まれた彼女も嫌な顔をせずにスカーフを取るとシンラの額に――飾り羽の後ろに巻いてあげた。

「そうだ！これから、仲間が増えた時には時空のオーブに触れさせてあげようよ――！」

キュベレーが思いついたように言っただけでフィルド達に同意の眼差しをする。フィルド達はもちろん頷いた。すると――

「入りますわよ――！」

「は、はい。どうぞ。」

突然の来客にフィルドは慌てて時空のオーブをトレジャーバッグの中にしまい込んだ。それとほぼ同時にドアが開けられ、サンシャとフウが入ってきた。

「こんな夜中にどうしたんですか？」

「実はリードさんが怪談話をしてくれるみたいで……だからあなた達を誘いに来たんですよ！！」

エレナの質問にやや興奮気味に答えるフウ。

「わ、私は遠慮します……」

「大丈夫！皆で一緒に聞けば怖くないですわ！！」

後退りしながら言うキュベレーをサンシャは彼女の前足を掴むと強引に連れ出して行った。

「それでは先に待ってますので是非来てくださいね！」

“是非”を強調して言ったフウも部屋を出ていった。

「これは行くしかないわね……」

「怪談話かぁ〜楽しみだなぁ〜！！」

エレナはやや呆れながら、シンラは嬉しいそうに部屋を出ていった。フィルドも部屋を出ようとした時には窓が目に入った。先ほどの大嵐はいつの間にか過ぎていったようで、外は静けさに包まれていた。

（何だろう……胸騒ぎがする……）

フィルドは不気味なほどの静けさに胸騒ぎを覚えたが気のせいだ、と自分に言い聞かせエレナ達の後を追った。そして、怪談話が行われたビート、リード、ゴルダの部屋からキュベレーの悲鳴がこだましたのは言うまでもなかった。また、彼女はこの日以来怪談話が大

嫌いになったそうだ。

時はフィールド達が時の歯車の話をしている時に遡る。

くキザキの森く

トレジャータウンからかなり東に位置する『キザキの森』。時刻は夜で大嵐が来ていたため、辺りはかなり暗かった。そこへ1匹のポケモンが現れた。

「ここが目的地か……」

ポケモンは呟くと鬱蒼と茂った森の中へと入っていった。途中で立ちふさがった野生のポケモン達を次々と尻ぎ払いながら進んでいく

ポケモン。そして――

くキザキの森 奥地く

森の奥地に着いたポケモンは辺りを警戒しながら、ゆっくりと進んでいった。やがて、ポケモンの目の前にちいさな水辺に浮かぶ青緑に輝く不思議な模様に包まれた青い歯車のようなものが目に入った。

「……初めて見たが……これが時の歯車か……」

その光景に魅入りそうになりながらもポケモンは歯車に手を伸ばさうとする。その時――

「待ちなさい。」

「……!?!?」

突然後ろから声が聞こえたため、ポケモンは振り向く。暗くてどんな姿をしているか分からなかったものの、体格はポケモンより遥かに大きいようだ。

「あなたは何故”それ”を狙おうとしているのですか?」

”それ”とはポケモンの後ろに浮かんでいる時の歯車の事である。
言葉遣いは丁寧だが、独特なエコーが含まれているため、威厳を持
っているようにも聞こえた。

「……何故貴様が俺の狙いを知ってるかは知らんが……邪魔をする
なら容赦はしない……!!」

一瞬だけ目を見開いたがすぐに腕についていた葉を鋭い刃に変化さ
せる。そして——雷が光ったのと同時にものすごい速さで近づいて
攻撃するとした。だが——

「……!いないだと……」

「よそ見をしてる場合ですか?」

不意に声が聞こえた瞬間——シュツと風を切る音と共にポケモンは
吹き飛ばされてしまった。

「かはっ!?!」

木の幹に打ちつけられて苦しむポケモン。しかし、目は決して諦め
ていなくてむしろ、闘志の色を含んだ鋭い眼光で未知の相手を睨ん
だ。また、攻撃を仕掛けた相手もその様子を見下ろすように見てい
た。互いに睨み続ける間にいつの間にか雨や風が弱まり始めていた。

そして——

「なるほど……」それ”を狙う訳が分かりました……いいでしょう。

「な……何……?」

攻撃を仕掛けたポケモンは戦闘体勢を解く。

「あなたからは強い意思を感じます。…私は強い意思を持った者に従うまでです……。」

そっぴうと暗闇から緑色の足が現れる。

「さあ……私と契りを結んでください。あなたの…願いのために…」

「…!!…そうか……それならいいだろう。」

倒れてたポケモンは目を一瞬だけ丸くしたものの、自分の手を伸ばし、緑色の足を握る。すると、緑色の足は一瞬にして消えた。

「なっ……!!?」

呆氣にとられていると目の前から緑色の光が現れ、彼を包み込む。やがて光は何事もなかったかのようにすつつと消えていった。

「……力がみなぎる……」

両手を見て呟く。その右手には翡翠色に輝くミサンガがついていた。そして、再び時の歯車がある水辺へと足を運んだ。

「まずは……1つ目!!」

今度は誰にも邪魔をされずに歯車を盗る事が出来た。すると不思議な模様はパツと消えてしまった。

「……全ては未来のために……許せ。」

齒車を肩から下げていた麻の袋にいれ、水辺を一瞥するとその場から素早く立ち去っていった。そして、齒車を取ったポケモンと嵐が去った後の『キザキの森』は――

不気味なほどに静まり返っていた。葉っぱから滴る雫が制止し、青々とした木々が灰色に染まっていた。やがて陽が昇り朝が訪れても森のポケモン達――いや、森全体そのものの生気が感じられなくなっていた。そう、『キザキの森』の時間が――

――止まってしまったのだ。

15 新たな出逢いと静かに動き出す運命の齒車 完

#15 新たな出会いと静かに動き出す運命の歯車（後書き）

サンライズメンバー紹介コーナー！！

第4回目は前書きにフライングしたシンラです！！

シンラ「だって待ちきれん」（強制終了）

名前：シンラ

種族：ワシボン

年齢：11才

性別：♂

性格：わんぱく、明るい

一人称：オレ

スカーフの色（波動の色）：オレンジ（パワフルなオレンジ）

説明：エレナの幼なじみ。エレナに負けなくらい明るい性格で、

『サンライズ』のムードメーカー。まだ、11才で子供っぽいところがあり、まれに思った事をストレートに言ってしまうのが玉に瑕。探検隊（特にサクヤ）に憧れておりそのため故郷からはるばるトレジャータウンにある『ブクリンのギルド』に1匹でやってきた。また、村からあまり出た事がなかったためか世間に疎いところがある。仲間や皆という時間が大好き。首には水晶のネックレスがかけられている。

フィールド「なるほど…だから話を聞いている時も首を傾げてたんだな。」

シンラ「だって、誰も話してくれなかったんだもん！！」

まあまあ……でも、賑やかになりそうだね

シンラ「そういう事でよろしく願いします!」

#16 君は弱くなんかない!!（前書き）

新章突入!!

前半と後半で視点が全く違います。

そして……まさかの9ページ突破……絶対切るところあったaro! と思いました。

シンラ「早くはじめるよおー」

わかつちよる!では第16話をどうぞ!!

#16 君は弱くなんかない!!

く????

ここはとある場所。普通に暮らしてるポケモンは絶対知れない場所である。辺りは真っ暗で静けさが広がっていた。その中に7つの陣―それぞれ、赤、黄、透明、銀、灰色、若草色そして青の7色が円を描くように配置されていた。そのうちの数ヶ所には何かが乗っているのか影が重なっている。しかし、陣の光は弱々しくそれらの足元を少し照らすのが精一杯のようだった。そこへ、1つの足跡が遠くの方から聞こえてきた。

「…来たか…何をしていた？」

灰色の陣に鎮座してた何か―ポケモンが問う。その口調は少しばかり苛立ちが入っていた。

「移動に時間をかけた。すまない。」

対する足跡の主は特に動揺する事なく理由を述べ、空いていた銀色の陣の上に座る。

“これで全員揃ったな……”

何処からか声がしたと同時にポケモン達の中央に1つの光が舞い降りて来た。どうやら先ほどの声の主はこの光から発せられたようである。そして、陣に座っていたポケモン達は敬意を払うようにうつむき跪いた。

「しかし…まだ全員揃っていないのでは……」

まもなくして灰色の陣にいたポケモンがやや頭を上げて言う。

“あの2匹は前から行方を眩ましているであろう？それよりも最優先にする事がある……故に汝らをこの場に呼んだのは……”

感情を含めない物言いで異義を退ける。そして、一呼吸置いて――

“――『キザキの森』の時間が止まったからなのだ……”

「「「……！！」」」

跪ひざまちいてたポケモン達が一斉に顔を上げる。その表情は暗くて分からなかったが、驚いているのは確かのようにだ。

「……まさか、”あれ”を盗る者が現れたのか!？」

“…その通りだ……故に『キザキの森』、そして周辺地域の時間が少しずつではあるが、止まり始めている……”

黄色の陣にいるポケモンが言った事に肯定する光。それと同時に騒ついてきた。

「……なら、こうしてはいられぬな。」

銀色の陣にいたポケモンが口を開くと騒めきは収まった。

「だな。それじゃ急いで盗んだ犯人を特定しなくては……」

“――いや、我らが直接関与する必要はない”

透明の陣に居据わるポケモンが考えようとした時、光が口止めをする。

「なっ…何故です!？」

憤りを表すかのように灰色の陣のポケモンが立ち上がる。

“我々は歴史の裏に君臨する者…そして、監視者―決してその姿を光ある表に現してはなんのだ……”

光に反論され、立ち上がったポケモンはうつ、と詰まらせながら跪ひざまずく。

“―それでも汝らが関与すると願うなら…宿り主を探すが良い…
…彼女や行方を眩ました2匹のようにな……”

光はそう言い残すと上へと舞い上がっていった。

「……あの方があそこまで言うなんて……昔より丸くなったな。まあ、とりあえず言うとおりに探しに行きますかね。」

透明の陣にいたポケモンが立ち上がると何処かへと行ってしまふ。

「……なるほど、あの2匹はともかく命令には従うあやつが来ないとは……宿り主でも見つかったのかもしれないな……」

やがて、黄色の陣にいたポケモンも一瞬のうちに姿を消した。そして、銀色と灰色の陣にいるポケモン達を取り残される。

「…ようやく俺の考えも通じたのかもな……」

「……さて、汝はどうするつもりか？」

「決まってる……時の齒車を取り返す！……それだけだ……！！」

銀色の陣にいたポケモンの問いに力強く答えると、彼は静かにこの場所を去っていった。

「さて……我はあの場所にゆくでしょう……」

そして、銀色の陣にいたポケモンも静かに去っていった。

「……フィールドよ……我は待っているぞ……」

そう言い残して――

くプリンのギルドく

一方『サンライズ』は新たな仲間、シンラを迎え掲示板の依頼をこなしたり、見張り番の仕事を着実にこなしていた。そのかいがあつて探検隊ランクがシルバーランクへと上がっていた。そして数日経ったある日の朝――

ドン、ドンとリズムよくドアを叩く音が聞こえた。時刻はこれから早朝を迎えようとしている時間帯であろうか、外はうつすらと明るみはじめている。

「（こんな朝から誰なんだ……）はい……」

眠そうに目を擦りながら、ドアに歩いていく『サンライズ』のリーダー——フィルド。そして、ドアを開けた瞬間、彼の眠気が一気に飛ぶこととなった。

「サ……サクヤ親方！！？」

「シーツー！！」

ドアノックをしたポケモンはサクヤだったのだ。思わず大きな声で驚いたフィルドに彼は指を自らの口元に当て“静かに”とジェスチャーをした。

「やあ、おはようフィルド。」

「お、おはようございます……」

まだ寝ているキュベレー達を気遣ったのか声をやや抑えて挨拶をするサクヤ。

「ところで……新入り君は起きてる？」

“新入り君”とはもちろん最近入ったばかりのワシボン——シンラの事を指している。

「まだ……寝ていると思います。起こしましょうか？」

「そうだね。それじゃあ、お願いしようかな」

サクヤはフィルドの問いに無邪気に答える。フィルドはサクヤを一瞥するとシンラが寝ているベッドに近づいた。

「おい、シンラー？」

「……まっ……まだ……訊きたい事が……」

夢を見ているのか、うわごとを口にするシンラ。その表情は一瞬うなされているようにも見えた。

「シンラ起きろ！憧れのサクヤ親方様がきて——」

「マジで！！どこにいるんだ！！？」

サクヤの名前を言った途端ベッドから跳ね上がったシンラ。その時、彼の右翼がフィルドの顎にクリーンヒットした。

「うぐお……！？」

「あ……ごめん……！」

痛そうに顎を擦るフィルドにシンラは謝る。だがその瞬間――

「あだっ！？」

シンラにげんこつが襲い掛かった。無論、彼も痛そうに額を抑える。

「……次はないからな。」

「はい……すみませんでした……」

表情を少し顰^{しか}めながら言うフィールドにシンラは頭を下げる。

「どうやら起きたみたいだね」

先ほどの一部始終を黙って見ていたサクヤが口を開いた。

「お…おはよう………ごさいますう!」

「うん!おはよう」

声をつわずらせるシンラを気に留めず挨拶を返すサクヤ。

「ところで…シンラに話があるって……」

「そうだね………詳しくはボクの部屋で話すよ。」

そう言ってフィールドとシンラに背を向けて歩きだしたサクヤ。フィールド達も寝ているキュベレーとエレナを起こさないように慎重な足取りで部屋を後にした。

——場所は変わってサクヤの部屋。

「さてと………キミ達を呼んだ訳は………遠征の事なんだ。」

「遠征??」

「フィールド達から話を聞いてない?」

首を傾げたシンラにサクヤは質問をすると彼は頷いた。

「それじゃ、フィールドには確認の意味で話すけど……近々遠征を行おうと思うんだ。それで普通は新入りは候補に入れないけど『サンライズ』の皆は頑張ってるから遠征メンバーの候補に入れたんだよ」

「そ…そうだったのか！？なんで言ってくれなかったんだよ！！？」
「寝る前に話したんだけどな……」

サクヤの説明にシンラは驚きながらもフィールドを見た。そんな彼をフィールドはやや呆れ混じりに見る。

「…説明の途中で寝るのが悪いんだよ…」
「うっ……」

フィールドに言われてシンラは言葉を詰まらせてしまう。

「話を戻していいかな？」

サクヤの声にはっと我に返った2匹は彼に頷く。

「それで……新しく入ったシンラも出来ればフィールド達と一緒に候補に入りたいなあって思ってるんだ。」

「ほ……本当ですか！？」

「えっ……入ったばかりのオレが候補入り！？」

フィールド達は嬉しさが混じった声をあげる。

「あ…でもまだ入れるとは言ってないですよね？」

「うん。だからね、候補に入れるかどうか見定めるためにボクから

直接依頼を出すから」

「サ…サクヤ親方から直接依頼!？」

「え……ま……マジですかあ!!？」

サクヤの爆弾発言にフィルド達は今日で何度目か分からない驚きの声をあげた。

「詳しくは後で教えるから。依頼って言うてもいきなり難しいのは出さないから心配しなくても平気だから、今日はそれを伝えたくて呼んだんだ。…朝からごめんね?」

相変わらず笑顔を絶やさずに説明をするサクヤ。

「わかりました。キュベレー達にも後で伝えて置きます。失礼しました!」

「失礼しましたー!!」

フィルドとシンラが部屋を出ていくとすれ違うようにペラトが入ってきた。

「お…親方様あー!!…!! たっ………大変です!!」

「ん? どうしたの、ペラト?」

大慌てで入ってきたペラトに対してもサクヤは自分のペースを崩さずに声をかけた。

「そ……それが……とっ、とにかくこれを!!」

ペラトは右手（右翼）に持っていた紙をサクヤに手渡す。サクヤは受け取ると目を通し始めた。そして、ほんの一瞬だけだが彼の瞳が

揺らいだ。

「…ペラト、この事を朝礼で皆に伝えてもらえる？」

「か、かしこまりました！！」

先ほどとは打って変わり、声のトーンを少し低くして指示を出すサクヤに、ペラトは一瞬ビクツ、と体を震わせだが、指示を承諾すると部屋を重い足取りで後にした。そして、サクヤも続くように部屋を後にした。

時はほんの少し遡る。フィールド達がサクヤの部屋を出た時――

「あ、ペラト――」

「お前達！！ちょっとどいてくれ！！」

声をかけようとしたフィールドをもともせず、ペラトが低空飛行でフィールド達に突っ込んできた。

「うわぁつと！！？」

「ひゃあ！？」

以外にも速く来たため、フィールド達も慌てて道を開ける。そして、

フィルド達が避けたと同時に先ほどいた場所をペラトが通り抜けた。

「なんかあったのかな？」

「さあ？…あ、そうだ！シンラに聞きたい事があったんだ！」

「オレに聞きたい事？」

「ああ…さつき起こす時になんかうなされてるように見えたんだ。
…シンラ、なんの夢を見てたんだ？」

フィルドが思い出したようにシンラへ質問をする。

「……えーと……なんかわっかが付いた球体があって……そしたら、いきなりスカーフを与えるって言ってたな……」

そついいながら額に巻いてあるスカーフを自分で指すシンラ。

「そうか……（しかし……シンラまでも見てたんだな……オレ達の共通点は……夢であの球体に出会った事と波動のスカーフを巻いている事か……それと夢に出てくる球体……よく考えてみると時空のオーブとよく似てたな……関係があるのか……）」

「あのー……オレ、空気になりかけてるんだけど……」

腕を組みながら思考に没頭するフィルドにシンラの悲痛な声は残念な事に届いていなかった。

「おはよう！もう起きてたんだね。」

ふと、声が聞こえてきた。その方向——弟子部屋に続く廊下を見てみるとキュベレーとエレナが立っていた。

「ん……？おお！おはよう、キュベレーにエレナ。」

「おはようさん!!」

彼女達に気付いたフィールドとシンラも挨拶を返す。

「おはよう! 起きたら既になかったからビックリして慌てて出てきたところだたの。何かあったの?」

「親方様に呼び出しされてね、シンラが遠征メンバー候補させるために試験みたいなを出すって言ってたよ。」

キュベレーとエレナに説明をするフィールド。

「なるほど……とりあえず親方様が言いだすのを待つしかないね。シンラ君、一緒に頑張ろうね!!」

「もちろんさ!」

キュベレーとシンラがガッツポーズのように前足(翼)を直角に曲げた。その様子を微笑ましく見るフィールドとエレナ。やがて、ロビーに兄弟子が集まってきて、いつもの朝礼が始まるのだった。そして通常ならとづくに終わるはずだったが――

「えー、本日は皆に報告が2つある。」

ペラトがそう言ったため、全員がその場に残っていたのだ。

「まず1つ目は……『キザキの森』の時間が……止まってしまったよ
うだ。」

「……えっ……!!?」「」

ペラトがやや重たそうに言った内容にギルドのメンバー全員に驚愕の表情が走る。

「い……一体どうなってるんだよ!!」

「ゴルダさん!! 落ち着いて下さい!!」

「す……すまん……」

急に大声を出したゴルダをフウが宥める。

「それで……時間が止まった『キザキの森』は……どうなったんです
か?」

キュベレーがおそろおそろ質問をする。

「……時間が止まった『キザキの森』は……風も吹かず、葉について
いた水滴も落ちない。そして、森全体が灰色に包まれて、生氣その
ものが全く感じられないらしい……」

ペラトも俯きながら説明をする。

「本当にどうしたんでゲスかね……」

「……時間が止まってしまふ方法はただ1つ……」

エレナの一言に全員が彼女を見つめる。だが、エレナは言いたくな

いのか、ただ俯くだけだった。

「……………まさか……………時の歯車が……………!?!」

その様子を見て何かを悟ったのかサンシャが口を開いた。

「……………そうだ。時の歯車が――」

何者かによって盗まれたのだそうだ……………」

「……………ええ……………!?!」

サンシャの言葉を受け継ぎ言ったペラトに、全員が再び驚きの声をあげた。

「今はバイル保安官が捜査に乗り出している。……………怪しい奴を見かけたらすぐに知らせるように。」

ペラトの忠告に全員が大きく頷いた。

「そしてもう1つは先ほどとは違って変わって明るい話題だ」

明るい声で話をするペラト。

「実はトレジャータウンからかなり東に湖があるのだが、まだ解き明かされていない謎が多く残されている。なので近々、遠征で訪れようと考えてる」

「いよいよ……この時期がやってまいりましたわ!!」
「ヘイヘイ!燃えてきたぜー!!」

“遠征”と聞いた瞬間ギルド全体が熱狂に包まれた。

「皆も分かってるようだけど遠征には選ばれたメンバーしか行けないからな。この数日間で精鋭メンバーを選んで遠征に連れていこうと考えている……なので、遠征メンバーに選ばれるように頑張ってくれ!!」

弟子達に負けないぐらい声を張って説明をするペラト。

「燃えてきましたね!!」

「メンバーに選ばれるように頑張らないと……」

「あ……あつしは遠征に行った事がないから選ばれたいでゲス!!」

全員がそれぞれの想いを口にする。

「それじゃ、今日も張り切って仕事を頑張るよー!!」

「「「おおー!!!!!!」」」

全員が意気揚々と持ち場へと散っていった。

「俺達も選ばれるように頑張らないとな!!」

「うん!!」

「もちろんよ!!」

「オレも選ばれるように頑張らないとなあ!!」

フィールドを筆頭に『サンライズ』のメンバーも気合いを入れた。

「ああ、お前達はいつも通りに掲示板の依頼をこなしてくれ。……メンバーに選ばれるように頑張るんだぞ」
「はい……」

フィールド達は元気よく返事をしたあと、地下1階へと上がった。

「それじゃ、私とシンラはお尋ね者の依頼を選んでくるわ。」
「りょーかい！」

エレナとシンラはお尋ね者の掲示板へと向かっていった。

「さて、私達も選ば？」
「そうだな……ってあれ？」

救助依頼の掲示板に近づいた時、フィールドが足を止めた。

「どうしたの、フィールド？」
「あいつら……どこかで見たことがあるような気がするんだけど……」
「……」

首を傾げるキュベレーにフィールドは掲示板の前にいる2匹のポケモンに指を差した。やがて、ポケモン達が振り返りフィールド達と目が合う。

「げっ！？お前達は……」

先に声をあげたのは紫色の球体——ドガースである。

「「お、お前達（あ、あなた達）は！？……………」

誰だっけ？？」

「「だああああ！？」」

フィールドとキュベレーが拍子抜けた事をハモらせ、2匹はずっこけた。

「俺達は『海岸の洞窟』であっただろーが！？俺はマタドだ！」

「そうそう！俺はクロだ！！どうだ、思い出したか！？」

ゴ丁寧に名前を名乗ったドガースのマタドとズバットのクロ。

「思い出した！たしか……」

「キュベレーの後をついてきたストーカーかあゝ」

「「ストーカーじゃねえよ！！」」

キュベレーの言葉を継いで言ったフィールドにマタドとクロは息がピッタリと合ったツツコミを入れる。

「（…ストーカーはあながち間違っていないけど……）それより、

どうしてあなた達がここにいるの!？」

「なんだよ？探検隊が掲示板にいちやあわりののか？」

「ええっ!？あ…あなた達が探検隊だつてえ!？」

マタドの発言にキュベレーはかなり目を開きながら驚く。

「まあ……やり方はちよつとあくどいけどな。それよりお前達こそどうしているんだ？」

「そりゃあ探検隊だからな。いちや悪い？」

クロの問いにフィルドが答えた瞬間、マタドとクロは顔を合わせる。そして――

「お前達が探検隊だとお!？こりや笑えるぜ!アハハハ!！」

「悪い事は言わねえ……探検隊はお前達に向いてねえぜ?特に……その臆病で弱虫なロコンはなあ……ケケツ!！」

「……!！」

クロが腹を抱えながら笑い、マタドはキュベレーを見ながら嘲笑う。対してキュベレーはかなり傷ついたような表情をしていた。

「てめえら……!！」

「待つて、フィルド!！」

反論しようとしたフィルドをキュベレーは右前足で制す。その様子にマタドとクロは笑うのをピタリと止めた。しかし、キュベレーを馬鹿にするような表情は崩していない。

「――確かに私は臆病で弱虫だよ……だけど、それでも変わりたい

と思って辛い修行も頑張ってる！それに……遠征のメンバーの候補にも選ばれてるように頑張ってるんだから！！」

”勇気”を振り絞りマタド達に反論したキュベレーは後ろに立っていたフィールドに笑顔を送る。彼もまたそれに応えるかのように笑顔を溢す。一方なマタドとクロはキュベレーが反論してきた事に驚きつつも“遠征”と聞いた瞬間、企みを含めた笑みを浮かべた。

「……ほう……ここのギルドには遠征があるのか……」
「でも遠征って言ったって実力がないと選ばれな——」

クロが最後まで言い終えないうちに”波動弾”が飛んできてクロに命中した。

「つてえ……いきなり何しやがる！！」
「実力って言うけどさ……俺達に負けてたり、さっきの攻撃をまともに食らったお前達はどうなんだよ……」
「うるせえ！あ、あの時や今はアニキがいなかったからだ！！」
「「アニキ？？」」

フィールドの気迫に気圧されつつもクロは反論をする。クロから発せられた“アニキ”という単語にフィールドとキュベレーは眉をひそめる。

「そうさ！クロと俺——そしてアニキが揃った探検隊『ドクローズ』だ！！」

「アニキは俺達よりメチャクチャ強いんだぞ！お前達なんて一捻りさ！……お、噂をすればこの匂い！！」
「「匂い？」」

マタドとクロは勝ち誇ったような表情をしながら語る。

「匂い？別にそんなの——！！」

フィールドが口を開いた時、彼は咄嗟に動いた。その瞬間、先ほどまで彼がいた所が風を斬ったような音が聞こえた。そして、そこには——紫色の体に白い尻尾の先端が頭の上まで届くほどあり、その下にある顔つきはいかにも質^{たち}が悪そうに見えるポケモン、スカタンクが立っていた。スカタンクはゆっくりとフィールド達に近づいてきた。

「ほう…俺様の”辻切り”を避けるとはな……だが、俺様の前に立っていたのが運の尽きだ。……そこをどけ！！」

言い終えた瞬間、今度は”毒ガス”を放つ。

「ぐわあああ！？」

「フィールド！……うう…何……臭い……！！？」

”毒ガス”を食らったフィールドは吹き飛ばされてしまう。しかし、この”毒ガス”は普通のとはかなり違っていた。毒に侵されない代わりにオナラの匂いと同じを含んでいるためかなり臭いのである。フィールドを襲った”毒ガス”の匂いは地下1階に充満していた。

「きゃー！！臭いですわー！！」

「ハイハイ！一体誰がオナラを出したんだよ！！」

「あ…あつしじゃないでゲスよ！！」

皆辛そうに鼻を抑えていた。

「…シンラ！窓を開けるから、”吹き飛ばし”を使って！！」

「りょーかい……ゲホゲホ……肺がいてーよ……」

返事をしようとしたシンラはガスを思いっきり吸い込んだため、むせ返ってしまう。そうしてりうちに、カチッ、と言う音が聞こえたと同時に――

「シンラァー！！今よー！！」

「行くぜ……」吹き飛ばし”！！」

エレナが窓を開けるとシンラは”吹き飛ばし”を使い、匂いの原因である”毒ガス”を消した。その様子を鼻を鳴らして一瞥したスカタンク。

「貴様もさっきの奴と同じく張り倒されたのか！！？」

「あ……ああ……」

スカタンクの威圧に耐えきれずにキュベレーは道を開けてしまう。

「さっすがアニキ！！」

「やっぱアニキはつえーよ！！」

マタドとクロの前に立ったスカタンクを2匹は褒め称える。

「……それで金になる依頼は合ったのか??」

「いや……依頼の方は全くダメでしたが1つだけ収穫が……」

マタドはそう言うと、スカタンクにひそひそ話をする。やがて、スカタンクの表情が悪巧みを考え付くような表情に変わっていた。

「ほほう……これは美味しそうな情報だな……お前達！早速帰って悪

巧みを考えるぞー!!」

「へいー!!」

そついうとスカタンク達は梯子を登っていった。

「キュベレー！フィールド！！大丈夫！？」

彼らが去ってまもなくエレナとシンラがやってきた。

「うん…私は…大丈夫だから……」

キュベレーは顔を下にしたまま答えた。やがて――

「シンラ……あとは頼んだわよ……」

「ひっ……は、はいー!!」

エレナはかなり低めのトーンでシンラに言う。と猛ダッシュで梯子を登って行ってしまった。そして、シンラはと言うと顔を完全に引き攣らせた。

「う……うーん……」

「大丈夫か！？怪我はないか！？」

「ああ…しかし、ただの”毒ガス”攻撃に吹き飛ばされるとは思っ
てなかったよ……ところで…エレナはどこに行ったんだ？」

フィールドはエレナがいない事に気付きシンラに声を掛けた。

「ああ……彼女なら――」

シンラが続きを言おうとした時、外から3つの断末魔が響いてきた。

「……なるほど……そういう事が……」

フィールドも思わず顔を引き攣らせる。

「……フィールド…シンラ君……ごめんね……」
「キュベレー、どうしたんだ？急に……」

突然謝ってきたキュベレーにフィールドとシンラは思い当たる節が見つかからないため、首を傾げた。

「私……あのスカタンクが前に立った時……すごく怖くて……何も出来なかった……私ってやっぱり弱虫なの……かな……」

体を震わせながら言葉にするキュベレー。その瞳には涙が溜まっており、すする度に頬へと伝っていった。

「……違う。キュベレーは弱虫なんかじゃない。」
「えっ……？」

「さっきマタド達に”勇気”を持って言い返してただろ？それにお尋ね者リーパーの逮捕や初めての探検だってキュベレーがいなかったら……絶対成功してなかったと思う。」

「フィールド……」

キュベレーは少しだけ顔を上げる。

「フィールドの言う通りよ。」
「……エレナ……」

先ほどまでいなかったエレナもいつの間にか帰ってきていた。

「私達はあるくならない奴らよりキュベレーの強いところやいいところをたくさん知ってるわ。あんな奴らの言ってる事をいちいち気にしちゃダメよ?」

「それにキュベレー、弱い自分がすぐに変わるなんて無理な話だよ。少しずつでいい……キュベレーのペースで変わっていけばいいんだ。」

「オレ達はいつでもキュベレーの味方。キミに合わせて一緒に進むよ!」

「みんな……ありがとう……!」

フィールド達の励ましによりようやく笑顔を見せたキュベレー。

「それじゃ、落ち着いたら依頼をやりに行こうな!」

「うん!」

キュベレーが泣き止んだ後、彼らは依頼書を片手にダンジョンへと走っていった。――遠征メンバーに選ばれたい想いを胸に――

#16 君は弱くなんかない!! 完

#16 君は弱くなんかない!!（後書き）

フィルド「あいつらにも名前があつたのかよ!？」

あるんですね。これが。リーダーの名前は次あたりで分かりますよ。さて、あの2匹が登場した話を直しにいかなくては……；

エレナ「隊長!!あいつらをフルボッコしてまいりました!!」（敬礼）

よくやったぞ!エレナ隊員!!（答礼）

フィルド「（やっぱり…あの時に叩きのめしてたんだな……」（；）

#17 気分転換（前書き）

今回であいつらがついに……

フィールド「（なんか嫌な予感しかない!!）」

それでは、第17話をどうぞ！

#17 気分転換

翌朝――

「えー、今日は新しい仲間を紹介するぞ」

「また、弟子入りか？」

「一体どんな方でゲスかね？」

ペラトの言葉に弟子達はざわざわし始める。

「こんな忙しい時期に一体誰なんだろうな？」

「お前もそんな時期に来ただろうが……」

シンラにツツコミをいれるフィールド。

「皆静かに！今から紹介するからな。……それではこっちに来て下さい」

次の瞬間、地下1階に続く穴から煙が噴き出し弟子達を包み込んだ。

「きゃー！！オナラ臭いですわー！！」

「ビート……てめえ！！」

「あつ……あつしじゃないでゲスよおー！！」

「じゃあ、一体誰が……！？」

弟子達を包み込んでいる煙はサンシャの言うとおり、オナラ臭いのである。皆が匂いに悶えるとどこからかカチツと鍵が開いたような音が聞こえた。その方向を見てみるとエレナが窓を開けていた。

「シンラ！」吹き飛ばし”をやつて！！」
「りょーかい！」吹き飛ばし”！！」

シンラは飛び上がると開いている窓に向けて”吹き飛ばし”を放つ。
また弟子達も必死で手で扇いで匂いを逃がそうとしていた。

「おい、お前達何をして——」

ペラトが制しようとした時、彼の目の前に風を切る音が聞こえたかと思うとバシイン！と今度は何かを叩きつけたような音が聞こえた。そして、ペラトの目の前の地面が小さなクレーターのようにへこんでいた。

「ペラトさんは口を挟まないで！！」

声がした方向を見てみるとエレナが険しい表情でペラトを睨んでおり、彼女の体から現れた”蔓の鞭”がなっていた。おそらく先ほどの攻撃はエレナの”蔓の鞭”だろう。

ペラトはここは彼女に従うしかないと思ったのか、何度も首を縦に振った。やがて、煙も晴れてようやく弟子達も落ち着く。

「しかしこの匂い混じりの”毒ガス”……まさか……！！」

フィールドに嫌な予感が走る。まもなくして、梯子から見覚えのある体格をしたポケモン達が降りてきた。

そう、彼の予感通り新しい仲間と言つのは——

「ケツ、ドガースのマタドだ。」

「ズバットのクロだ、へへッ。」

「そして俺様がこの『ドクローズ』のリーダー、スカタンクのヘスカだ……覚えてもらおう……」

昨日、フィルド達にいちゃもんをつけた『ドクローズ』だったのだ。

「ええー！？新しい仲間ってこいつらの事なのかあ！？」

「おだまりー！」

すぐにブーイングをしたシンラをペラトは叱責する。

「えー、この方々達は遠征の助っ人として参加してもらった事になった。」

「……はあ……」

にこやかにいきさつを話すペラトにフィルドは溜め息をつき、キュベレーやシンラ、兄弟子達は嫌な顔つきになる。エレナに至っては『ドクローズ』を終始睨み続けていた。

昨日エレナにフルボッコされた彼らは彼女の視線に小刻みに（特にマタドとクロ）震えた。

「まあ、いきなりはチームワークが掴めないだろうし、遠征までの数日間共に過ごしてもらった事になったのだ、皆、仲良くしてくれよ」

（んな事言われてもなあ……）

（それより……ペラトは嗅覚がおかしいのではないか？）

（親方様はよくあの臭いに耐えられますよ……）
（うう……早く遠征が終わってほしいでゲス……）

弟子達全員が遠征を楽しみにしていたのに今は手のひらを返したように遠征が早く終わる事をこの場にいた誰もが思っていた。

「さあ、今日も張り切って仕事を頑張るよー！！」

「「「おおー……」」」

臭い匂いが原因なのか、いつもの掛け声もいつも以上に元気がなかった。

「お……お前達！？どうしたんだい！？」

「どうしたもこうも……こんなに臭うんじゃ仕事も身に入らん！！」

「「「そうだそうだ！！！！」」」

痺れを切らしたゴルダを筆頭に弟子達全員がブーイングを始めた。

「お前達いい加減に——」

突然ペラトの言葉がプツン、と途切れる。彼の視線の先にいるのはサクヤ。しかし、今日の彼はいつもののにこやかな表情が消えていた。

「うう……うう……」

サクヤが呻き始めた時、ギルド全体が小刻みに揺れ始める。

「な……何！？」

「まるでサクヤと共鳴してるみたいだな……」

突然の揺れに『サンライズ』は戸惑う。その中でフィルドはちゃっかりと耳を塞ぐ準備をした。一方のペラトはその事で何かをすぐに悟った。無論、他の兄弟子達でもある。

「い……いかん！！み……皆！！今日も張り切って仕事を頑張るよ
おおー！！！」

「「「おつ……おおー！！！！」」」

半ば悲鳴に近い声質で裏返りながらも再び締めるペラト。弟子達も出来るだけ声を張った。すると、先ほどの震動はピタリと止み、サクヤもいつもの表情に戻っていた。そうしていつもとは違う朝礼は過ぎていった。

朝礼が終わった後、フィルドはシンラと依頼を選んでいた。

「しばらくはあいつらと生活するのかあ……………」

「ああ…………しかし…………どうも嫌な予感しかないな。あいつら、絶対何か企んでるよ。」

などと話をしていると――

「おい！！！」

「ん？どうしたんだ2匹とも…………。」

トレジャータウンで道具を揃えに行ってたキュベレーとエレナが帰ってきた。

「なあ、エレナ。その紙は何？」

「ああ、これ？さつき『交差点』でもらってきたの。」

「それね、今日新しいお店がオープンするみたいだから皆と行こうかなって思ってたんだ！」

エレナの言葉を継いで話すキュベレー。その表情はどこか嬉しいそうだった。

「…それじゃ、依頼をやる前に気分転換に行くか？」

「やったあー！！！」

フィールドはあっさりと了承する。キュベレーは右前足でガッツポーズと似たような素振りをした。そして、『サンライズ』は適当に依頼書を取った後、『交差点』へと向かって行った。

（交差点）

フィールド達はギルドへと続く長い階段を降りて『交差点』に着いた。何の変哲もない十字路に看板が立てられていた。

「ここから入るみたいだよ！」

真っ先に駆け出したキュベレーが看板の近くで止まる。

フィールド達も追いつくとそこには、『パッチールのカフェー一攫千金！ユメとロマンの店』と看板に書かれてあり、すぐ近くには穴が空いていた。穴は横に2匹広がっても大丈夫くらいの大きさがあった。

「早速いこ？」

「キュベレー、待ってよ！！」

「お、俺を置いていかないでくれー！！」

キュベレーを追いかけるようにエレナとシンラも穴の中へと走っていく。そんな元気な3匹に肩をすくめながらもフィールドも続いた。

地下へと続く階段を降りて行くと地面を掘り進んだとは思えないくらい広々とした空間が広がっていた。

またオープンしたばかりのためか、たくさんのポケモン達がつろいでいる。フィールドも人集りを見ながら階段を降りていったためか、登ってきたポケモンの存在に気が付かないようだった。そして――

「うわっ！？」

「きゃっ！？」

誰かとぶつかってしまった。フィールドは階段から落ちそうになったが、なんとか踏みとどまった。

「ふう……あ、ごめんなさい！怪我はないですか！？」「私は大丈夫です。それよりあなたこそお怪我はありませんでしたか？」

慌てて頭を下げたフィルドはそつと頭を上げる。ぶつかつた相手は宙に浮いており、目を瞑っているムシャーナというポケモンである。

「私こそ考え事をして注意を怠っていたので……ごめんなさい。では、急いでますので……」

「ああ、はい。」

ムシャーナはフィルドに微笑みかけると店の出口へと去っていった。フィルドは店の出口をボーッと眺めていると――

「おい、フィルドー！！何してんだよー？」

後ろからシンラの声が聞こえたのでフィルドは振り向く。すると、店の奥の両サイドのカウンターの間のスペースにキュベレー達の姿を見つけた。

キュベレーは心配そうに、エレナとシンラはやや不機嫌な顔つきでフィルドを見ていた。

「（……どうやら置いていかれたみたいだな……）悪い！！今いくよー！！」

周りの雑音に負けなくらいの大声を出すと、フィルドはキュベレー達が待っている所へと急いだ。

「遅い……何やってたの??」

「まあ、いいじゃないか?」

苛立ちを隠せないエレナをシンラは宥める。

「本当にごめん!……というか皆進むのが早すぎだよ……」

「ごめんね、フィールド……」

「いや、キュベレーが謝らなくても大丈夫だよ。……ところでここは何をやってる店なんだ?」

このままだと埒が明かないな、と判断したフィールドは話題を変えた。

「フィールドがくる前に説明を聞いたから教えるよ!」

「ああ、頼む。」

フィールドはキュベレーに頷く。

「まずは左側のカウンター。あれはこの店のオーナーであるパッチールのチロルさんがドリンクを作ってるんだよ!」

キュベレーが右前足で指しながら説明をする。カウンターにはフラフラとした足取りでシェイカーを振っているポケモン——パッチールが目に入った。

「チロルさんはリングや木の実などの材料を持っていくとドリンクにしてくれるんだけど……材料は自分で持っていないと作ってくれないんだって。」

「へえ。」

「そして……右手のカウンターはソーナノのポルトさんとソーナノのメリスさんがやっている探検リサイクル!!」

先ほどとは真逆の方向を指すキュベレー。右側のカウンターには青い体をした2匹——小柄で笑顔が印象的なポケモンのソーナノとやや大柄で我慢してるような表情をしている（何故か口紅のような模様がいついてる）ポケモン——ソーナノが集まってるポケモン達に説明をしていた。

「彼らには要らない道具を受け取る代わりに別な道具をくれる……いわば物々交換のような事をしてるのよ。」

「なるほどなあ。」

キュベレーとエレナの説明により『パッチールのカフェ』を把握したフィールド。

「なあなあ、せっかくだからチロルさんにジュース作ってもらおうよ!!俺さ、喉が渴いちゃったよ!」

「そうだね!!私も説明してたから喉が渴いたし……」

「そうね。」

「ああ。（しかし、シンラは子供だな……）」

せがむシンラにフィールド達は頷く（フィールドは苦笑しながら）とチロルがいるカウンターへと向かった。

先ほど相手にしていた客はちょうど席を立ったようでカウンターは空いていた。

「いらつしやいませえ」

「すみません!これを1つずつドリンクにしてもらえませんか?」

キュベレーはトレジャーバックから橙グミ、赤いグミ、若草グミ、空色グミを取り出してカウンターに置く。

「分かりましたあゝ。橙グミ、赤いグミ、若草グミ、空色グミ入りましたあゝ」

「ソーナンス!!」

チロルの呼び掛けにメリスは応える。そして彼は4つのシェイカーを取り出すとグミをそれぞれにいれ、蓋をする。

そして、フラフラとした足取りでシェイカーを1つずつ降り出した。その単調な動きにフィルド達はしばらく見ていた。やがて――

「お待ちせしましたあゝ。まずは空色グミジュースですうゝ。」

「はいはい！オレです!!」

シンラは右翼を挙げるとチロルはジュースとなった空色グミが入ったコップを置いた。

「続いては、つぶつぶ若草グミですうゝ。」

「はい！」

エレナは元気よく手を挙げると、若草グミが入ったジュースを彼女の前に置かれる。

「そして、ホット赤いグミですうゝ。」

「はい！」

キュベレーは返事をする、赤いグミが入ったジュースを置いた。

「そして、最後は幻の一品ですう!!!!」

「はい！……はい？」

チロルが発した言葉にフィールドは首を傾げる。

「この幻の一品は狙って作る事なんて出来ない一品なんですよー
！！」

チロルは説明をしながら、橙グミが入ったジュースをフィールドの前に置いた。

「それよりも、早く飲もうぜー！」

「そうだな、じゃあ……」

「「「いただきますー！ー！」「」」

フィールド達は声を揃えるとジュースを飲みはじめた。

「……うまいー！」

「おいしいー！」

「チロルさん、おいしいですよー！」

「お口に合って良かったですうー！ー！」

キュベレー達がおいしいと口々に言う中、フィールドはと言うと――

（な……なんだ……！なんかつまと言えないけど……感動するつま
さだー！）

あまりのおいしさに幻の一品を見ながら固まっていたのだった。
そして、ドリンクを飲み終わった『サンライズ』は今日の依頼をこ
なすため、ダンジョンへと走っていった。

同じ頃『プクリンのギルド』では――

「失礼します♪親方様、お客様です♪」

サクヤの部屋に入ったペラトは報告すると、1匹のポケモンを通して部屋を後にした。サクヤはペラトを一瞥した後、入って来たポケモンに満面の笑みを浮かべた。

「久しぶり♪シャルナ♪」

「お久しぶりです、サクヤ！こうしてあなたと会うのは5年振りです！ね！！」

シャルナと呼ばれたポケモンはサクヤに微笑み返した。

「ボクの手紙、届いた？」

「ええ、ちゃんと目を通しておきましたよ。」

「そっか♪それで……どうかな？」

やや真剣な顔つきになるサクヤ。

「もちろん、構わないですよ。但し……」

「うん♪分かってるよ！シャルナの条件も忘れてないよ♪」

サクヤの顔つきが先ほどとは嘘のように晴れやかな笑顔になる。そんな彼にシャルナは安心したように溜め息を小さく漏らした。

「それでは2日後来ますので……」

「うんゝじゃあね、ともだちゝ」

部屋を後にするシャルナをサクヤは手を振って送った。

「本当に遠征が楽しみになってきたなあゝ。」

天井を見上げながら彼は呟いた。

そして、夜になり弟子達が夕食を食べ終わった頃――

「アニキイ……腹減りやしたねえゝ。」

ギルドの1室を借りて休んでいた『ドクローズ』のクロが口を開く。

「あんなんじゃ、腹一杯になりませんか？」

マタドも続くように愚痴る。

「クククッ……そろそろギルドの連中も寝静まった頃だ……行くぞ！」

「へっ？何がですか？？」

急に立ち上がったヘスカにマタドは呆ける。

「決まってるだろ？ギルドの食糧を盗み食いのさ。」

「なるほどー！！」

「さすがアニキー！！」

『ドクローズ』不気味な笑みを浮かべると闇夜に紛れて食堂へと向かっていった――。

#17 気分転換 完

#17 気分転換（後書き）

フィールド、固まっていたんじゃない感想にならんよ。

フィールド「いや、だって言葉に出来ないぐらいつまかっただよ!？」

シンラ「そんなにつまかったなら、なんで飲ませてくれなかったんだよ!？」

フィールド「……気が付いたら全部飲み干しちゃったんだ!？」

あまりにおいしくて飲み干しちゃったんだね；

シンラ「（幻の一品が出るまで通おうかな……）」

#18 食料調達（前書き）

さて、今回は過去の回想がちよいと出てきます。
その時は*と『表記になっております。

また、久々に戦闘シーンがありますが……やっぱりgodgodに……。
キュベレー「はぴねすさん、気落ちしないで……それでは第18話をどうぞ！」

#18 食料調達

「食料調達??」

フィールドとシンラはハモらせるとペラトは何度も頷いた。

フィールド達『サンライズ』は朝礼が終わった後、いつものようにペラトから掲示板の依頼をこなしてくれ——と言われるはずだったが、今日はちよつと違っていたのだ。

「実は今朝ギルドの貯蔵庫を見てみたら、中身の……セカイイチだけが全部なくなっていたのだよ……」

ややうなだれながらいきさつを話すペラト。

「それって……完全に盗み食いですよ？ バイル保安官には言っていないですか？」

「いや……実はここだけの話なんだが……」

ペラトは辺りを気にしながら翼でフィールド達を包み込むようにする。どうやら、誰にも聞かれない話のようだ。

「……親方様が夜な夜なセカイイチをこっそりと食べているんだ。親方様はセカイイチが大が3つつくほどの好物なんだよ。」

声を潜めて話すペラトにフィールドはある会話を思い出した。

＊

『サクヤ親方。これってリンゴ…ですよ？なんでみん…』
『違うよ！これはねセカイイチっていう食べ物！ボクの大・大・大
好物なんだ！！』

＊

「そうだったな……サクヤ親方が食べている可能性が大きいから言えないんだな。」

フィルドの結論にペラトはまた頷いた。キュベレーも納得がいった表情をする。

「それで……セカイイチはどこにあるんですか？」

「ああ、セカイイチは『リンゴの森』という場所の奥地にあるんだ。地図を出してごらん。」

ペラトに言われてフィールドは不思議な地図を広げる。

「『トゲトゲ山』の下に広がっている森があるだろ？この赤色の実……リンゴがなつてるところが『リンゴの森』だ。」

ペラトは翼で指しながら説明をした。

「本当は私が調達しに行くのだから、あいにく忙しくてな……。」

「サクヤ親方様は1日我慢出来ないってことかあ。」

「ああ……シンラの言う通りだよ……もし……セカイイチがない事を親方様に知られたら……。」
「……。」

ペラトの言葉を待つフィールド達だったが、ペラトはなかなか言わない。

「……知られたらどうなるんですか？」

ついに我慢が出来なくなったのか、エレナが口を開いた。

「もし……知られたら……なのだ。」

「え？」

「うん？」

肝心な部分が聞き取れなかったためキュベレー、エレナ、シンラは顔を顰めたが――

「それは大変だ……セカイイチを取って来ないとな……！」

フィールドは分かったようなのか、やや慌てたように言う。

「頼んだぞ！絶対失敗するなよ！！親方様の……………だからな！！！」

「分かったよ。」

かなり念を押すペラトを背にフィールド達は梯子を上がっていった。しかし、そんな彼らのやりとりを陰から見ていた者達がいた……………。

「ケツ、あいつら食料を採りに行ったようですね。」

「昨日俺様達が盗み食いをしたせいでとんだとばっちりだな。」

「へへッ。それじゃ、ちよつとちよつかいを出しに行きましょうよ。」

「そうだな……………クククッ。」

くリンゴの森く

ペラトにセカイイチを取ることを頼まれたフィールド達は『リンゴの森』に辿り着いた。

「確か、この森の奥地にセカイイチがあるんだよね？」

「ああ、なんとしてもこの依頼は成功しないと！」

やけに意気込むフィールド。

「フィールド…今日はやけに張り切ってるわね。」

「まあな。もし、失敗したらヤバそうな気がしたんだよ……ペラトがボソボソつと喋ってる時点で。」

フィールドが“ヤバそう”と言った途端、全員がその意味を理解し表情を引き締めた。

「それはまずいかもね……それじゃあ、早く奥地に行こう!!」

「ああ!!」

「ええ!!」

「りょーかい!!」

フィールド達は頷くと『リンゴの森』へと入っていった。遅れて数分後……

「へへッ、あいつら森の中へ入って行きましたぜ。」

「さて……俺様達も行くとするか…ククッ。おっと……但し、あいつの神経を逆撫でしないようにしないと……。」

「へ……へい!!」

一瞬躊躇うような素振りをしながらも『ドクローズ』達はフィールド達の後を追って森の中へと入っていった。

『リンゴの森』はその名の通り、ダンジョンの至る所にリンゴが実っており甘い匂いが辺りを包みこんでいた。また、森のダンジョンと言ったこともあり虫タイプのポケモン達も多く住んでいた。

「なあなあ、ここのリンゴうまいよなあ!!」

「お前……いつ採ったんだよ……それ。」

「ん……ふひさっひはよ。(ついさっきだよ。)」

リンゴをおいしそうに頬張ってるシンラを見てフィールドはちいさな溜め息をつく。

シンラがリンゴを食べ終えた頃になると、木々のあちこちから野生のポケモンが現れるようになった。

「くっ……なかなかタフな奴だな……」 はっけい ”!!”

フィールドは新しく覚えた”はっけい”をハネッコに当てる。しかし、飛行タイプを合わせもつハネッコには期待したダメージを与える事は出来ない。そこへ――

「”翼で打つ”!!”

シンラが空から奇襲をかけた。ハネッコは奇襲に対応しきれずに”翼で打つ”をまともに食らって気絶した。

「フィールド、シンラ君、ナイス!!」

「さて、私達も負けていられないわね……。」

一方のキュベレーとエレナはビードルの最終進化形であるスピアーと対峙していた。

「私が牽制するわ!!」
「お願い!!」

エレナは”蔓の鞭”を出してスピアーの注意を向ける。突然目の前に現れた蔓に彼は本能が赴くままに攻撃を始める。しかし、エレナは蔓を器用に操りスピアーの攻撃を避け続ける。

蔓に攻撃が当てられないスピアーは羽音を更に強くした。——どうやら、怒ったらしい。

するとスピアーは蔓への攻撃をやめ、エレナに向けて大量の”毒針”を放った。エレナも”蔓の鞭”での挑発を中断して”毒針”を回避する事に専念するが——

「……くっ!？」

何発は当たったらしく、苦痛の表情に歪ませる。

「はあ……はあ……。」

肩で息をしながらスピアーを睨むエレナ。スピアーはそんな彼女を見てトドメを刺そうと腕を突き出し突っ込んできた。

「……うつ……!？」

エレナは攻撃を避けようとしたが、片膝を地面につけてしまった。どうやら、先ほどの”毒針”を食らった際に毒に侵されて体力を削られていたようだっただ。

スピードを上げて突っ込んでくるスピアー。エレナは咄嗟に目を瞑ろうとしたその時——

彼女の目の前を横切るかのように炎の渦が現れ、スピアーを飲み込んだ。エレナは炎が来た方を見るとそこにはキュベレーが立つ

ていた。

「…なんとか間に合ったみたいだね……。」

「ありがとね、キュベレー。」

彼女達が微笑んでる間、スピアーは目を回して気絶していたのだった。

「一瞬、どうなるかと思ったよ。」

「でも結果オーライで良かったじゃん!!」

遠くで見ていたフィールドとシンラはそれぞれの感想を口にした。

「そうだね。それに新しい技を覚えたみたいだし……」

「えっと……それってさっきの??」

エレナが思い出したように言うとキュベレーは頷く。

キュベレーは先ほどのスピアーに出したのは”炎の渦”と言う技である。つまり、彼女は”炎の渦”を覚えたのである。

「とりあえずエレナ、モモンの実でも食べるよ。」

「ふふっ、そうね。すっかり毒に侵されていた事を忘れてたわ。」

フィールドはトレジャーバッグからモモンの実を取り出すとエレナに手渡した。そして、彼女の毒が抜けて少し休んだ後フィールド達は先に進んだ。

くリンゴの森 奥地く

「お！大きな木が見えてきたぞー！！」

シンラが声を上げた先には遠くから見ても目立つほどの一際大きな木が立っていた。

「あれが目的のセカイイチがなっている木だね。」

「早く採りに行きましょ！」

キュベレー、エレナ、シンラは木に向かって走り出そうとするが――

「皆、待ってくれ！！」

フィールドがそれを制した。

「どうしたんだよ、フィールド？」

「いや……嫌な予感がするんだ。」

「嫌な予感って……？」

膨れっ面をしながら訊くシンラに答えるフィールド。その答えにキュベレーも不安そうな表情になる。

「そう……例えば――」

誰かに後をつけられているとかね……”波動弾”！！”

言い終えたのと同時にフィールドは後ろの草むらに向けて”波動弾”を2発打ち込む。すると、呻き声が草むらから聞こえてきた。

「……！！この声…まさか！？」

キュベレーは嫌な予感がすると言わんばかりに声を上げた。もちろん、彼女の予感は見事に的中し、草むらからフラフラになりながらも『ドクローズ』のヘスカとマタドが現れたのである。

「…いつてえなあ……クククツ……。」

「チキシヨウ……俺達が後をつけていた事を知ってたのか……。」

マタドはやや残念そうな表情をしていたが、ヘスカは余裕の態度を崩していなかった。

「なあに？また私にボコされたいの？…それにあのズバットがないじゃない？」

「くっ……だが、今回はあの時のようにはいかねえよ。」

エレナの放つオーラにヘスカは後退りしながらも言い返した。

「（そろそろ頃合いだな……）おい、マタド！”あれ”をやるぞ！！”

「へい！」

すると、先ほどまで後ろにいたマタドがヘスカの隣に移動した。

（何か……仕掛けてくるのか！？）

フィールド達も構えながら、様子を見る。

「クククツ！様子見をしたのが仇となったようだな……食らえ！俺様とマタドの”毒ガススペシャルコンボ”！！」

ヘスカはマタドと同時に大量の”毒ガス”をフィールド達に向けて放った。

「範囲が広い！！これじゃ回避が間に合わない……！？」

「ど……どうしよう……！？」

フィールドとキュベレーは広範囲の攻撃に戸惑っていた。しかし――

「シンラ、久々に”あれ”をやるわよ！！」

「……！！ああ、分かった！」

対して、エレナは本来の性格である冷静さを崩さないでシンラに指示を出す。

シンラは了承するとエレナの真上に移動した。

「フィールドとキュベレーは地面に伏せていてね？」

「あ……ああ、分かったよ。」

フィールドとキュベレーは頷くと地面へと伏せた。

「行くわよ……」グラスミキサー”！！”

2匹が伏せたのを確認するとエレナは”グラスミキサー”を自分達の周りへと囲ませる。

「準備万端！！」吹き飛ばし”！！”

すると、シンラは蹲る。その状態から一気に解放すると、彼の周りから強烈な風が広がるように放たれた。

「ぐうう……！！”

「きゃああ！？”

その風に吹き飛ばされないように地に這いつくばるフィールドとキュベレー。そして、”吹き飛ばし”の風は”グラスミキサー”と合わさり”グラスミキサー”の勢いを更に増した。

「これが守りの——”

「”リーフネイド”！！”

エレナとシンラが技名を叫んだ時、”リーフネイド”の勢いは呼応するかのように早くなった。

「ア、アニキイ！！大変です！！”

”毒ガス”の様子にいち早く気付いたマタドが声を荒げた。

「どうした？あの技は誰にも破れな——！！？」

と、言いかけてヘス力は言葉を失う。なんと、彼らが放った”毒ガススペシャルコンボ”は緑色をした巨大な竜巻によって霧払いのよ
うに払われていたのだ。

「ば……馬鹿な！？俺様とマタドの”毒ガススペシャルコンボ”が
破れるなど……！！？」

ヘス力は狼狽える。そこへ――

「アニキイイ……つてこいつは一体……！！？」

「……少しばかり厄介な状況になってるだけだ……それより、クロ！
！例のやつは手に入ったか……？」

「もっ、もちろんです！！あと、残りは散布してきやした……！！」

「そうか……ならもう用はねえ……ズラかるぞ……！！」

「へい……！！」

空中から舞い降りてきたクロと合流したヘス力とマタドは竜巻を背
に勝ち誇ったような表情をしながら去っていった。

一方、”リーフネイド”の中にいた『サンライズ』のメンバーは――

「そろそろいいかしらね。」

エレナが呟いたのと同時に”リーフネイド”を解いた。だが――

「うう……あ、あれ!? 『ドクローズ』は!?!」

地面から顔を上げたキュベレーは辺りを見渡しながら言う。

「どうやら、逃げたようだな……。でも、俺達の目的はあいつらを叩きのめす事じゃないよ。」

フィールドも立ち上がりながら言う。フィールド達の目的はセカイイチを採ってくる事だ。

本来の目的を思いだし木に向かって歩きだそうとする3匹。

「あれ、シンラ君は??」

「みんなー!! た、大変だあー!!」

キュベレーがいつの間にかいなくなっているシンラの姿を探すと前方から慌てて戻ってきた。

「シンラ……私達を置いて行ったのね……。それであればセカイイチの木なの?」

「確かに大きいリングがなっている――じゃなくて!! とりあえず来てくれよ!!」

真面目に質問に答えようとしたシンラだが、首を横に素早く振ると再び木に向かって飛んでいった。

フィールド達もとりあえずついていく事にした。そして、木に辿り着いた一行が目にした光景は――

「なっ……！？」

「これって……」

「腐ってるじゃない!？」

木の周りには全体、あるいは一部が腐っている——ベトベタフード状態となってるリンゴが落ちていた。

「……確かにこれはセカイイチだが…これじゃ持って帰れないな…」

一部が腐ったリンゴを見ながら呟くフィルド。確かにリンゴがふたまわりほど大きくて腐った臭いと一緒に甘い匂いが漂っていた。

フィルドとキュベレーはこの匂いに覚えがあるため、セカイイチと分かるのに大して時間がかからなかった。そして、フィルドは最後の望みである木を見上げたが——

「ダメだ、なっているやつも腐ってるよー。」

シンラが木の枝に止まると肩を大きく下げた。

「そ………そんなぁ……。」

キュベレーもうなだれてしまう。

「きつとあいつらが……セカイイチを……!!」

エレナは犯人が分かったのか拳を握りながら呟く。

「…仕方がないけど……ペラトに報告しないと……。」

悔しげに言うフィールドにキューベレー達は頷くとバツチを高く上げてギルドへと帰還した。

18 食料調達 完

#18 食料調達（後書き）

新しいオリ技”リーフネイド”は”グラスミキサー”の強化版です。実は攻撃パターンもありますよ。その場合は、エレナの”グラスミキサー”は自らの前に形成して飛ばし、シンラの”吹き飛ばし”は前方へ出します。

今回の守りパターンも近づけば切り刻まれますがね。

エレナ「あいつらだ……絶対あいつらよ……！！」↑（黒いオーラを放ってる）

エレナさん、怖いよ……・黒いオーラを収めて；

#19 失敗を乗り越えて（前書き）

あり？みんないない……ま、いつか。

さて、今日で執筆をしてから3ヶ月となりましたので番外編を開きました。

良かったら、読んでみてください↑（何宣伝している）

では、ggggな第19話をどうぞ。

#19 失敗を乗り越えて

くプクリンのギルドく

「な……なんだってええー!!?」

驚いた声を上げるペラト。フィールド達は『リンゴの森』でセカイイチが採るのに失敗した事をペラトに報告していたのだ。

「う……うわああああ!!!ど……どうしよー!!あれがないと親方様が……!!」

かなり慌てふためいているペラトの様子からセカイイチを採りに行くのが余程重要な任務だった事が窺えた。

「ごめんなさい……。でもセカイイチが腐っ——」

「おだまりっ!!!!」

「っ……!!」

フィールドが説明をしようとしたがペラトの怒りを含めた鋭い一言で制されてしまう。

「とにかく……今夜お前達の飯は抜きだよ!!」

「そ……そんなあ……。」

キュベレーは力を無くしたようにへなへなと地面に座り込んでしま
う。

「それと……飯が終わったからお前達も親方様の部屋に来てもらっから

な!!」

「……………」

「…と、とにかく私ばかりが”あれ”とばかりを食らうのは不公平だし、分かったな!!」

睨むエレナに気圧されつつも言い切るとさっさと階段を降りていった。

「ここにいてもしょうがないし…俺達も行こうか……………」

しばしの沈黙の後、フィールドが重そうに口を開く。そして、彼らは重い足取りで食堂へと向かった。

食堂では兄弟子達や『ドクローズ』が夕食を食べていた。しかし、『サンライズ』のメンバーは依頼に失敗したため、皆がおいしいそうに食べているのをただ見ているしかなかった。そんな地獄のような夕食が終わった後、フィールド達はペラトと共にサクヤの部屋へと向かった。

「……………やあ!セカイイチを採ってきてくれた?」
「うっ……………」

いつものようににこやかな表情で言うサクヤにフィールドは言葉を詰まらせた。また、キュベレー達も俯いてしまう。

「いや…………『サンライズ』はセカイイチを採る事に……………失敗をして……………」

「大丈夫だよ♪失敗は誰だってするから。……………ところでセカイイチは??」

あくまでもセカイイチにこだわるサクヤ。

「だから……………失敗したので……………セカイイチの収穫は……………0……………なんですよ……………あは、あはははははははははは!!」

「……………え……………?」

狂いだしたように笑うペラトに対し、サクヤの表情は笑顔が完全に消えていた。それどころか目には涙を溜めていて今にも泣き出しそうな雰囲気醸し出している。

「……………うう……………」

サクヤが呻き声を漏らした時、ギルドが揺れ始めた。

「な……………なんだ!??」

「これって……………今朝と同じ——」

「い……………いかーん!!お前達!!耳を塞ぐんだ!!」

ペラトが叫んだと同時に翼で耳を塞ぎ、地面に伏せる。

「……………ひつく……………」

「と、とにかく塞ぐんだ!!!!」

フィールドも耳を塞ぎながら大声で指示をする。そして、全員が耳を塞いだ瞬間――

「う……うえええええん!!」

サクヤが大声で――いや、”ハイパーボイス”を含めた声で泣き始める。ギルドも彼の泣き声に呼応してさらに揺れを大きくした。

「ぐ……ぐわああ!!?」

「あ……頭が……いつも以上に痛い……!!」

ただでさえ高威力を誇る”ハイパーボイス”が今や凶器と化してフィールド達を襲う。

「ビエエエエエエエエエン!!!!」

「も……もう限界かも……しれな……い……」

更に泣き喚くサクヤにフィールドは意識が飛んでいきそうになった。
だが――

「御免ください!!セカイイチをお届けに来ました!!」

何処からか声が聞こえると先ほどの揺れとサクヤの泣き声が嘘のようにピタツと止まった。

フィールド達は安堵の溜め息をつくと声がした部屋の入り口の方を振り返った。

「なっ……!!お前らは!!」

その瞬間、ペラト以外の全員が驚愕の表情（エレナは睨み付けるような表情）へと変わる。なんと、入り口にいたのは『ドクローズ』の3匹であった。

ヘスカはフィールド達の反応（エレナだけは見ないようにしている）を面白がるように見ると、セカイイチをサクヤの前に置いた。

「わぁー！セカイイチだぁー！ありがとう、ともだちっ」

セカイイチを見た途端、いつもの表情に戻ったサクヤ。

「どうして……！！セカイイチは確か腐って——」

「あ……ありがとうございます！！ほ、ほら！！お前達も頭を下げる……！」

キュベレーの言葉を遮ってまで『ドクローズ』に礼を言うペラト。フィールド達は納得がいかないまま渋々と頭を下げる。ただ、エレナだけは頭を下げようとはせず『ドクローズ』を睨んでいた。

「いえいえ……自分達はギルドにお世話になっている身なので……困った時にはお互い様なので……。」

一方のヘスカはうわべだけの笑いを浮かべて対応する。その笑いにフィールド達の悔しさが一層増した。

「あなた方のような素晴らしい探検隊と共に行動できるのはとても心強いです……！」

「いえいえ……それではもう遅いので失礼します……。」

そんな事は知らないペラトの感嘆の言葉を背にヘスカ達は退室した。

「……私達の邪魔をしたくせによくもあんなセリフが言えるわね……」

エレナは誰にも聞き取れないぐらいの小声で呟く。フィールドはその呟きを聞き取り、そして部屋の入り口を睨んだ。

（……あの時……クロがいなかったのは、セカイイチを採ってさらに残りを腐らせて……俺達を失敗させるようにするため……そして奴らの目的は……俺達を遠征に行かせない事か！？）

この時、フィールドの頭の中でジグソーパズルのピースがカチツと音を立ててはまった。

しかし、今更分かったと言えどももう後の祭りである。自分がもっと早く気付けば良かった、とフィールドは悔しそうに下唇を噛んだ。

「しかしアニキ……。どうしてもあの時セカイイチを差し出したんですか？俺はあの後『サンライズ』がどうなるのか見てた方が面白かったと思いますよ。」

クロが少し残念そうに言う。

「馬鹿かお前は？俺様達の目的は遠征に行くことだろ？今はサクヤ

に信頼を寄せられる事が重要だろう?」

「なるほど! 流石はアニキ〜!」

マタドがへス力を賞賛する。

「しかし……あの有名な『プクリンのギルド』に俺様も初めは警戒したが……拍子抜けだったみたいだな……。」

「そうですね〜。サクヤなんてセカイイチがないとすぐに泣くお子様だったですね〜。」

「ケツ、ギルドの連中どもがあ親方に怯える理由が分からねえぜ。」

3匹はギルドの生活で感じた事を口にする。

「まあ、ともかく……遠征でお宝を見つけたら……。」

「ギルドの連中を倒して……。」

「お宝を奪ってズラかる! ……へへッ、今回の計画は楽勝ですね、アニキ〜。」

「そうだな……クククッ。」

ギルドの借り部屋から3匹の不気味な笑いがこだました。もちろん、それを聞いたものは誰1匹もいない――。

一方、拷問から解放された『サンライズ』は自分達の弟子部屋に戻って来た。

「やっぱり、あいつらだったんだわ!!」

「それってエレナ達が技を防いでいる間にセカイイチを腐られた……って事？」

「だろうな。」

完全に怒ってるエレナに理由を問うキュベレー。しかし、エレナの代わりにフィールドが答えた。

「なあ、このまま起きていても辛いしもう寝ようよ!!」

「そうだね……皆お腹が空いてるし……それじゃ、おやすみ。」

シンラとキュベレーを筆頭にフィールド達は眠りについた。
そして次の日――

「えー、遠征のメンバーの発表はここ数日間に行おうと思ってる。
皆最後のアピールだからな、それじゃ、今日も張り切って仕事を頑張るよー!」

「「「おおーっ!!!!」」」

兄弟子達は意気揚々と持ち場に去っていくが、フィールド達は昨日の夕食を抜きにされたためか表情に覇気がなかった。

「お前達は今日も掲示板の依頼をこなしてくれ。後……遠征メンバーの事だが……諦めた方がいい。」

「「えええ！？」」

キュベレーとシンラは驚愕の表情をしながらハモらせた。

「……やっぱり昨日の失敗が響いてるのか？」

「ああ……やはり昨日の失敗は大きいと思うぞ。親方様は一見ああ見えて実は腸が煮えくり返っているかもしれない……」。

だから、遠征メンバーの発表はあまり期待しない方がいいぞ？じゃあ、仕事を頼んだぞ。」

ペラトはそう言い残すと地下1階へと上がっていった。

「うう……お腹が空いてるのにあんな事言われたら、力が入らなくなっちゃうよ……。」

キュベレーはその場で座り込んでしまふ。昨日の『ドクローズ』によって嵌められた失敗が『サンライズ』全員に重くのしかかっていた。

「おい、キミ達……！！」

「うっ……この声は……。」

そんな空気をものともせずに響く呑気な声。フィールド達はその声がある方向を向かない——いや、向けなかった。

やがて、その声の持ち主がフィールド達に近づいてきた。

「さっきから呼んでるんだよ?」

「「「……………」」」

声の主——サクヤの質問にフィールド達は答えなければかりか逸らすように俯いた。

「…………ふう。しょうがないなあ…………」

サクヤは溜め息を1つつくと——

「「うわあ!?!」」

「きゃあ!?!」

「な、なに!?!」

全員を包み込むように抱えると自分の部屋へと連れていった。

「…………いきなり何するんですか?」

（サ…………サクヤ親方様に抱かれた…………／／／）

サクヤの部屋に着いて解放されたフィールド達。そして、いの一番にフィールドが口を開いた。ちなみにシンラは憧れのサクヤに抱かれたのが嬉しかったようだ。

「……………って、ボクがキミ達を呼んでも来ないからだよ?それ

と……はい♪」

サクヤは理由を述べながらフィールド達の前に大きなリンゴを1つずつ置いた。

「これって……」

「大きなリンゴだよ♪実はねキミ達が部屋に戻った後、こんな事があつたんだ……」

*

フィールド達が退室してから数分後……

「親方様……！！入ってもよろしいでしょうか？」

「いいよ♪」

セカイイチを食べたためかいつも通りに完全に帰ったサクヤ。そんな彼の前に訪れたのは――

「あ、親方様！起きてたんですね！」

サンシャ、フウ、そしてビートであった。

「やあ！こんな夜遅い時間にどうしたの？」

「じ…実は親方様にお願いがあるんでゲスよ。」

ビートがそう言うつと彼らはサクヤに大きなリンゴを差し出す。

「無理なお願いかもしれませんが……明日『サンライズ』の皆さんにこれを食べさせてくれませんか？」

「サクヤ親方様、お願いします！！」

「あ……あつしからもお願いしますでゲスう！！！」

「…うん、いいよ！！」

「「「あ…ありがとうございます（でゲス）！！！」」」

*

「兄弟子達がキミ達を想って残してくれたみたいだよ？」

「そうなんですか……。」

「オレ…我慢出来ないよ！！頂きます！！」

シンラは我慢の限界がきたのか大きなリンゴに噛り付いた。

「どうしたの？早く食べなよ？」

「はい…頂きます…！」

「「頂きます…！！！」」

キュベレー、エレナ、フィルドも続くように大きなリングをがむしやらの食べる。そして、あつという間に食べてしまった。

「いや…いつもよりうまかったなあ…！」

「ご馳走様でした…！！サクヤ親方、ありがとうございました…！」

「「「ありがとうございます…！！！」」」

「お礼はボクじゃなくてサンシヤ達に言ってね？…そうだ…！前にボクが直接依頼を出すって言った事、覚えてる？」

フィルド達の礼を聞いた後、サクヤは別な質問を切り出す。

「ああ！シンラを候補に入れるかどうかを見極めるあれですか？」

腕を組んでいたフィルドが思い出したように口を開いた。

「うん…それで依頼の内容はね、この手紙をルイスタウンの長に渡してほしいんだ。」

「えっ……それだけなんですか？」

フィルドに手紙を渡しながら内容を話すサクヤにキュベレーは素っ頓狂な声を上げる。

「そうだよ。でもね…手紙を届けるって簡単そうに見えて実は大変なんだよ？」

「確か…手紙には重要な機密情報が書かれている可能性があって、盗賊が狙っているからなんですよね？」

「そういう事」あ、『パッチールのカフェ』に案内人がいるから彼らと合流して行つてね。」

エレナに頷くとカフェへ行くように促す。

「それと……失敗は誰だつて付き物だからめげずにメンバーに選ばれるように頑張つてね？」

「サクヤ親方……！！はい、頑張ります……！！」

サクヤのエールに代表してフィールドが応え、『サンライズ』はサクヤの部屋を後にした。

「あーサンシャさん達だ……！！おい……！！」

『パッチールのカフェ』に向かう途中、ギルドの入り口でサンシャ、フウ、ビートと見かけたキュベレーが彼らに声をかける。

「まあ、あなた達……！！昨日は夕食抜きにされて辛かつたでしょう？」

「朝は辛かつたですけど……先輩達がくれた大きなリンゴのおかげで助かりました……！！本当に……！！」

「……ありがとうございます……！！……！！」

フィールド達は大きなリンゴを分けてくれたサンシャ達に深々と頭を下げた。

「それじゃ……親方様は分けてくれたんでゲスね……！！良かったでゲ

スうゝ!!」

「はい!!……でも……」

急にしょんぼりとするキュベレー。またフィールド達もどこか表情が暗いようにも見えた。

「ど………どうしましたか!？」

「………朝ペラトさんに言われたんです………遠征メンバーに選ばれるのは諦めるって………だから——」

「それはまだ………分からないですわ!!」

キュベレーの言葉を遮ってサンシャが力強く言う。

「そうですね!だってまだメンバーが決まったわけじゃありませんから!!」

「そうでゲスよ!!」

「先輩方………」

フウとビートも続け様に言う。その言葉を聞き、フィールド、エレナ、シンラは

安堵の表情をしたがキュベレーだけがまだ浮かない表情をしていた。

「でも………もし私達が選ばれてこの中の誰かが落ちたら………」

「その時は、その時ですわ!!」

「もし、落ちたらその時はメンバーに選ばれた方々を応援するまでです!!」

キュベレーの不安な問いを遮るようにサンシャとフウは言った。

「とにかく………ペラトの言ってる事はあまり気になさらなくてもい

いですわー!!」

「今は気落ちしないで…メンバーに選ばれるように頑張ればいいんですよ。」

「そうでゲス。最後まで諦めずに頑張るんでゲスよ?」

「皆……ありがとうございます!!」

サンシャの言葉を聞きキュベレーはようやく笑顔を見せた。

「ようし!そうと決まれば早速頼まれた依頼をこなすとするか!!」

「「「おーっ!!!」」」

兄弟子達の支えにより元気を取り戻したフィールド達は案内人が待つ『パッチールのカフェ』に向かって勢いよく走りだした。

#19 失敗を乗り越えて 完

#19 失敗を乗り越えて（後書き）

サンライズメンバー

「ふっかあああつ！！！」

やかましい！！

フィールド「とりあえずなんとか立ち直れたよ。」

キュベレー「早く依頼をやらないと！！！」

張り切ってるね～～！

さてここで予告しますが、次回から本編から離脱します。

エレナ「つまり……オリストね。」

そゆ事」

シンラ「マジかあ！！！」

ま…確実にgggdになります、どうか見捨てないで下さい↑

#20 誘（いざな）いの声（前書き）

いよいよ、直接依頼が始まります!!

フィールド「まあ、20話だしちょうどいいんじゃないんか？」
エレナ「そうね。では、第20話をどうぞ!!」

#20 誘（いざな）いの声

くパッチールのカフェく

「で……案内人は一体誰なんだ……。」

入り口付近の椅子に座り呆れ混じりにフィールドは言った。フィールド達『サンライズ』はサクヤから『ルイスタウン』へ手紙を届けるように直接依頼を受けた。

その時に案内人と合流してと言われ、待ち合わせ場所となっている『パッチールのカフェ』へと足を運んだのだ。ちなみに店はオープン初日と比べて客は少し減ったようだが、相変わらず繁盛しており、賑やかだった。

「どうせなら種族とか何匹で来るのか教えてくれればいいのにね……」

テーブルに頬杖を付きながらエレナは呟く。
そして、待ち続けて5分くらい経った頃――

「あの……。」

「はい？」

後ろから少年の声が聞こえたため、フィールドは振り向いた。またキユベレー達もフィールドに声をかけた者に目を向ける。

そこには全身が銀色で首にふさふさした毛と大きな尻尾が特徴なポケモンと灰色の毛皮に覆われており、首には銀色の首輪をしていたハイエナを小さくしたようなポケモン――ポチエナが立っていた。

「…あれ？イーブイって銀色じゃないよな…？」

「シンラ！いきなり失礼だろ！？」

銀色の体をしたポケモン——イーブイを見ながら思った事を口にしたシンラにフィールドは睨みながら注意する。

「あ……ごめんなさい……」

「大丈夫ですよ。気にしてないので。ところであなた方は探検隊『サンライズ』ですか？」

頭を下げたシンラに微笑を浮かべながら許したイーブイは質問を切り出す。おそらくフィールドに声をかけたのは彼だろう。

「そうです。あのひょつとしてあなた達が案内人ですか？」

キュベレーが答えて、逆に質問を返す。

「はい。僕達が『ルイスタウン』から来た案内人です。僕の名前はリョウトです。そして……」

「僕はジュードと言います。」

キュベレーに頷きながら自己紹介をするイーブイ——リョウト。そして、彼の後ろにいたポチエナ——ジュードも前に出て自己紹介した。

「それじゃ、同行するならこっちも自己紹介しないとね。私はエレナです。」

「オレはシンラです！」

「私はキュベレーと言います。」

「俺は『サンライズ』のリーダーのフィールドって言います。今回は

よろしくお願いしますね。」

フィールド達も自己紹介をして、代表してフィールドが右手を差し出す。

「こちらこそよろしくお願いしますね！」

案内人側はリョウトが代表して右前足を差し出して互いに握った。

「それでは『ルイスタウン』に案内するルートを確認しますので不思議な地図を出してもらえないでしょうか？」

「分かりました。」

2匹が手を離れたを確認してジュードが口を開いた。フィールドはトレジャーバッグから不思議な地図を出しテーブルに広げる。

「『ルイスタウン』はここにあります。」

ジュードはテーブルから身を乗り出し、『リングの森』の北東にある山脈の前を指した。

「じゃあ、『リングの森』を通って行けば——」

「シンラ君……『リングの森』の周りは地図には書いてないけど、柵が囲んであつて通り抜ける事が出来ないんだよ？」

「そ…そうなのか!？」

シンラの考えはキュベレーの説明により潰れてしまった。

「『リングの森』を迂回するように行くしかないんです……。『ルイスタウン』の南に『忘れ去られた抜け道』があるのでそこを通って行くんです。」

「『忘れ去られた抜け道』???」

聞き慣れない言葉に『サンライズ』は揃って首を傾げた。

「あれは村人がつけた名前なんです。最近見つけられたばかりなんですけど……でも昔からあったっていう形跡があるみたいなんです。だから本当の名前が分かるまでは僕は『忘れ去られた抜け道』と呼ぼうと決めたんです。」

「つまり……昔は名前があっただけど、分からなくなるほど使われていなかったため忘れられてしまったからそう名付けたんですね。」

フィルドの推測にジュードはたぶんですけど、と言った。

「じゃあ……あなた達はどうやって……それに村のポケモン達はどうやって外に出てるんだ?」

「僕達は”テレポート”で『トレジャータウン』まで運んでもらったんです。柵が出来てから村はほとんど封鎖されたような状態に近かったです。また、昔は『忘れ去られた抜け道』を知らなかったんです。だから、ポケモン達は考えたんです……どうすれば物資が入るのかを……」

質問攻めをするフィルドにリョウトは丁寧に説明をする。

「……そして偶然村には”テレポート”が使えるポケモンがいたんです。」

「それで移動手段は”テレポート”で行ってる訳ね。」

エレナが言つと彼は頷いた。

「だったら、なんでリョウトさん達は”テレポート”を使えるポケ

モンとは一緒に来なかったんだ？」

説明が区切りをつけたのを確認しフィールドは疑問を言う。確かに村で”レポート”を使えるポケモンがいるなら一緒にいてもおかしくない。

「なんだかこういう時に限って皆して出かけたりしていないんですよ……だから運ぶという形でここに送ってもらったんです。」

やや呆れた表情をしながら答えるジュードにフィールドは村でのやり取りを思い出しながら言ってるんだな、と感じた。

「まあ、説明はここまでなんですが……何か質問等がありますか？」
「大丈夫です。それじゃ、案内お願いします！」

ジュードにフィールドが答える。

「分かりました。それではついてきてください。」

リョウトの合図にフィールド達は席を立つとカフェをあとにした。

(SIDE:フィールド)

「は……はつくゆん!!」

キュベレーがくしゃみをした。なんとなくだけどこわいいなあ……
……え?今どこにいるかつて??俺達は『忘れ去られた抜け道』へと向かうために何故か獣道を通ってるんだ。案内人のジュードさんが言うには、昔からあるのに誰も知らないから高い草が生い茂ってるらしい。

それで草に鼻を擦られてキュベレーがくしゃみをしたというわけだ。
……今通ってる獣道も大変だけど『リンゴの森』を通りすぎる時が大変だった気がする……と思うのは俺だけだと思っただよね。え?何故かって??

そうだな……あれは森から漂ってくるリンゴの甘い匂いに誘われてシンラが森に行こうとしてたんだ。それを俺やエレナが行かせないように引つ張って来たんだ。

それが通り過ぎるまで実に数十回……正直辿り着く前に疲れたよ。

……はあ。

「あそこが『忘れ去られた抜け道』です。」

しばらく歩くと前にいたリョウトさんが声を出す。そして、高い草むらをようやく抜けるとどこかにありそうな普通の洞窟の入り口が目に入った。

「村の長がダンジョンなのに一本道だから迷わずに済むと言ってました。」

「でも、ダンジョンだから野生のポケモンは出てくるんだよね。気を引き締めて行かないと……。」

キュベレーが言って俺達はゆっくりと頷き、『忘れ去られた抜け道』へと入っていった。

『忘れ去られた抜け道』

『忘れ去られた抜け道』は長年ポケモン達が入らなかったためか、灯りなどは全くなくて暗い。入り口付近で拾った木にキュベレーがつけた松明の灯りだけが頼りなんだ。天井を仰ぐと確かに今でも崩れてきそうな亀裂が目に入った。

ちなみに松明を持っているのは前方を歩いてるエレナが担当。隣はキュベレーが、彼女達の後ろは案内人のリョウトさんとジュードさん、そして彼らの後ろに俺とシンラが歩くという並びになっていた。いくら手紙配達とはいえ案内人は同行者……彼らが力尽きたら失敗と同じだからちゃんと守らないとな。

「あつ……前方から敵が来ますよ!」

リョウトさんが耳をピクリと動かしながら言った。そういわれると前からひたひたと足音が聞こえてくるような……

「蔓の鞭”！！”」

エレナが前方に向けて”蔓の鞭”を放つ。すると、ドサツと何かが倒れたような音がした。

俺達はゆつくりと前に歩みを進めるとそこには、おそらくエレナの技を当てられた暗い緑色の体をしたポケモンが倒れていたんだ。

「なるほど…キバゴを倒したんですね。」

冷静に言うジュードさん。確かにキバゴは目を回して倒れるな……。

「蔓の鞭”だけで一発KOを出すなんて…さっすがはエレナだな！」

「私だって強くなるために努力してるんだから！」

「あなた達のような強い探検隊と一緒にいるなんて…すごく心強いですよ！！」

「なんか…照れるわね……／／」

そんな他愛ないの話をしながら再び先に進もうとした……その時――

“――ルド………フィールド………”

「……え？」

一瞬だが俺を呼ぶ声が聞こえた気がした。

「どうしたの？」

「ああ……いや、何でもないよ。」

心配そうに見るキュベレーに俺は適当に誤魔化す。——今いるメンバーの中であんなに低い声で名前を呼ぶポケモンなんて思い浮かばなかったし、聞く程もないだろうと思ったから——

出会った野生のポケモン達を倒しながらしばらく進んでいると20メートルぐらい先に明かりが見えてきた。しかも、近く看板が立てられており「この先『ルイスタウン』」とぼやけてはいたが書かれていた。

「本当に分かれ道が見当たらなかったね。」

キュベレーが振り返りながら言う。

「だなあ……ってあれ？」

だけど、シンラが呆けた声を上げて止まった。何か見つけたのだろうか？とりあえず声をかけてみるか……。

「シンラ、どうかしたのか？」

「こっちにも道があるんだけど！」

あれ？一本道じゃなかったんじゃないのか？？とりあえずシンラがつたっている場所へ戻った。すると右側に幅が狭い道が続いていた。

「せっかくだから行ってみよ——」

「シンラ……今依頼中よ。」

残念ながらシンラの好奇心はエレナの発言によって粉碎されてしまったとさ……というのは置いて、俺達の目的は『ルイスタウン』へ手紙を配達する事……寄り道して時間を喰ったら門限まで帰れなさそうだしな。

「じゃあ、今度来たら行こうぜ！な？？」

「私も行ってみたいなあ……。」

いや……何故目を輝かせながら俺を見るんだ？？とりあえずエレナを見たが目を逸らされてしまった……絶対わざとだよな、あれ……。

「そうだな……時間があつたら行ってみるか……！」

「「やったあー！！」」

俺が言うと2匹はハイタッチをした。そんなやり取りをリョウトさんとジュードさんは微笑ましく、エレナは苦笑しながらも嬉しそうに見ていた。

「…そういう訳だからとりあえず、早く行こうか？」

俺は皆を促した。そして歩き出そうとした時――

“――フィールドよ……”

……！！また…聞こえた…いや、俺を呼ぶ声が頭の中に響いた。

そして俺は自分の周りの時間が何故か遅くなるのを感じた。

「くう……ああ……！！」

頭が……痛い……！！一体誰が――

“我は待っているぞ……『導きの祭壇』で――”

その言葉が響いた時――

俺は意識が遠退いていく感覚に襲われた――。

S I D E : 三人称

「……行かなきゃ……」

「えっ……フィールドさん？」

先ほどとは明らかに声を落として呟いたフィールドにリョウトは思わず振り返る。リョウトの声に異変を感じたのか少し先に進んでいたキュベレー達も戻ってきた。

「リョウト？何かあったの？」

「そ…それが…フィールドさんの様子が――」

リョウトが状況を伝えようとした時――

「……行かなきゃ……誰が…俺を呼んでる……から……」

「……！！フィールド（さん）！？」「」

急に顔を上げたフィールド。彼の光が宿っていない虚ろな瞳にキュベレー達は一瞬たじろいでしまった。

そして、フィールドは弾かれたように地面を蹴ると先ほどの狭い通路を走っていった。

「……あ！フィールドが！！」

彼が去ってから数秒後、状況を飲み込んだキュベレーが声を上げた。

「オレ、追いかけるよ!!」

シンラも追いかけるように通路に入っていた。

「…僕も行きます!!」

「…ダメです。」

ジュードも加勢しようとしたがキュベレーが首を横に振った。

「ど、どうしてなんですか!？」

「たぶんこの先は危険だと思うんです。あなた達を巻き込む訳にいきません! 気持ちだけは受け取っておきますので先に『ルイスタウン』へ行ってください!!」

「…っ!! わ… 分かりました…。」

キュベレーに諭され渋々頷いたジュード。

「…必ず戻って来てくださいよ?」

心配そうに言うリョウトにキュベレーとエレナは頷くとジュードと一緒に『ルイスタウン』へと走っていった。

「キュベレー!! 私達も追いかけるわよ!」

「うん!! … フィルド… 今行くから!!」

彼女達も狭い通路を通って先に行ったフィルドとシンラを追いかけた。

2
0

誘^{いざな}
いの
声

完

#20 誘（いざな）いの声（後書き）

シンラ「おいおいおい！！大変な事になってるぞ！」

ですね。↑（他人事）

しかし、やっぱりgdgdになってしまいましたよ（泣）

キュベレー「フィールド…一体どうしたんだろう……」

……スルーされたよ；

#21 祭壇で待ち受ける者（前書き）

ここで注意があります。

今回は若干の流血表現があります。

苦手な方はUターンする事をおすすめします。

シンラ「作者もとうとう使ったな……。」

はい。使っちゃいましたよ。では第21話をどうぞ！

#21 祭壇で待ち受ける者

「はぁ……はぁ……は、速いわ……！」

エレナが息を切らしながら狭い通路を走っていた。

「フィールド……あんなに速かったかな……それにシンラ君も……”炎の渦”……！」

立ちふさがるテツシードの群れに”炎の渦”を当てながら、キュベレーも走っていた。

「シンラが速いのは……飛んでいるからよ……いつも……歩いてるくせに……」

エレナが愚痴をこぼす。——シンラはいつもは歩く………というかペラトみたいにホッピングしながら行動しており戦闘以外ではあまり飛ばなかったのだ。

それはさておきキュベレー達が走り続けて数十分くらい経った頃、見覚えのある背中が見えてきた。だが、あちこちにかすり傷が刻まれており、場所によっては血が滲んでいた。

「シンラッ……！」

エレナが呼ぶとシンラは後ろを振り向き力なく笑う。

「やっと来たんだ……遅いよ……」

「シ……シンラ君！？怪我してるよ……！それに……」

キュベレーが言葉を区切り辺りを見渡す。そこにはテッシードが5、6匹倒れていた。またそのうちの数匹は血がトゲに付いていた。

「…フィールドを追いかけていたら……襲い掛かって来た……から……反撃したんぐ!？」

「言い訳は分かったからこれを食べていて!!」

エレナは偶然近くにあったオレンの実をシンラの口に無理やり入れた。そのせいもあり彼はオレンの実を喉に詰まらせ、翼で何度も喉元を叩いた。

「これで一安心ね」

「…ゲホゲホッ!!…相変わらず強引だなあ……」

手を鳴らすエレナに涙目でむせるシンラ。

「でも、傷の方は治ってきたみたいだね？」

キュベレーの言ってる通り彼の傷がいつの間にか癒えていた。

「…シンラの傷に血を浴びたテッシード……つまりシンラはテッシードの特性を知らないまま直接攻撃したのね」
「うっ……」

言葉を詰まらせるシンラ。どうやら凶星のようだ。

テッシードの特性は鉄の刺——直接攻撃をしてきたポケモンにダメージを追わせるカウンターのような特性である。ただ、これは中途半端な攻撃ではなく一撃で倒せば発動しない特性なのだ。

つまり、エレナの推測通りシンラはテッシードに直接攻撃でしか

も一撃で倒しきれなかったために特性を受けて傷だらけになっていたのである。

「とにかく……いつ野生のポケモンに見つかるか分からないから早くフィールドを追いかけるわよ！」

「りょーかい！オレも元氣になったしな」

「うん！（フィールド……待っていてね……！！）」

キュベレー達は頷くとフィールドが向かっていった——その先には出口と思われる光が差しこんだ方向へと走りだした。

く導きの祭壇く

一方フィールドはキュベレー達より一足先に開けた場所——『導きの祭壇』へと着いていた。周りの壁は青を基調としたところどころ銀色の何かが塗ってある。中央には天まで昇りそうな巨大な銀色の岩がそびえ立っていた。

また、天井が穴がぽっかりと開いておりやや赤みを含んだ光が差し込み岩や壁を照らしていた。

フィールドは虚ろな瞳で巨大岩をしばらく見上げていたがやがて正面を向くと一歩ずつ前へと踏み出す。そして、岩の根元で立ち止まる。そこには岩の一部を円形にくり貫かれた所に銀色の丸い石が祀

らわれていた。大きさは占いかでよく使われてる水晶玉と同じくらいだろう。

その丸い石に向けてゆっくりと両手を伸ばした。そして、あと少しで触れるところで――

「――フィールド！――」

聞き覚えのある3つの声が祭壇に響き渡った。フィールドはゆっくりとした動きで声がした方向へと振り返るとそこには彼を追ってきたのだらう、エレナ、シンラそしてキュベレーが立っていた。

彼らがフィールドの視界に入った瞬間――まるで糸が切れた操り人形のように彼はゆっくりと前のめりに倒れていった。

「フィールド！！」

「”蔓の鞭”！！」

キュベレーとシンラが声を上げる中、エレナは冷静に蔓を出して倒れていくフィールドを受け止め、ゆっくりと引き寄せた。

「フィールド！！しっかりしてっ！！フィールド！！」

「フィールド！しっかりしろよ！！」

「フィールド！目を開けて！！」

「……うう……」

エレナがフィールドを地面に下ろしてからまもなくして彼は呻き声を漏らして目を覚ました。

「……俺は一体……ってうわっ！？」

「フィールドっ……！！良かった……無事で良かったよ……！！」

「えっ……あ、ああ……心配かけてごめん……大丈夫だから……」

目が覚めたフィールドにキュベレーは彼の胸に飛び込んで肩を震わす。そんな彼女の頭をフィールドは優しく撫でる。

「しかしビツクリしたよ！！いきなり走りだしたからさ……大変だったんだぞ？」

（俺が走りだした……？）

「……まさか……覚えてないの??」

とぼけた表情をしたフィールドにエレナは半分呆れ混じりの顔つきになる。

「ああ……全く覚えてないよ……低い声が頭に響いてから意識を失ったから……」

「意識を失ってたあ！？でもオレ達にはそつは見えなかったけどなあ……」

シンラが言うとは目は虚ろだったけど、とエレナが付け加える。

「へ……へえ……あ、リョウトさん達は？」

「リョウトさん達は先に『ルイスタウン』に行ってもらったよ」

いつの間にか泣き止んだのかキュベレーが顔を上げながら答える。そして、2匹が互いに目が合ってからおおよそ3秒後――

「……」

うわぁっ（ひゃぁっ）!？」

お互い悲鳴に近いような声を上げて後退りした。そして、気まずい雰囲気が始める。

「……早く行かないと心配かけられちゃうわよ??」

「そ、そうだな…／／」

「う…うん…／／」

そんな雰囲気打破するように出されたエレナの助け船によりフィールドとキュベレーはようやく立ち上がる。依然顔は赤いままだったが。少し歩いて行くとフィールドが急に立ち止まった。

「……さっきから気付かないとでも思ってたか…”波動弾”!!」

フィールドは巨大岩の蔭に向かって”波動弾”を放つ。技があたりと何かが岩から飛び出してきた。

フィールド達は何かを目で追って巨大岩に向けるとそこには漆黒に染められた6枚の羽を使って岩の先端を浮遊しているポケモン——サザンドラがいた。

「あ……あの——」

「…トレジャーバッグに探検隊バッジ……キサマらは探検隊か?」

キュベレーの質問を遮るように静かに訊くサザンドラ。質問も許さないような赤紫の鋭い瞳がフィルド達を動けなくさせた。

「…っ。た、確かに探検隊ですけど俺達はあなたの事は知らないし別な用件があるのでこれで失礼しますね」

その射ぬくような目がピクリと動いた。フィルドは一瞬だけ一瞥したあと来た道に戻った。

「ちょ…フィルド!？」

「いくらなんでもあっさりし過ぎなんじゃ……」

エレナとシンラが困惑した表情をしたが、今の彼はそれに突っ込む暇など考えていなかった。

(あいつ……いやな予感がする——)

思考しようとしたフィルドの小さな耳がピクリと動いた。そして

「皆!!脇へ飛ぶんだっ!!」

「えっ……わ、分かった!!」

彼が叫んだのと同時に『サンライズ』のメンバーは直ぐ横に脇へ飛んだ。そして、ほぼ同時に赤紫色の炎——”竜の息吹き”がフィルド達が先ほどいた場所を横切った。

「いきなり何をするんですか!？」

「悪いな……俺の姿を見たら……」

睨むエレナを見て視線をフィールドが身につけているトレジャーバッグに付いていた銀色に輝くバツジに落として言葉を発するサザンドラ。だが、先ほどフィールド達に質問した時とは明らかに威圧が含まれているようだった。

それを証明するようにキュベレーが2、3歩ほど後退りをした。やがてサザンドラは組んでいた腕を解き、フィールド達に向けた。

「なっ……なんだよ、あれ!??」

フィールドは若干後ろに下がりながら叫ぶ。その訳はサザンドラが解いた袖のような腕に隠れていた2つの手——正確には顔が覗かせていたからである。その2つの顔は口をガバツと開けると右側は青色、左側には黄色のエネルギー弾を溜め始めた。

ちなみにフィールド以外と言うと、エレナは平気だったためか特に気にする様子はなかったようだが、キュベレーは完全に怯えており体をビクビクと震わせていた。シンラは信じられない、と言わんばかりの表情で口をあんぐりと開けている。

そんな彼らの反応も特に気にする事なくサザンドラは続けた。

「そう…例えば俺を事知らない新米探検隊だろうが……」

「ここにくたばってもらおう!!」

サザンドラは自らの口に赤いエネルギー弾を溜める。そして3つの口から3種類のエネルギー弾”トリアタック”がフィールド達に向けて放たれた。フィールド達は四方に分かれて技をかわす。

そして、先ほど彼らがいた場所に着弾した”トリアタック”は小規模の爆発を起こし、少量のエネルギーが地面に残った。

「…なるほど、つまりお前はお尋ね者なんだな。」

「ああ、そうだ……。悪いが通報されては困るからな。」

サザンドラを見上げながら言ったフィールドに彼は淡々と説明する。

「…”ハイパーボイス”ッ!!」

話す事はないと悟ったのかサザンドラはフィールド達に”ハイパーボイス”を浴びさせる。

「ぐ……ああああ!!?」

「「きやああああ!!??」」

「うわああああ!!?」

サクヤが放つのはまた違った”ハイパーボイス”がフィールド達を襲う。

「ぐう……し、”真空斬り”!!」

フィールドは耳を塞ぎながらも風の刃を形成しサザンドラに向けて放つ。

「ぐっ!？」

”真空斬り”が命中したサザンドラは”ハイパーボイス”を中断する。”真空斬り”は与えるダメージが固定されており致命的なダメージを与える事が出来なかったが、サザンドラの攻撃を止めさせるには十分な牽制を果たしたのだ。

「ありがとう、フィールド!!」

「どういたしまして!…さて次はこっちの番だ!」

キュベレーに笑顔で答えるとフィールドはサザンドラに向かって”波動弾”を放った。

「”竜の息吹き”。」

対するサザンドラは冷静に”竜の息吹き”を放つ。青白いエネルギー弾と赤紫の炎、2つの技が空中でぶつかり合う。やがて炎を吸収するようにエネルギー弾が膨れ上がりそして、中規模の爆発が巻き起こり煙が立ち込めた。

「何も見えねえじゃん!!こうなったら”吹き飛ばし”で——」
「いや、また技が来る……避けるんだ!!」

技を出そうと飛び立ったシンラに鋭く制し再び横へ跳んだフィールド。ほぼ同時に”トライアタック”が煙から現れた。

「うわぁ!？」

軌道上にいたシンラは間一髪で技を避ける。そして、”トライアタック”は1発目と同じように着弾して爆発を起こす。

（あ……いいこと思い付いたぞ！！）

爆発したあと、3種類のエネルギーが僅かに残った地面を見てシンラはゆつくりと降りる。そして、地面すれすれの所で低空飛行をする――

「爪研ぎ”！！”」

縮めていた足を伸ばし黒い爪を地につけるとおもいつきり地面を引つ掻き始めた。

「…ん？俺に背中を向けるとはいい度胸だ……」

サザンドラは自分に背中を向けたシンラに気付き右手を彼に向ける。

「”竜のは――”！？」

技を放とうとした時、彼の視界がまばゆい光に覆われる。

「ちいつ！？何があつた！！？」

サザンドラは目を細めながらも光が放った原因である天井を見上げた。

空は先ほどより赤みを帯びており、夕暮れである事を告げているようだった。だが、照らす太陽は昼間とは変わらず強い光を発していた。

「なるほど……」日本晴れ”を使つての目眩ましか……」

サザンドラの呟くと”日本晴れ”を使ったと思われるポケモン――キュベレーを睨んだ。彼女はサザンドラと目が合い、少し後退りをする。ちなみにこれはキュベレーの第3の特性日照りの影響だが、無論サザンドラは気付いていない。

「目眩ましは合ってるかな！」

「何っ！？」

「遅い！」はっけい”！！」

「ぐおっ？！」

サザンドラの呟きに応えるようにフィールドの音が響く。サザンドラが視点を下に向けた時には目と鼻の先までフィールドが迫って来ていた。そして、狼狽えている隙にサザンドラの腹に”はっけい”が命中した。

「”グラスミキサー”！！」

続いてエレナが”グラスミキサー”でサザンドラに追い討ちをかける。”はっけい”によりバランスを崩したサザンドラは為す術もなく”グラスミキサー”をまともにくらいさらに空中へと投げ出された。

「お……のれ……ッ！！」

「よそ見をしてる場合かあ！！」

未だにバランスがとれないサザンドラにシンラが彼の真上をとる。

「しまっ――」

「お前の”トライアタック”利用させてもらったぜ！」トライクロ

「！！！」

縮こませていた足を伸ばすシンラ。その黒い爪は僅かに赤、青、黄色が帯びていた。そう、先ほどシンラがエネルギーが残った場所で”爪研ぎ”を行ったのはそのエネルギーを自身の爪に擦り込ませる彼にしては珍しい奇策なのである。

「ぐわあああ！！？」

”トライクロー”は見事にサザンドラの鳩尾に当たり、彼は地面へと落ちていった。

「やった……のか……！？」

フィルドは肩で息をしながらサザンドラが落ちた方向を見る。

「そう……みたいだね……」

キュベレーは静かに目を閉じながら答える。すると、先ほどまで強かった日差しが急に弱くなった。

「キュベレーが日差しを強くしてくれなかったらオレやられてたよ。マジでありがとうな」

「どういたしまして！」

シンラが地面に降り立ちながらキュベレーにお礼を言った。その足の爪には少しだけ血が付いていた。

「さて、そろそろ行かないとね？」

「そうだな。でも、その前にバイル保安官に連絡をいれないとな。」

フィールドがバッジを手に取った時――

「ク……クククク……」

どこからか不気味な笑い声が聞こえてきたのだ。

「い、一体……何なの……！？」

キュベレーが声を震わす。そしてフィールド達が向けた視線の先には――

先ほど鳩尾に攻撃を受けたサザンドラが空中に浮いていた。
その証拠に彼の鳩尾には切り傷が刻まれていた。

「クククク……クハハハハハハ！！！！ヒャアアアハハハハ！！！！！！」

サザンドラは頭を垂らしたまま嗤っていたのだ。

2
1 祭壇で待ち受ける者 完

#21 祭壇で待ち受ける者（後書き）

フィールド「おいおい…復活したのはいいが……大変な事になってるじゃないか……」

そうですね。↑（棒読み）

さて、前書きでもお話しましたが、これからは流血表現及び残酷描写が入る時はあらかじめ前書きで注意喚起を書きます。

フィールド「つまり、続いても2、3話程度だったりって事なのか？」

そういう事になります。まれに登場するようなものなので……。

#22 現れた本性（前書き）

前回注意をした流血表現ですが今回も引き続き、しかも前回よりもややハードルを上げておりますのでご注意ください。

また、人によってはですが残酷表現に感じてしまう部分もあります。

どちらか苦手な方はUターンをお勧めします。

大丈夫な方は次へとお進み下さい。
では、第22話をどうぞ。

#22 現れた本性

「ルイスタウン」

フィールド達がサザンドラと対峙している時、案内人であるリョウトとジュードは目的地である『ルイスタウン』へと辿り着いた。

「おや？誰かと思えばリョウトとジュードじゃないか」

2匹に気付き声をかけたのはキャラメル色の体に帽子の様な形をした頭、目には緑色のサングラスを掛けたようなポケモン——オーベムである。

「確か、探検隊を連れてくるって聞いたけど……」

「ちよつと……訳ありで……ところで長は帰ってきた？」

ジュードは肩で息をしながらオーベムに質問を投げる。

「あいにくだがまだ帰って来てないよ」

「そうですか……！？」

残念そうに頭を垂らしたりリョウトだが、すぐさまに頭を上げた。そして彼は耳を動かしながら先ほど通ってきた『忘れ去られた抜け道』を振り返った。

「……気のせい……かな？」

「どうしたの？」

「一瞬だけど向こうから笑い声が聞こえてきたんだ」

「えっ……？？僕には何も聞こえなかったけど……？」

ジュードが怪訝そうな顔で言ったその時だった。

『クハハハハハヒヤアアハハハ！！！……』

狂ったような嗤い声が洞窟から吹いてきた風によって運ばれてきた。

「うわぁ！すごい声で笑ってるね」

「オーベムさん！感心してる場合じゃありませんよ！？」

聞き入ってるオーベムにリョウトはツツコミを入れた。

「リョウト！！これってフィールドさん達が戻って来ない事と関係してるかもしれないよ！？」

ジュードは緊迫した表情で言う。まるで自分が助けに行かないと、とても言いたそうな感じにも見えなくなかった。

「……分かったよ、ジュード！」

「リョウト……！！ありがとう……！！」

ジュードの意志を感じ取ったのか静かに頷くリョウト。そして、彼らは再び『忘れ去られた抜け道』へと入っていった。

「うぉーい！2匹ともーって……行っちゃったよ……」

取り残されたオーベムは参ったなあ、と呟き村の中へと向かって行ったのだった。

く導きの祭壇く

リョウトとジュードが洞窟内に入ってきた頃、フィールド達は頭を下に向けながらもなお嗤っているサザンドラと対峙していた。

「クハハハハハヒヤアアハハハ！！！」

今のサザンドラはもはや初めて出会った時の冷静さと威圧感とはかけらもなく、顔を下に向けて狂ったように嗤う姿はもはや不気味という言葉しかかけられなかった。

「まさか……俺の体に……傷をつけるとはな……クッククツ……キサマらは生きて帰れない……そして……生きて帰すつもりもないッ！！」
「……！！！！」

言い終えたと同時にサザンドラは顔を上げる。その狂気に歪んだ表情はまだ下積み中であるフィールド達をいとも簡単に怯ませた。

そして、サザンドラの姿が——消えた。

「……！！皆避けるんだ！！」

怯みからいち早く立ち直ったフィールドが声を上げる。彼の声を聞きキュベレー達も立ち直って言う通りに四方に散る。そして、フィ

ルド達が避けた瞬間――何かが通り過ぎたと同時に突風が彼らを襲った。

「きゃ……!!」

「くう…さ…サザンドラはどこにいったんだ!？」

風に煽られながらもフィールド達は消えたサザンドラの姿を探す。

「俺はここにいるぜ？」

「なっ……!？」

声がした方へと振り返るフィールド達。そこには消えたはずのサザンドラがいたのだ。

「まさか……さっき通り過ぎて行ったのは…?!」

「そうだ…まさに俺だよ……だが…次は逃がさねえぜ…？」

驚くエレナにサザンドラはクツクツクツ、と笑いながら言う。だがその視線は次第にあるポケモンへと注がれていった。そして、姿勢を低くしたかと思うと再び彼の姿が消える。

「まずは俺に傷をつけたキサマからだッ!!」

「傷をつけた……?!シンラッ!避ける!!」

「わ、分かった!!」

フィールドの指示を空へ飛ぶシンラ。その間にサザンドラは先ほど彼がいた場所を通り過ぎ、近くの岩に派手にぶつかりその場に崩れ落ちた。

さらに岩が脆かったためか崩れ落ちてきてサザンドラは埋もれてしまった。

「…あぶねえあぶねえ……」

小さく溜め息をつくシンラ。どうやらしばらくは攻撃が来ないと分かったのか緊張が解けたようだ。もちろん、それはキュベレーとエレナも同じである。

ただ、フィールドだけはどうしても腑に落ちないような表情をしていた。

——あれほど俺達を逃がさないと言ったサザンドラ（奴）があんな攻撃で終わるはずがない……！——

フィールドがそう思い上を見上げた刹那、シンラの背後に黒い影が迫っているのが目に入った。

「シンラッ！！後ろだ！！」

「ん……ってうわっ！！？」

シンラが後ろを振り向いた時にはサザンドラは手についた顔と共に彼に牙を向け今でも噛み付ける所まで近づいていた。シンラは噛み付かれる寸前でなんとか避ける。

「あ……危なかったね……」

「本当。でも良かったわ……」

キュベレー達は安堵の表情を浮かべシンラを見ていた。しかし、それも束の間だった。

「……あ……なんだ……あれ……」

フィルドが小さく呟きながら目を凝らす。キュベレー達もつられてシンラをよく見ると彼の脇腹から何かが散ったように映った。それは重力に引かれるように落ちていきそのうちいくつかはフィルド達の近くに落ちた。

「これって…血……だよね…？」

キュベレーが地面に染みる何かを見て恐る恐る口を開いた時――

「ぐ……ぐわあああああ！？」

上空から悲鳴が響き渡った。フィルド達が見上げるとその声の主――シンラが背中から落ちているのが彼らの視界に入ったのだ。

「シ、シンラ！？しっかりしろ！！？落ちてるぞ！！！」

「シンラ君！！飛んでー！！！」

フィルドとキュベレーが大声をかけてみたものの聞こえないのか、シンラは返事をする事は愚か翼を動かそうともしなかった。

「私が受け止めるわ！」 蔓の鞭”ツ！！！」

もう間に合わないかと判断したエレナが蔓を出し、フィルドの時のようにシンラを受け止めようとする。

それが功を制したのか地面にぶつかるすれすれのところでシンラを受け止めた。

「シンラー！！しっかりしな――！！！」

「おい……どうしたんだ……って……！！？」

蔓をゆつくりと戻し、シンラを見たエレナは絶句をしてしまう。
シンラの様子を見に来たフィールドとキュベレーも彼を見て固まってしまった。

彼らが絶句をしざるえない訳……それはシンラの右脇腹の羽毛が引きちぎられておりそこから血が溢れて地面に滴っていたためである。しかも、フィールド達は目の前のポケモンが血を流している光景を見た事がないがために戸惑っていた。

「シンラッ！！目を覚ましてよ！！」

声を荒げてシンラの体を揺さ振るエレナ。しかし彼は目を覚まさない。それどころか呼吸はだんだんと浅くなっており危険な状態となっていた。

「と、とにかく安全な場所に運ばないと……」

「そうだな……キュベレー、エレナ頼めるか？俺がサザンドラを引き付けるから」

フィールドは2匹に提案を持ちかける。今の彼女達に囷は危険すぎる、とフィールドが考えたためである。彼の考えが証拠づけるようにキュベレーは血の気が引いており、エレナは少し冷静さを欠けているようにも見えた。

「わ、分かったわ……」

「それとキュベレー、トレジャーバッグを預かってもらえないかな？」

「うん……いいよ」

2匹は承諾するとエレナは蔓を出してシンラを抱え近くの岩場に行こうとする。

「おっと、逃がさねえぜ！！」

しかし、上空で旋回していたサザンドラがエレナに向かって急降下し始めた。

「させるかッ！”波動弾”！！」

フィールドがつかさず”波動弾”を繰り出しサザンドラの動きを止めようとする。サザンドラはスピードに乗っていたため防御姿勢に入る事は出来ずに直撃を食らう。そのおかげもあってか軌道がズレてエレナ達は強襲を受けずに済み、岩蔭に隠れる事が出来た。

一方のサザンドラは地面にぶつかる寸前で急上昇してフィールドを見下す。

「キサマ…よくも邪魔してくれたなッ！！まずはキサマから地獄に送ってやる！！」

「いいさ…やれるものやらやってみろ！！」

怒りを露にするサザンドラにフィールドは手を前に出し来いよ、と合図を送る。

「キサマアアア…！！！！」

この完全なる挑発的な行為にサザンドラの怒りは爆発した。その間にフィールドは反対の手に持っていたもうげきの種を口の中に放り込んで噛み砕く。そしてフィールドはサザンドラに向かって”波動弾”を撃った。

一方のサザンドラも3つの口から”トライアタック”を放つ。2

つの技は両者の中間辺りでぶつかり合った。
しかしそれは一瞬のうちに”波動弾”が”トライアタック”を打ち破った。

「何ッ!？」

”波動弾”はサザンドラに直撃し、爆発を起こす。

「ぐッ……どこにいやがるッ！」

「こつちだよ!！」

爆発によって生み出された煙により視界を奪われたサザンドラに
フィルドが後ろから”波動弾”を繰り出す。

「ぐはッ!！?」

後ろから攻撃を食らいサザンドラは地面に落ちていった。

「……今度こそやった——」

着地してサザンドラが落ちた方向に踵を返したその時だった。フィルドは足が地面から離れる感覚に襲われそれと同時に右腕に何かが噛み付かているような感覚を覚えた。それは次第に噛む力を強めていった。

「ぐうッ……」

痛みに耐えながらもフィルドは噛み付いている手の持ち主——サザンドラを睨んだ。

「……あの時…当たったはず…なのに何で…飛んでいられるんだ…!？」

「そつだな…冥土の土産に教えてやるよ……」

絞りだすように呟いたフィールドに口の端を吊り上げると彼の腕に噛み付いている力をさらに強くする。

「ぐ…ああああ!!」

「キサマは知ってるか？」

”身代わり”という自分の体力を削って分身を作り出す技を……

説明を聞きフィールドは全てを理解した。

（そうか…!!あの時岩にぶつかったのは”身代わり”で出来た分身…本体は俺達が分身が岩に埋もれているところに気をとられている隙に反対側から回り込んでシンラを襲ったんだ…!!そして、さつきも地面に落ちる寸前で”身代わり”を作って俺が油断したところを狙ったんだ!!）

悔しがるフィールドを見てサザンドラは余裕を含めた笑みを作る。もうげきの種を食べて攻撃を底上げにした”波動弾”を食らっても”身代わり”を使えるほどの体力がありまだ使えるのだ、とでも言うてくるような顔に近い笑みだった。

「さて…種明かしはした…お前には逝ってもらおうか!!」

「くッ！！」波動――」

サザンドラは甲高く嗤うとフィールドを連れてさらに上昇した。その速さにフィールドが形成していた”波動弾”は光の粒子となって消えた。

そして、岩が角張っている部分の近くまで上がるとサザンドラはフィールドを掴んでいる腕を大きくしなうて彼を思いっきり叩きつけた。

「かはッ……！？」

ドン、という鈍い音が反響するなかフィールドは背中を感じたあまりの痛さに意識を手放してしまった。

「シンラ、目を開けて……！」

エレナが声をひそめながらもシンラの名前を呼ぶ。キュベレーとエレナは重傷を負ったシンラを連れて岩蔭に身をひそめていたのだ。

「エレナ………」

「シンラ……あなたがいなくなったら私は……！！！」

「エレナッ！落ち着いて……！！」

今にも取り乱しそうになるエレナをキュベレーは必死に宥めていた。しかし、エレナはなかなか冷静さを取り戻せなかった。

（早くエレナを落ち着かせないと……そのためには……！！）

キュベレーは思いついたようにフィールドから預かったトレジャーバッグからピーピーマッスグとオレンの実を何個か取り出した。

すると、キュベレーは器用にピーピーマッスグの蓋を開けて一気に飲み干す。

ちなみにこれはマッスグマという種族が飲むとピーピーマックスと同じPPが回復するのだが、それ以外の種族が飲んでも回復しない——俗に言うそっくり道具と呼ばれるものである。

キュベレーがそれを飲んだ訳は悪い状態異常にならないし持つていてもしょうがないと思ったからである。

そして飲み干すとエレナに近づいた。

「エレナ、応急措置するから手を貸して……！」

「うう……ッ……」

しかし、先ほどから嗚咽ばかりしてまともな返事をしない。

（エレナと一緒に過ごして来たけどこんな状態になるのははじめてだよ……）

しばらく黙ったあと何かを決心したのかキュベレーは大きく深呼吸した。そして——

「……いい加減にしてよ……！いつまでも泣いてるんじゃない、シンラ君は助からないよ……！」

「——ッ……？」

ポケモンに1度も怒った事がないキュベレーがエレナに怒鳴ったのだ。先ほどまで顔を下げていたエレナも思わず顔を上げた。

「エレナは大切な仲間が苦しんでいるのにいつまでも泣いてばかりでいいと思ってるのッ!？」

「それは……………」

「…立ち止まっているなら少しでも最善の方法を探して取りかからないと……………」

そういつてキュベレーは俯く。彼女の頬には一筋の涙が伝っていた。エレナは彼女をしばらく見ていた。

そして――

「そうよね…私っては何で泣いてたのかしら……………そんな事してる暇があるなら先に進まないといけないのにね…」

注意しないと聞き取れないほどの小声で呟いた。

「キュベレー…ありがと！おかげで目が醒めたわ!!」

「エレナ…!!」

「さあて、私は何をすればいいの？」

顔をしっかりと上げて笑顔を見せるエレナ。その表情は先ほどまでの不安な色は消えていた。

キュベレーもいつも通りのエレナに戻れたのを見て安堵の笑みを浮かべた。

「それじゃあね、エレナの蔓でオレンの実を握り潰して欲しいんだ。あ、絞った汁はこの空き瓶に入れてね」
「分かったわ!」

キュベレーは早速オレンの実を数個をエレナに渡す。エレナは蔓の血がついていない部分を使って器用に握り潰す。オレンの実が全て潰された頃には瓶の中は中身があった時とほぼ同じ量になっていた。

「それで…これを飲ませればいいのね？」

キュベレーが頷いたのを確認するとエレナはシンラの脇に立ち膝をする。

「シンラ……これを飲んで……」

蔓を器用に使ってゆっくりと飲ませる。シンラはまだ意識はあるようで絞ったオレンの汁を飲み込んでいった。

「あっ！エレナ、半分ぐらいになったらストップして」

キュベレーが後ろから思い出したように言う。エレナは慎重にシンラの嘴から瓶を離してキュベレーを見上げた。

「キュベレー、どうしたの？」

「んと…ちょっと待って……あつた!！」

キュベレーはトレジャーバッグから何かを取り出す。それは淡いピンクのリボン——ただのリボンである。

「これにね、さっきのオレンの実の汁をつけてシンラ君の患部に巻いてほしいんだ」

「分かったわ」

エレナはキュベレーからリボンを受け取り残りの汁をつけた。そして、蔓を器用に使い染み込ませた部分を患部に当てるように巻いた。

「…うつ……ああ!!」

「シンラ……痛いけど我慢して……」

痛そうに呻くシンラの額をエレナはそつと撫でる。

「さて、私達もフィルド達のところへ行かないと!」

「うん! フィルド1匹で戦わせるのはき——」

ドンッ! ! !

何かがぶつかったような鈍い音が小さく反響し、キュベレーとエレナは顔を見合わせた。

（嫌な予感がする……!!）

キュベレーは不安そうな表情を浮かべながら音が聞こえた方向を見上げた。

「と、とにかく行ってみよう!!」
「ええ!」

キュベレー達は意を決して岩から飛び出した。そこで彼女達は――

「……う……そよね……」

エレナが声を震わしながら呟く。その隣ではキュベレーが今にも泣き出しそうな表情で見上げている。

「次は2匹目だ。ヒヤハハハ!!」

サザンドラは落ちてゆく者を嗤った。

キュベレー達が見た光景――岩から離れて地面へと落下していくフィルドの姿だった。

「フィルド! フィルドおー!!」

気付いた時にはキュベレーは落ちていくフィルドに向かって走りだしていた。しかし――突然後ろに引っ張られるような感覚を感じる。

「エレナ……!? なんで――」

「キュベレー! 前を見て!!」

涙を浮かべながら睨むキュベレーにエレナは前方を指差す。そこには赤紫の炎が火柱となって立ちはだかっていた。

「あとは私がかするから、落ち着きない!!」

シンラを看病している時とは真逆の立場に立ったエレナはキュベレーに詰め寄る。気圧されたキュベレーが頷いたのを確認するとエレナは少し下がって走りだし、炎を跳躍していった。

キュベレーはその様子を見た後火柱を作った要因——空に浮かぶサザンドラを見上げた。

「…いい顔してるじゃねえか…キサマは最後に葬るとしよう……」

一方のサザンドラは邪悪な笑みを浮かべながらキュベレーを見下す。やがて視線を別な方向に変えキュベレーも慌てて目で追うところにはエレナが立っておりフィルドは巨大岩の一角に横たわっていた。右腕には歯形のような模様が刻まれていた。

「エレナ…間に合ったの!？」

「ええ、なんとかギリギリだったけどね……!! キュベレー、危ない!？」

「えっ……きゃあああ!？」

エレナに体を向け無防備なキュベレーにサザンドラが”トライアタック”が襲いかかってきたのだ。

「キュベレー! 大丈夫!？」

「大丈夫——」

キュベレーは立ち上がったがすぐにその場に崩れ落ちてしまう。

「体が…言う事をき…かない…?!」

「キュベレー…まさかさっきの”トライアタック”の追加効果で麻痺を浴びたの!？」

立てずに悪戦苦闘するキュベレー、そして冷静に分析したエレナにサザンドラはそっだ、と言った。

「さて、次はキサマの番だ……」竜の波動”！！”
「させない！」グラスミキサー”！！”

サザンドラは両手から淵が紫色で中心が白色の”竜の波動”を出す。一方のエレナはフィルドの時と同じくもうげきの種を食べると”グラスミキサー”を前方に繰り出した。

両者の技は中間あたりでぶつかり合うと”波動弾”と”竜の息吹き”と同じように爆発を起こす。しかし、今度はすざましい突風を起こったためエレナは思わず目を細める。そして、後ろに下がり蔓を出して自分の目の前にクロスした。

すると、サザンドラがスピードに乗ってエレナに——正確は彼女の蔓に噛み付いてきたのだ。

「なるほどな……俺がキサマに噛み付くと予想して防御したんだなあ……だが——」

サザンドラは自らの口を開けると紫と白のエネルギーを溜めはじめる。

（……やばッ！！離れないと——！！）

エレナはサザンドラが”竜の波動”を出すと分かり距離を置こうとしたが——

「……ッ！！離れない……！！？」

蔓に噛み付いた手が離そうとしなかった。しかもサザンドラはただ噛み付いているのではなく前方に押しながらやっているのである。さらに押す力も強い。ため両足で支えているのが精一杯であるので自慢の足技も使えないのだ。

（どうすれば……離れるの!？）

エレナが必死にもがいている間にもサザンドラはエネルギーを着実に溜めていた。そして――

「終わりだッ!!」 竜の波動”!!」

「きゃあああ!――!」

サザンドラの零距离で” 竜の波動” はエレナと彼女の悲鳴を呑み込み吹き飛ばしてしまった。

一方キュベレーは痺れた体をゆっくりと動かしながらもフィールドの所へと歩いていった。そして、辿り着くとトレジャーバッグを下ろして中から芽が出ている種を取り出し彼の口に運んだ。

「復活の種……効き目があればいいけど……」

キュベレーは呟くとフィールドの額をいとおしく撫でる。すると、立て掛けていたトレジャーバッグがドサリと音を立てて倒れたのだ。さらに開けっ放しであったため、中身が少し散らかった。

(……何だろう……胸騒ぎがする……)

胸に押し寄せる不安と闘いながらもキュベレーは荷物をバッグの中にいれた。

そして、最後の1つ——時空のオーブに手を伸ばそうとした時彼女の後ろでドサツ、と何か落ちたような音が聞こえてきた。

キュベレーが恐る恐る振り向くとそこには身体中に傷を負ったエレナが倒れていたのだ。

「……！！エ、エレナ！？」

キュベレーはトレジャーバッグをそのままにしてエレナの所へ行こうとするが――

「――！？」

彼女の目の前にゆっくりと現れた黒い影によって阻まれてしまう。

「……！ほ、”炎の渦”……！！」

声を上げさせながらもキュベレーは目の前の影に”炎の渦”を放ち、相手を閉じ込める。しかし、”炎の渦”は突如現れた”竜の息吹き”によりかき消されてしまい、紫色の炎はキュベレーの頬を掠めた。

「っ……！？」

キュベレーは思わず顔を歪めるが再び近づいてきた影——笑みを浮かべたサザンドラにより先ほど受けた痛みよりも恐怖の感情が勝っていた。

「――！！（こ…来ないでッ！！）」

声に出そうとしても発するのは吐息と間違えそうな擦れた^{かす}声。恐怖のあまりに動けない体。キュベレーはサザンドラが纏っている威圧感に全てを束縛されてしまった。

そんな彼女を見て更に笑みを深めて迫るサザンドラ。そして彼は

「あ……う……！！」

両手を伸ばしてキュベレーの首を締め始めた。…いや、噛み付いたが正しいだろう。

「ようやくメインディッシュに手を伸ばせた……さてついでに教えるか…俺が大好きな事を………」

上へと上昇しながらサザンドラは無邪気な子供のようににやける。それがかえって彼の不気味さをさらに増した。

「……くッ……俺…生きてるのか……？」

ほぼ同じ頃キュベレーが復活の種が効いたのかフィールドが静かに目を開けた。そして彼は近くに倒れていたエレナに目が入る。

「エレナッ！？どうした……ッ！？」

エレナの元に行こうと立ち上がったフィールドに背中からの激痛が牙を向き片膝をついてしまう。

「…しぶといガキだな…まあいい。俺の好きな事が一気に堪能出来る…キサマにも聞かせてやろう…」

「…！！キュベレー！？」

満足げに言ったサザンドラの声にフィルドは見上げるとそこにはキュベレーの華奢な首に両手を咬ませているサザンドラが目に入っ
た。

「お前…何をしてるのか分かってるのか！？キュベレーを放せツ！
！」

「クツクツ…俺の大好きな事…それは……」

フィルドが片膝をつきながら叫ぶがサザンドラは全く耳を傾けようとはしない。それどころか2つの口がキュベレーの首をさらに噛み締めていく力を強めていった。

「うう……ああ……」

「それはな…首を折った時に発する断末魔と大切なモノを目の前で失って絶望に打ち付けられる者達の叫びさツ！！」

「やめろおおおおお！！！！」

狂ったように嗤いながら力を強めるサザンドラ。そして――

――グギッ

「——ッ！——！」

骨が折れたような嫌な音が響いた時、キュベレーはこれ以上もないくらいに大きく目を見開いて声にならない奇声を発した。

「う……うわああああ……！」

「ヒヤアアハハハッ！——いいぞ……キサマの悲鳴！もつと喚けえ——！」

耳を塞ぎ叫ぶフィールド、快感を覚え狂ったように嗤うサザンドラ、そしてキュベレーの悲鳴。3つの声が祭壇に反響した。

（俺は……キュベレーや皆を守れないのか……力がないから……俺が弱いから……！——）

叫びながらフィールドは自分を責めた。

（力が欲しい……目の前で大切なヒトを失いたくない……だから……ッ！——）

——フィールドよ……汝は力を求めるのか？

「……！……？あの時の……声……？」

『忘れ去られた抜け道』でも聞いた声がフィールドの頭の中に響く。

「ああ…欲しい!!」

—— なんのために求めるのか… 我に証明するがよい…!!

声が響いた瞬間、フィールドは目の前の風景が歪んだように見えた。
やがて全ての動きが遅くなる感覚がフィールドを包む。

(これは…あの時と同じ…)

フィールドはその感覚に委ねると気を失ってその場に倒れた。

2 2 現れた本性 完

#22 現れた本性（後書き）

さて、今年も残すところあと4日となりました。

せめてこの重い話を年内には終わらせたいと思います！！

……たぶん（殴）

#23 求めし力、救いたい意志（前書き）

年内にシリアスゾーンを抜けたいと思いましたが間に合いそうにな
いので先延ばしd（殴）

また焦って更新したため誤字脱字があるかもです（いつもあるだろ）

では、第23話をどうぞ！

#23 求めし力、救いたい意志

「……ッ！？ここは……」

フィールドが意識を取り戻し目を開けると、そこは先ほどいた場所とは違った景色が広がっていた。周りは漆黒に覆われているが、フィールドの視線の先には小さな円型の光が差し込んでいた。

（とりあえず、あそこに行ってみるしかないな……）

フィールドはおもむろに立ち上がると光に向かって歩き出す。しかし、光は彼の動きに反応して逃げるように移動をはじめてしまう。

「……！！待ってくれ……！！」

フィールドも追うように速歩きにそして、走りはじめた。また、光もそれに合わせて逃げるスピードを上げていく。

「なんで逃げるんだ！？こうしてる間にもキュベレーが苦しめるのに……！！」

走ってる間もフィールドはあの光景を――サザンドラに首を折られて悲鳴を迸らせるキュベレーを思い返していた。それが脳内を過るよぎ度に彼の気持ちをさらに焦らせる。

「待ってくれ！俺はこんな所で立ち止まっている訳にはいかないんだッ！！俺は……力が欲しいんだ……皆を守る力を、キュベレーを助ける力を……ッ！！」

ありつただけの想いを口にした時、光がピタツと止まった。まるでフィルドを待つてるかのように。彼は走るスピードをだんだんと緩める。そして、彼が光の輪に入った時――

「うわっ!？」

光が発光し、周りを一瞬で包み込んだ。あまりの眩しさにフィルドは思わず目を閉じた。

そして、しばらく経ち目を開けてみると周りは先ほどよりは少し明るくはなったもののまだ暗闇が支配していた。

しかし、先ほどなかったはずのあるものが暗闇の中にフィルドの周りを囲うように立っていた。また、天井は何カ所か穴が開いているように細くて小さな光が差し込んでいた。

フィルドは天井を見上げていると彼の耳が微かに動く。そして、彼が振り返ると、ドスンドスンと遠くから足音が聞こえはじめた。それは近づいているのかだんだんと大きくなっていく。

フィルドも音が近づいてくる度に後退りしたが――

「……ッ!！」

背中に感じたひんやりとした感覚が彼の動きを止めた。フィルドは思わず振り返るとそこには一際デカイ銀色の岩がそびえ立っていたのだ。

やがて足音の持ち主は光を遮ってフィルドの前に立った。そして、遮られた光は地面を照らせない代わりにその者の一部を照らす。

「待っていたぞ……フィルドよ……汝と直接対話出来る日を……」

「……あ、まさか俺に語りかけてきたやつか……!？」

沈黙を打ち破るエコーを含めた威厳に満ちた声。フィルドはその

声を聞き自分の頭に語りかけてきたポケモンだとすぐ理解した。

「フィールドよ……汝は力が欲しいと言ったな……」

間髪入れずにそのポケモンは言葉を紡ぐ。

「ああ、俺達がこうして話してる間にも大切な仲間がやられているんだ。今も……」

フィールドは言葉を区切ると俯いて唇を噛んだ。——こうしてる間にもキュベレーが……早く戻らないと——

「だから力が欲しいんだ……エレナやシンラ、そしてキュベレーを……俺の大切な人達ポケモンを守りたいんだッ!!」

そして、再び目の前にいる者を見据えてはつきりと伝えた。自分が力を求める意味を。ポケモンはしばらく黙っていたが——

「それが汝の覚悟か……やはり昔と変わらぬな……」

そう呟いた。しかし、最後の部分は注意しないと聞き取れないほどでボソボソと呟いていた。

「えっ……それはどういう——」

「聞こえていたか……だが今の汝にはまだ早い……」

フィールドは小声の部分も拾って問おうとしたが、ポケモンは遠回しに拒んだ。

「さて、汝の覚悟と願い——しかと聞かせてもらった……我が力を貸

そう!!」

ポケモンが高らかに言う光が強くなった。1回目と変わらない光の強さにフィールドは再び目を閉じた。

そして目を開けた時、フィールドの目の前には彼よりも遥かに大きく青い体に4本足で、額は黒2本の角が短く生えており、人間に若干近い顔立ちのポケモンが立っていた。

「我が名はコバルオン。この世界を見護りし者の1匹だ」

「世界を見護りし者……」

フィールドが反復するとコバルオンは静かに頷いた。

「フィールドよ…我が力はある方から生み出されたもの……それは使い方によってはポケモンの命を容易く奪^{たやす}ってしまうものだ…」

コバルオンは説明をしながらゆっくりと右前足を伸ばした。

「汝はこの力を悪意に染めずに見極めて使えと言うなら手を出すとよい」

フィールドは黙って差し出された彼の足を見る。まるで復讐や仕返しのために相手の命も奪うな、とでも言ってるようにも聞こえた。

「…ああ、分かった。だから改めて言わせてもらえないかな？」

コバルオン……お前の力を貸してくれ!!」

「承知した…我が力、汝が守りし者達に使うがよい!!」

フィールドも右手を出しコバルオンの前足に触れた瞬間――

「なッ……!？」

フィールドは意識が飛んでいく感覚に襲われた。

「忘れ去られた抜け道」

「!?!?今…フィールドさんの声が聞こえた…」

『忘れ去られた抜け道』にジュードと一緒に戻ってきたリョウトは分かれ道の部分で耳をピクピクと動かした。

「とにかくフィールドさん達はこっちの道に行っただよね……」

首を捻りながら言ったジュードにリョウトは頷く。

「とにかくいってみるしかないよね」

「そうだね」

決心づいたようにリョウトが言って走りだすとジュードは相槌を打って彼の後を追いつけた。

そして、偶然にも敵に会わずに進んでいくと――

「――ッ！――！」

「あうッ！？」

「何……！？……この……空気をつんざくような奇声は……！？」

リョウト達に風によって運ばれた声なき奇声が浴びせられた。

その声は不快音として耳に残り耳を塞いで地面に突っ伏したリョウト達を苦しめた。さらに――

「う……うわあああああ……！！！」

「ヒャアアハハハッ！！……いいぞ……キサマの悲鳴！もつと喚けえ！！！」

今度は聞き覚えのある悲鳴と低い声で嗤う声が彼らの耳に入ってきた。

「今の悲鳴………やっぱりフィールドさんだよ！」

「じゃあもう1つは………とにかく行ってみないと分からないね」

立ち上がりながら確信したように言うリョウトにジュードは嫌な予感しかないけど……、と付け加えながら促した。ちなみに彼らが

奥に進んでる間は野生のポケモン達は奥から響き渡った3つの音に驚いていたためか全く襲わなかったそうだ。

く導きの祭壇く

リョウトとジュードは祭壇近くまで行くと彼ら入り口の両脇で待機する。そして、慎重に覗き込むと2匹には信じられない光景が目に入った。

(…！シンラさん…ッ！！)

近くの岩陰に眠るように横たわっていたシンラを見つけたジュード。そして、フィルド達の姿を探してた時――

「…喚き疲れて気を失ったようだなあ」

祭壇に響き渡った低い声。それは先ほど『忘れ去られた抜け道』で聞いた嗤い声と見事に合っていた。2匹は顔を見合わせて覗くと空中には声の持ち主であるサザンドラが空中に浮いており、彼の右手には首を掴まれたキュベレーが力なくぶら下がっていた。

さらにサザンドラの視線を追っていくとフィルドが、その近くではエレナが倒れていた。

「そんな…『サンライズ』の皆さんがやられているなんて……」

サザンドラに気付かれないように小声で呟いたリョウト。その声は微かに震えていた。一方のジュードは打開策を必死に練っていた。

（僕達はまだ戦い慣れしてない……技を当てるなら確実に決めないと…それにキュベレーさんに当たったら一大事だから……）

しばらく考えていたが、やがて決心づいたのかリョウトに視線を送る。

「うん？どうしたの??」

ジュードに気が付きリョウトはサザンドラに察せられないように彼の元へ行く。

「実はね……」

リョウトが来たのを確認すると耳打ちをする。だがリョウトはその内容に不安な表情に変わっていった。

「もし…失敗したら……」

「失敗を恐れちゃダメ……やるかやらないか……だよ」

リョウトの不安な言葉よりも先にジュードはしっかりと標的を見据えながら言う。その言葉を聞き腹を括ったのか、リョウトは懷から先ほど拾ったもっけの種を取り出すと口の中に入れて噛み砕く。

「…それじゃいくよ!」

「うん…！」

ジュードももうげきの種を食べてると黒いエネルギーの塊を形成し始めた。リョウトも同じように作る。

「「シャドーボール」…！」

2匹が作った2つの黒い塊がサザンドラに向けて放たれた。

「新手——何ッ!？」

入り口から聞こえた声に気付くのも時すでに遅し。 ”シャドーボール” はサザンドラのすぐ目の前に迫っていた。当然だが避けられるほどの余裕はなかったため、直撃を許してしまう。

「チッ…誰だ…！」

空中で体勢を直すと鋭く声を張り上げた。彼の問いに答えるように入り口から現れたのは銀色イーブイのリョウトとポチエナのジュードである。

「ほお…探検隊ではなく一般民がきたか……だが、俺はムシの居所が悪いし姿を見たキサマらを逃すつもりはないッ！」

サザンドラはトレジャーバッグを持っていない事から探検隊じゃないと判断した。そして開いている左手をリョウト達に向けながら言い放った。2匹は気圧されつつもサザンドラを睨む。

「 “竜の波動” …！」

先に動いたのはサザンドラだった。彼は左手から紫と白のエネルギー波を2匹に向け放つ。リョウト達は別々の方向にかわすと再び”シャドーボール”を形成し放った。一方のサザンドラは自らの口から緑色の炎”竜の息吹き”を、左手から先ほどと同じ”竜の波動”を出した。

そして4つのエネルギーが空中でぶつかり合うと本日何度目か分からない爆発を引き起こした。

「リョウト!!」

「分かってるよ!!」

ジュードが何かをくわえて走ってきた。リョウトはそれを見計らうと銀色の尻尾を固くして光沢がついた銀色へと変化させた。すると、助走をつけたジュードがリョウトの尻尾に向けてジャンプした。ジュードはリョウトの尻尾に着地する。そして――

「飛んでいって!!」

リョウトは自分の尻尾を思いっきり振ってジュードを煙に向かって飛ばした。ほぼ同時にキュベレーを連れたサザンドラが煙の中から現れた。

（大丈夫…落ち着けばうまくいくはず……）

（最初はポチエナか…ふん、楽に逝かせてやるッ!!）

それぞれが思う中、距離は徐々に縮まってきた。サザンドラは左手を突き出し、さらにスピードに乗ってきた。そして、お互いの距離が10メートルのところへさしかかった時――

（今だ!!）

ジュードはくわえていた何かを放した。それはガラス玉の中に光が凜々と輝いている光の玉という不思議玉の一種である。

（馬鹿め！光の玉はダンジョンの奥地では効力が効かない事を知らないんだな！）

不思議玉は強力な力が閉じ込められている。使えば探検に便利なのだが、サザンドラの思ってる通りダンジョンの奥地やお尋ね者のアジトでは効果は発揮出来ないのである。

サザンドラは勝ち誇った表情をしながら光の玉を噛み砕いた——そこまでは良かった。

光の玉がパリン、と音を立てたと同時にジュードがニヤリと口の端を吊り上げた。すると光の玉が輝きだしたのである。

「馬鹿な——くッ!？」

自分の予想を反して発した光がサザンドラの視界を奪う。その間にジュードは拘束が緩んだ手からキュベレーを奪還し、近くの岩場に降り立った。

光の玉は本来ダンジョンを明るくして敵いる場所や道具が落ちている場所が分かる便利な道具である。その一方で光はかなり強く”フラッシュ”の代わりに目眩ましをして命中精度を下げたりすることもできる。

つまり、”フラッシュ”と同じ用途で使えば不思議玉力は発揮できなくとも相手の目眩ましする事ができるのである。

「ジュード!!!大丈夫だった!？」

慎重に降りてきたジュードにリョウトは駆け寄る。

「僕は大丈夫だよ。それよりキュベレーさんが……」

キュベレーをゆっくりと降ろしながらジュードは暗く言った。彼女の状態は目に光が灯っておらず半開き、呼吸は全くしていなかった。

「……間に合わなかったのか……？」

「……まだ、分からない……とにかく誰かを呼んでこないと……！」

耳をだらんと下がったりヨウト。ジュードは誰かを呼ぶためにその場から離れようとした時だった。

「……くッ!？」

突然反射的に飛び退いた。すると先ほどまでジュードがいた所に山吹色の光線——”破壊光線”が着弾したのである。”破壊光線”が当たった地面は抉れたように浅いお碗型のクレーターが出来ていた。

——もし、これを避けきれなかったら自分はどうなっていただろう——

考えるだけでも身震いしてしまいそうである。しかし、ジュードはその恐怖を胸にしまい込むと上空で滞空するサザンドラを睨んだ。

「次は逃さないぞッ!……」

サザンドラは力強く言うのと体勢を低くしてリヨウト達に突進してきた。

(……ッ！？…動かない…！！)

先ほどのキュベレーを無事に奪還した時に力を出し切ったのか、リョウトは体を動かす事が出来なかったのだ。それはジュードも同じで彼も立ち上がるうとしてもその場に何度も崩れ落ちた。

「…キュベレーさんを助ける事で精一杯で……助けた後どうするか…考えてなかったよ……」

悔しそうに呟くジュード。

(このままじゃ…やられる……！！)

スピードを上げて迫るサザンドラ。リョウトは自分の目の前にある不思議な球体が視界に入った。最後の力を振り絞って球体———時空のオーブの黄色の曲線をくわえてさらに自分の右前足を使って高く掲げた。

「リョウトッ！？逃げるんだ！！」

ジュードは叫ぶがサザンドラはリョウトのすぐ目の前に迫って来て噛み付こうとしていた。ジュードは諦めて目を強く瞑った。しかし———

「ぐわああああ！？」

聞こえてきたのはサザンドラの悲鳴だった。閉じた瞼をゆっくりと開けるとリョウトが持っていた———アクアブルー色に変わった球体から出たいくつもの水色の光の軌跡がサザンドラを貫いているのが見えた。そして、サザンドラはスローモーションで落ちていった。

相性が良かったのかそれとも急所に当たったのか、サザンドラは苦しそうに悶える。

一方のリョウトは目の前の光景を把握出来ずに目をぱちくりとしていた。そんな彼に球体は光を生み出す。その光はリョウトの前までゆっくりと降りてくると水色のスカーフへと姿を変え地面へと落下、球体も輝きを収めるとゆっくりと地面に着地した。

「ジュード、これ見——」

「リョウト……！！危ないッ！！」

スカーフをくわえて振り返ろうとしたリョウトにジュードは血相を変えて叫ぶ。ほぼ同時にサザンドラは地面に這いつくばった状態で”トライアタック”を繰り出した。

リョウトが首を戻した時には”トライアタック”はフメートルくらいまで迫っていた。その瞬間、時間の流れがゆっくりとなる感覚に襲われた。

足を動かそうとしても鉛が付いているようで重たく感じた。

——もうダメだ……！！——

リョウトがそう思った時、彼の視界にある影が入る。その影は手を前に出し緑色の結界”守る”を形成し”トライアタック”を受け止めた。

「本当にしぶといガキだな……！！」

サザンドラは空中にうきながら忌々しく呟く。

「……キュベレーを助けてくれてありがとうございます。あとは……俺に任せてください……！！」

やや幼さが残る声を聞きどこか安心感を覚えたリヨウトは何度も
頷き、ジュードの元へと走った。

「さて、今度こそこっちの番だ!!」

リヨウトを一瞥しサザンドラに向き合った少年——フィールドは両
手を打ちながらサザンドラを見上げた。

#23 求める力、救いたい意志 完

#23 求めし力、救いたい意志（後書き）

フィールド「また微妙な所で切りやがって……まあいいや」

（ほっ……）では、また来年で会いましょう！！

フィールド・作者

「良いお年を！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3295w/>

ポケモン不思議のダンジョン 探検隊サンライズの冒険語 第1部～時限(とき)を

2011年12月31日18時52分発行